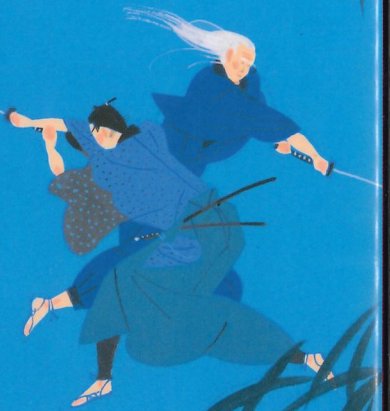
高橋義夫

かげろう飛脚

鬼悠市（おにゆういち）風信帖



文春文庫

著者紹介

高橋義夫(たかはし・よしお)

昭和20(1945)年、千葉県船橋市生れ。早大仏文科卒。出版社勤務、広告会社の共同経営を経て、作家として独立。平成4年「狼奉行」で第106回直木賞を受賞。著書に「田舎暮らしの探求」「かくれんぼの森」「闇の葬列」「黄塵日記」「風吹峠」「大江戸あぶれ者」「密命」「湯けむり浄土」「猿屋形」「どくろ化粧」など多数。

文春文庫

かげろう飛脚
鬼悠市 風信帖
高橋義夫
た 36 9
文春文庫
533 +税

9784167572099
1920193005332

六尺豊かな鬼悠市は、東北の松ケ岡(まつがおか)藩(うき)の御家人では最も格の低い浮組(ぶくみ)の足軽である。表向きは定まった役目がなく、竹の鳥籠をこしらえるのが仕事で、養子の柿太郎とともに静かに暮している。が、奏者番・加納正右衛門から密命を受ける裏の役目もあった。今度下った役は、分家の元家老の警護というものだった。シリーズ第二弾。

ISBN4-16-757209-5
C0193 ¥533E
定価(本体533円+税)

た 36 9

文春文庫

文春文庫
高橋義夫の本

狼奉行
風魔山嶽党
浄瑠璃坂の仇討ち
眠る鬼 鬼悠市 風信帖
武闘の大地
天保世なおし廻状
海賊奉行
かげろう飛脚 鬼悠市 風信帖

カバーイラスト・西のぼる
カバーデザイン・藤井靖子

文春文庫

かげろう飛脚

鬼悠市 風信帖

高橋義夫

文藝春秋

かげろう飛脚
鬼悠市 風信帖
高橋義夫

文春文庫

文春文庫

かげろう飛脚

鬼悠市 風信帖

高橋義夫

文藝春秋

目次

紙の米 7
首斬り勘兵衛 69
目早の北溟 125
ゆかまい坂 181
鬼の道行 231

かげろう飛脚

鬼悠市　風信帖

単行本　二〇〇三年二月　文藝春秋刊

紙の米

一

上が広く下はすぼまり、形は備前焼の水瓶を模している。細い竹のかすかな色合いの加減で、籠の中に雲が浮いているように見える。材料の竹を選ぶのに、鬼悠市は苦労をした。「浮雲」と名づけたその鳥籠を白絹の布で包み、悠市は竹林の家を出た。

悠市は六尺豊かな巨漢である。目、鼻、口、顔の造作がすべて大きく、肌が白い。怒ると顔面が朱に染まり、さながら鬼の面となる。鳥籠をかかえた悠市は、ややうつむき加減で、沈んだ表情で歩いていた。奏者番の加納正右衛門から、今朝、急に鳥籠を一つ持って屋敷に参上せよと命じられたのだった。

悠市は松ヶ岡藩の御家人ではもっとも格の低い浮組の足軽である。表向きは定まった役目がなく、鳥籠をこしらえるのが仕事の職人だった。悠市が編む鳥籠は、その優美で精妙な細工が、鬼の鳥籠の名で、江戸、上方まで知られている。松ヶ岡領内では売買が禁じられていた。鳥籠の注文は、何カ月も前に通知されるもので、加納正右衛門から急に呼び出されるのは、これまでの例からいえば、極秘の任務をいいつけられるときだった。

加納の屋敷は大手門前にある。武家屋敷の庭には柿や栗が植えられ、大手門の奥には杉林があり松ヶ岡城の本丸をかくしている。あたりは昼でも暗い林の奥のようである。加納の家の門構えは家格のわりには貧相だった。

「お頼み申します。鬼悠市が献上の品を持参いたしました。お取次を願います」

悠市は大きな声を張り上げた。城の濠をのぞむ通りには人影もなく、ひっそり静まり返っている。閂を外す音がして、扉が開いた。門番は悠市とは目を合わせず、献上の鳥籠に向かってはあっとかしこまった声を上げ、うやうやしく礼をした。

悠市は庭に面した座敷に通された。庭には苔むした石が置かれ、庭木がうっそうとして、山奥に入りこんだような錯覚をおこす。栗の木の枝を栗鼠がつたい歩きしている。珍しく長く待たせずに、加納が座敷に入って来た。頬が豊かで目尻が下がり、伸びた眉毛の先が垂れ、七福神の恵比須天を想わせるが、眼光は鋭く、腹の裡でなにを考えているのか、得体の知れないところがある。

加納は肥った身体を持て余すように揺すりながら坐り、呼吸をはずませて鼻を鳴らした。

「献上の品、持参いたしました」

悠市は鳥籠を額の高さに捧げ持ち、膝行して加納に寄った。加納は頭を下げて受けとり、鳥籠を床の間に置いた。膝に両手をそろえ、あらたまった姿勢で鳥籠を眺めてから、身体を悠市に向けた。

「はじめて見た。工夫をしたな」

「浮雲と名づけてみました」

「なるほど、鳥籠の中を雲が流れるか。これはみごとな趣向だ。気宇壮大になる」

加納が悠市の仕事を褒めることは、めったにない。おそれいりますと、つぶやくような小声でいい、悠市は軽く頭を下げた。加納は膝に片肘をつき身を乗り出した。

「もうひとつ、鬼の仕事がある」

「はっ」

悠市の顔に蒼味が加わったように見える。

「隠居を一人、長源寺で世話をすることになった。鬼にめんどうを見てもらう」

と、加納がいった。

「隠居のめんどう……ですか」

悠市はいぶかしんだ。

「うむ。隠居と申すのは、御分家の元家老、日向杢兵衛殿だ。事情があって、本家でしばらくお預かりすることにした。打ち明けて申すが、日向殿に罪科があってのお預かりではない。しかし長源寺の境内から、一歩でも出てもらっては困る。来客も許さぬ。これは、鬼でなければ務まらぬ役目だ」

加納はいっそう声を低くして、あるいは刺客が潜入するかもしれぬが、日向杢兵衛には一指も触れさせてはならぬといった。

「足軽目付に長源寺を見張らせるが、境内には立入りを禁じてある。境内では鬼が奉行だ。逆らう者、怪しい者は斬り捨ててかまわぬ」

「承知いたしました。一命にかえて日向様をお守りいたします」

「だが、日向殿を籠の外に逃がしてはならぬぞ。心しておけ。場合によっては……」

加納は指を立て、顔の前で小さく振ってみせた。日向杢兵衛の暗殺もまた、悠市の任務だというのである。

「はっ」

悠市の顔が暗く曇った。両手をつき、後じさりをしかけたとき、加納が片手を上げた。

「日向殿のお世話を、柿太郎にさせるとよい。あれはよく気がつく」

悠市の養子の柿太郎にも任務を与えようというのだった。

日向杢兵衛はまだ夜も明けやらぬうちに、駕籠に乗せられて長源寺に送り届けられた。徒目付と同心が付き添っていたが、役僧に引きつぎをして、すぐに帰って行った。悠市

は十五になる養子の柿太郎をともない、提灯を提げて長源寺におもむいた。

長源寺には代々の主君の墓がある。裏手の竹林の奥に鬼家の屋敷があり、竹林の竹と筍は、勝手次第に採ることを許されていた。境内に数寄屋造りの離れ家があり、障子が燭台の灯を映して明るい。沓脱石の前から、悠市が声をかけた。丈の低い障子が引きあけられ、役僧の秀因が片手をついて顔を突き出した。

「浮組足軽の鬼悠市にございます。御客の御世話を申しつかりました」

悠市は李兵衛にきこえるような大きな声を張り上げた。

「おお、鬼が参りました」

と、秀因が剽軽な口調で応じる。秀因の頭がひっこみ、入れかわりに李兵衛が這い出して来て、縁側に膝をそろえて坐った。

李兵衛は四十になったばかりのはずだが、髪が白く、痩せて、提灯の明かりで陰翳が強調されるせいか、皺ばんだ老人のように見えた。元家老という身分らしからぬへりくだった口調で、

「お名前はうけたまわっております。厄介になります」

といい、頭を下げた。肩が薄く見えるが、背筋は伸びている。あえて名乗りはしなかった。

「この者はみどもの子で、柿太郎と申します。御客殿御逗留中、御側に仕えさせますので、なんなりと用をおいいつけください」

悠市は柿太郎の背を押した。柿太郎が一礼して、名乗った。李兵衛は相好を崩し、

「頼もしげな若衆ですな。頼みますよ」

と、声をかける。柿太郎は頼もしげといわれ、顔を赧らめた。

挨拶をすませると、悠市は柿太郎を離れ家に残し、竹林の家にもどった。細竹を短く切って作った呼笛を、柿太郎に持たせてある。変事があればただちに呼笛を吹くように、柿太郎にいいふくめておいた。

分家の黒岩藩は二万石に少し足りない石高で、そのうち一万二千石ほどは、遠く離れた三カ所の飛地から上がる。貧しい藩だが、大名の格式は帝鑑の間詰で、重い役目を幕府から仰せつかることがあり、つねに分不相応の出費がある。当主は本家の松ヶ岡藩から養子に入った相之助で、いまの名は水巻石見守忠正である。当主と先代からの重臣との折り合いが悪く、家中が騒がしいという噂は、悠市の耳にも入っていた。家老の日向李兵衛は、学問もあり人望も篤く、小藩にはもったいない人材だと評判のよい人物である。その李兵衛がなぜ家老を免ぜられ、隠居して本家に預けられなければならないのか、悠市は事情を知らされていなかった。

その日の昼下がり、堆積した竹の葉を踏む音がしたので、悠市は警戒して裏から出て、納屋の蔭から様子をうかがった。足軽目付の組頭、竹熊与一郎が土間をのぞきこんでい

た。形ばかりだが、悠市は竹熊の組下ということになっている。

「頭」

悠市が背後から声をかけると、竹熊はわっと声を上げ、二、三歩横に足を運んだ。悠市の顔を見て、肩を怒らせ下唇を突き出し、虚勢を張った。

「いきなりうしろから大声を出すものではない。驚くではないか」

巨漢の悠市と向き合うと、竹熊の頭は顎の下あたりになる。竹熊は胸を張り、顎を突き出して、悠市を見上げた。

「なにか御用ですか」

「いや、さし迫った用というものはない」

竹熊は悠市が上がれともいわぬうちに先に立って土間に入り、上がりかまちに腰を下ろし、帯の煙草入れを外した。悠市が煙草盆をさし出すと、煙草を詰めて火口を火種まで持って行きながら、それとなく家の中の様子に目を配る。一口吸って煙を吐き、

「長源寺の離れの客は、鬼が世話をするそうだな」

と、悠市の顔をうかがい見た。足軽目付は長源寺の警護を命じられているが、くわしい事情をきかされず、境内への立入りは禁じられている。それで、組頭の竹熊は悠市に事情をききに来たのである。

「いえ、みどもが世話をするのではありません。柿太郎をやりました」

「なんだ、柿太郎を付けたのか」

竹熊は眉根を寄せて、不満そうに悠市を見た。

「客が誰だか、もちろん知っているのだろうな」

竹熊は念を押すようにいう。悠市は黙って小さくうなずいた。

「それならば申すが、柿太郎はしっかりしているといっても、少年だ。拙者は納得できん。そのことについては、拙者からかれこれ指図をする立場でもないが、もしものことがあったら、柿太郎の一命にかかわるだけではない、お家の大事ともなるぞ」

「はあ」

話が通じぬふりをして、悠市は竹熊の言葉を待つ。竹熊は悠市の胆を探るような目で見た。実は、ここだけの話だが……と、声を低くした。

「御分家の江戸屋敷が神田橋にある。その屋敷内御長屋前の井戸に、若殿様御傅の野田九郎右衛門がはまって死んだのが一月前のことだ。御分家では内密にしようとしたが、当家にも親類筋はあり、噂は伝わる。野田殿は誤って井戸に落ちたのではない。覚悟の入水だ。両刀は御長屋に置いて、下帯ひとつの裸だったという。遺書はないらしいが、御分家大殿様が若殿様に賄料を下されず、このままでは家臣一同餓えるしかないと、痩せた身体をさらして当てつけの入水だったという話だ。その一件以来、御分家はごたごたつづきで、御家老が御本家預かりになったのも、そのことにかかわりがある。江戸

屋敷から刺客が来るとか、黒岩から来るとか、いや御家の中にも御家老を憎く思う一派があり、ひそかに命を狙っているとか、ともかくいつ何者が押しこんで来るかわからぬのだ。柿太郎の手に余ると心配するのは当たり前だろう。おぬしは心配せぬのか」

「柿太郎には御客が食するものは何であれ毒見をせいと申しつけてあります」

「なにが毒見だ」

竹熊は本気で怒り出した。

「どこの誰が命をとりに来るかもわからぬ。それも一人や二人ではない。毒見だと。呑気なことを申すな。拙者は知らんぞ。日向様にもしものことがあっても、足軽目付の落度ではないぞ。知らん、もう知らん」

といい、吐月峰に煙管の雁首を叩きつけて腰を上げた。

二

早朝、長源寺の境内から木刀で木を撃つ乾いた高い音が響いた。柿太郎がひとりで稽古に励んでいるのである。木刀の音は平穏無事のしらせでもあった。

やがて竹林が明るくなり、長源寺の鐘楼から明け六つの鐘が鳴り響き、木刀の音がやんだ。日向李兵衛が長源寺に預けられてから、三日目の朝である。悠市は裏の井戸に行き、水を汲んだ。

桶に水を移し替えながら、ふと竹の葉が擦れる音が気になった。悠市は竹林を透かし見た。竹林の奥に窪みがある。笠らしきものが動くのを、悠市は見のがさなかった。

気づかぬふりをして、桶を提げて土間に入る。大刀を腰に差し、二尺ほどの長さの弓の折れたものを手にして、裏口から外に出た。竹林の地形は知りつくしている。迂回して斜面を登り、小高くなったあたりから、身を低くして窪みをうかがった。そこからは竹林と長源寺の杉木立が目かくしになり、境内は見ることができないが、鬼の家はうかがえる。

笠をかぶり蓑をつけた農民の身なりの男が、窪みに身を潜めていた。ときおり首を伸ばして様子をうかがう。背負籠が脇に置いてあるが、中は空のようである。農民を装う小道具に過ぎないと、悠市は見てとった。武器はなにも携えていないようである。

竹に触れぬように用心しながら、悠市は窪みに近づいた。笠の男は気づかず、窪みに腹這いになり縁から身を乗り出した。

「曲者、動くな」

悠市は大声を放った。笠の男は身を固くする。悠市は駈け寄り、籠を蹴って武器がかくされていないことを確かめた。

「笠をとれ」

その言葉が終らぬうちに、弓の折れの先で男の笠を撥ね上げる。笠が外れ、男の顔があらわれた。日焼けした若い男である。身体つきはがっしりして、腕が太く、いかにも力がありそうである。

「この竹林がどのような場所か心得ておるな。無断で入りこんだ者は、斬り捨て御免となっておる」

と、悠市は脅した。男は両手を合せて、

「勘弁してください。おれは岡丁持で……」

岡丁持は甘木川で川船から陸揚げした荷を、土蔵まで運ぶ人足である。たしかに男の身体つきは、岡丁持の特徴をあらわしている。

「岡丁持がなぜ竹林に入りこんで、みどもの家をうかがう。誰に頼まれたか白状しろ」

「怪しい者じゃありません。御用の筋ですよ」

男はいなおった口調になり、立ち上がった。膝についた土を両手で払う。悠市は左手を刀に当てた。男は驚いて後じさりし、足をとられ尻餅をついた。

「御用と申したな。御用をたばかると重い咎めがあるぞ」

「嘘じゃありません。足軽目付の旦那に雇われたんで」

男の声がうわずった。

「来い。逃げようとすれば容赦なく斬り捨てる」

悠市は男をさきに立たせ、弓の折れで背中を突いた。竹林を通り抜け、寺町の通りに出る。築地塀と竹を組んだ建仁寺垣がつらなり、人通りはない。辻に番小屋があった。悠市は目で男に合図をして、番小屋の前に立たせた。腰高障子はあけ放たれている。中から竹熊与一郎が出て来て、悠市を見て気まずそうな顔になった。

「この者、足軽目付の下役に雇われたと申しておりますが、偽りではありませんか」

と、悠市が声をかける。竹熊はそれには答えず、いきなり平手で男の頭を叩いた。

「間抜け。役立たず。べらべらとしゃべりおって」

と、罵倒する。男は頭をかかえ、身を縮めた。

「怪しい者が入りこんだら、自今は問答無用で斬り捨てます。下役にもよくいいきかせてください」

悠市のその言葉を耳にして、竹熊は不快の色をかくさなかった。

「当方にも役目がある。いらざる口出しは遠慮してもらおう」

悠市は身分上は竹熊の組下だが、奏者番の加納正右衛門のじきじきの命を受けて、足軽目付があずかり知らぬ仕事をしている。組頭の自分が踏みつけにされたようで、竹熊はおもしろくないのである。

「竹林の中ではみどもが奉行でございます」

悠市は捨て科白を残して、番小屋に背を向けた。番小屋の中で、足軽目付がわざと舌

打ちをして、

「武士とも呼ばれぬ籠職人輩が、なにを威張っているんだ」

と、きこえよがしにいった。悠市はきき流して、長源寺に足を向けた。

長源寺周辺を警護するはずの足軽目付が下役を使って密偵まがいの動きをさせるのでは、悠市の任務の妨げになるばかりである。しかし悠市には、組頭に指図をする権限はない。

日が傾きかけるころ、悠市は離れ家に挨拶に行った。声をかけると障子があき、柿太郎の顔がのぞく。奥から李兵衛が、

「狭いところだが、遠慮なしにお入りなさい」

と、語りかけた。柿太郎が気をきかせて、外に出た。

「茶をいただいて参ります」

と、ことわり、庫裡へ歩いて行く。悠市は肩をすぼめて這うようにして室内に入った。

李兵衛は軽衫を穿き、茶羽織を羽織っている。脇差も差していず、一見したところ茶人のようである。目尻を下げ、人の好さそうな笑いを浮かべて悠市を迎えた。

「柿太郎はよく気がつく。よいあとつぎに恵まれましたな。まことに羨ましい」

と、いった。

「いや、痛み入ります。まだまだ未熟者でして」

悠市は謙遜した。

「わたくしは世辞など申さぬ。まことに羨ましい。毎朝、稽古に出精しているが、障子の隙間からのぞき見て、感服いたした。十四、五の若衆の太刀筋ではない。末頼もしい武者ですな。わたくしなど見たことのない太刀筋ですが、流派はなにでしょうか」

「自家流の足軽兵法で、流派などというものはございません」

人前でする稽古では、ただ頭上に振りかぶって斬り下げる、それを連続する動作だけを柿太郎に許している。柿太郎は朝稽古ではいいつけを守っているはずだが、その単純な動作を垣間見ただけで、李兵衛はなにかを感じとっている。学問だけの元家老ではなさそうだった。

悠市は膝の上に両手をそろえて正座した。その指に目をとめて、李兵衛は、

「それはりっぱな胼胝ですな」

と、珍しい物を見つけたこどものように目を輝かした。悠市は両手の指を広げて見せた。

「毎日、竹を編んでおりますから、こんな指になりました。ちょいとばかり刃物を滑らせても血が出ません」

「ほう、失礼だが、触らせてもらいます」

李兵衛は悠市の指の胼胝に手を当てて、微笑した。
「鬼の鳥籠、噂にはきいております。御本家から拝領の鳥籠を江戸屋敷で拝見したことがありますが、みごとなものでござった。なるほど、この指からあのような細工が生まれますのか。この指の胼胝は、国の宝ですな」
「おそれいります」
悠市は頭を下げる。李兵衛の言葉には表裏がなく、ただの世辞にはきこえなかった。
「朝方、竹林で騒動があったようですな」
と、話柄を転じて、李兵衛が訊ねた。
「お耳に入りましたか。騒動というほどのことではございません。竹林に網をかけて雀を捕ろうという不心得者がおりましたので、叱りつけただけのことでございます」
「ほう、雀ですか。あれはなかなか美味ですからな」
李兵衛は相好を崩した。悠市の説明を真にうけたとは思えないが、それ以上問い質そうとはしなかった。
床の間に手桶を置き、萩の花が活けてある。床に半紙がひろげてあり、花の部分だけ薄紫に彩色をほどこした萩が描かれていた。悠市は感嘆のため息をもらした。
「隠居殿がお描きになりましたか。活けるがごとくお写しになりましたな」
「手すさびです。人様にお見せするようなものではありません」

李兵衛は半紙をとり上げて、隅に置いた渋紙貼りの葛籠にしまいこんだ。蓋をとったとき、草花を描いたべつの半紙が悠市の目にとまった。
「お隠しになることはありません」
「いや、絵師の真似をしていると思われては本意ではありません。草花を蒐めることに眼目がありますでな」
李兵衛はややはにかんだような口調でいった。李兵衛には本草学のたしなみがあるらしいと、悠市は推察した。
「鬼殿におことわりしておかねばなりませんな。御子息に頼んで、境内の草花を摘んでもらっております。そんな用事をいいつけてもかまいませんか」
「なんなりとお役立てください」
「父上のお許しが出てよかった。いい若衆に花を摘ませるのも、なんだか気の毒な気がしておりましてな」
李兵衛は頭に手を当てて笑った。このようなおだやかな人物がなぜ家老を罷免され、本家に預けられたのか、悠市には見当もつかなかった。

三

早朝柿太郎が稽古する木刀の音が響き、夕暮れが近づくと悠市が離れ家に李兵衛の機嫌をうかがいに行く。平穏な日々がつづいた。李兵衛は書を読み、草花を写して彩色している。縁側までは日光を浴びに出るが、庭下駄を履くことはなかった。退屈もせず、心を乱すこともない。傍目にはそう見えた。

五日目の夕暮れ、暮れ六つの鐘が鳴りおわった直後に、山門の外で怒号がきこえた。なにか揉めごとがあるらしい。悠市は竹林を駈け抜け、離れ家の様子を見た。柿太郎が緊張の面もちで縁側に立ち、両拳を握りしめて山門のほうを注視している。

「隠居殿にお変りはないか」

悠市が声をかけると、柿太郎はほっと安堵の色を顔に浮かべ、うなずいた。

「はい」

「この場から離れるな」

と、悠市は柿太郎にいいつけて、山門に歩み寄った。腰の刀に左手を当てて、山門の中央に仁王立ちになる。薄暗がりの中で、数人が揉み合っていた。

六尺棒を横にして通すまいと立ちはだかっているのは、足軽目付の下役である。

「邪魔だていたすな、どけ」

と、息まく武士の声は、若そうだった。小柄な男が追いすがり、武士をひきとめようとする。顔は見えないが、小柄な身体つきから、竹熊与一郎だとわかった。

「通せ。不忠者に申すことがある。武士らしく、腹を切らせる」

武士はそういっていた。不忠者というのは、日向李兵衛を指しているのだろう。

武士は下役の六尺棒をつかみ、足をかけて倒した。下役の脾腹を蹴り、六尺棒を奪いとり頭上で振りまわす。空気を裂く音が響く。

「手向かいをなさると、痛い目を見ますぞ」

と、竹熊が声をかける。しかし竹熊は及び腰で、武士には近寄ろうとしない。武士は六尺棒を投げつけた。竹熊ともう一人の同僚が飛びしさって棒を避けた。

その隙に、武士が山門に駈け寄った。悠市は無言のまま、大きく両手を広げて、道をふさいだ。

「何者だ。邪魔をするな」

武士は怒鳴った。近くに寄り、顔だちがはっきりわかった。目がつり上がり、唇が震えている。見たことのある顔だった。

悠市は石段を飛び下りた。武士が刀の柄に手をかけると同時に、胸板を蹴り上げる。鈍い音がした。武士は石段の手前に仰向けに倒れた。頭を地面に打ちつけ、気を失った。

番小屋からようやく足軽目付の下役が数人加勢に駈けつけて来た。倒れた武士の両脇に手を入れ、引きずって行く。竹熊がすばやく武士の腰の両刀を帯から鞘ごと抜きとった。そこまで見てから、悠市は身をひるがえして、山門の内にもどった。山門の外は足軽目付の領分である。

離れ家の燭台には火がともり、縁側の同じ場所に柿太郎がたたずんでいた。

「なにほどのこともない。仲間同士の口論だ。門前を騒がすなと、追い払った」

悠市は杢兵衛にきこえるようにいい、手で合図をして、柿太郎を家の中に入れた。

悠市は家にもどり、居間の囲炉裏の火をおこした。そこが煮炊きの場所でもあり、燃え上がる柴が家の中を照らす灯でもある。柿太郎はいつも土間を背にして坐るのだが、その場所が空いただけで、居間が広くなった感じがする。

自在鉤にかけた鍋で、大根の角切りを半分入れた粥を炊く。土間の壺から梅干をとり出し、皿に載せて囲炉裏の枠に置いた。鍋が煮立ち蓋が音を立てはじめたとき、

「通るぞ」

と、横柄な口調でいい、竹熊与一郎が土間に入って来た。悠市は会釈をして、客の座をすすめた。竹熊は腰の刀を外して背後に置き、囲炉裏の前に胡座をかいた。

「手数をかけたな」

と、ぶっきらぼうにいう。それが礼のつもりらしい。

「曲者はどうしました。お調べはすみましたか」

と、悠市が問いかける。竹熊は悠市を斜め下から見上げるようにして、

「帰した」

と、いった。

「帰したのですか。吟味もなさらず……」

悠市は色をなした。柴がはぜて火の粉が散る。竹熊は顔をそむけた。

「仕方がなかろう。足軽目付の役目ではない。相手は士分だからな。御徒頭天利八兵衛殿の御舎弟、要助殿だ。こちらは下役が腹を蹴られたが、怪我はしておらん。相手は胸の骨が折れたようだ。少しやりすぎたのではないか」

「放っておけば境内に駈けこむところでした。それでは足軽目付のお役目が成りませぬ」

「だから、手数をかけたなと、礼を申したではないか」

竹熊はわざとらしく頭を下げてみせた。いかに相手が御徒頭の舎弟で、足軽目付には士分の者を取締る権限がないといっても、目の前で下役を足蹴にした人物を、事情もきかずに家に帰す法はない。

「上のほうから、要助殿をおっ放せと、指示があったのですか」

「きくな。きいてくれるな」

竹熊は顔の前でなにかを追い払う手つきをした。悠市の考える通りだと、認めたも同然である。

「しかし厄介な客を招いてしまったものだ。御分家のごたごたが、お家にも飛び火しかねん。拙者どものような下っ端にはあずかり知らぬことだがな」

「不忠者だの、腹を切らすだのと、きき捨てならぬことを口走っておりましたな」

「お歴々の中にはそう思っておるお方もいるということだ。御徒頭の御舎弟が自分でそう考えたわけではないだろう。誰かに吹きこまれて、あとさきのことを考えずに飛び出したにちがいない。あの男は、日向杢兵衛殿の相手ではない。軽くあしらわれるのが関の山だろう」

竹熊は唾でも吐きたそうな顔をした。鍋の粥が煮える匂いが漂う。竹熊の腹が鳴った。粥でもどうかと悠市がすすめると、たくさんだと竹熊は手を横に振る。

「ゆうべは寝ずの番で、さすがにこたえる。人手が足りぬよ」

と、ぼやいて竹熊は立ち去った。

悠市は周囲三町余ある長源寺のまわりを見廻ることにした。往来に面して築地塀があるが、墓地の裏は雑木林で、隣り合う寺との境にはなにもない。その気になれば長源寺の境内に侵入するのはたやすいことで、まったく無防備といえる。

裏の竹林から墓地の端をまわり、寺町通りに出る角のところで、しゃがみこんで煙管をくわえている男がいる。男は笠で顔をかくしているが、肩の筋肉と腕の太さで、先日竹林で様子をうかがっていた岡丁持だと知れた。悠市は足をとめ、

「これ、丁持」

と、声をかけた。男は腰を上げ、会釈をした。

「あんなしくじりをしても、まだ雇われているのか。よほど人手が足りぬと見える」

「旦那は口が悪いや」

丁持は苦笑して、煙草の灰を落とし、煙管を筒に入れる。古い煙草入れだが、銀の留め金や根付(ねつけ)の細工が上等で、岡丁持の手に入るような品ではない。不恰好に落とし差しにした脇差のこしらえも、名のある鞘師の手になったものと見え、鍔(つば)も手のこんだ透かし彫りだった。

「丁持、いい物をもっているな。それはどうした」

悠市は脇差を指さした。

「どうしたって、盗みでもしたようないいかただね。買ったんですよ」

「脇差も煙草入れも、りっぱな物だ。高かったろう」

「それほどでもありませんや」

丁持は得意気に帯から提げた煙草入れを弄(もてあそ)んだ。

「そんな物をどこで売っているんだ」
「甘木湊の叶屋という質屋に行ってごらんよ。流れた質草が山と積んである。よりどり見どりだ。おれが買えるんだから、脇差だって高が知れてらあ」
「よい買物をしたな」
悠市に褒められて、丁持は相好を崩した。
「そうかね。そんなにいい品かね」
「そこそこの格式の武家に伝わったものだろう。甘木湊の叶屋はみどもも知っているが、それほどの品が質草になっているとは知らなんだ」
「この春あたりから、黒岩領からごっそり持ちこまれたそうで。あっちのお武家さんたちはよほど食うに困っているらしいや」
「そうか、御分家から流れ出たものか」
悠市はもう一度、丁持の脇差に目をやった。武士がそれを質入れするのは、よほどの事情があるにちがいない。
悠市は一朱銀を懐の紙入からつまみ出し、丁持の袂に放りこんだ。
「なんの真似で……」
「組頭には内緒で、みどもの用達をしてくれ。寺町の外れに八幡社がある。宮司の沼山岩根に、たまには鬼の家に顔を出せとことづけてくれ」

「それだけでいいんですかい」
「それだけだ」
「おれは昼番で暮れ六つで交代だが、使いはそれからでいいんだね」
「それでよい。くどいようだが、内緒だぞ」
悠市は丁持から離れた。長源寺の周囲を一巡して竹林にもどるまでに、数人の下役を見かけた。足軽目付は番小屋で休んでいると見え、姿がなかった。
夜がふけてから、宮司の沼山岩根が訪れた。岩根は悠市と同じ年で、幼馴染みである。二人とも貧しい足軽の家から、養子に出された。岩根は囲炉裏の前に坐ると、
「ただならぬ様子だな。ここに来るまでに二度足軽目付に呼びとめられ、詮議を受けた。名を明かして、鬼の家を訪ねると正直に申したら、放免してくれたよ」
と、いった。
明るいうちは、下役を立たせておくだけでも、かかしの役には立つ。さすがに夜になると、足軽目付は性根をすえて警戒しているのである。
「あまり夜中に出入りすると、御用の邪魔になる。今夜は泊まって行かんか。柿太郎はいない。みども一人だ」
「それはちょうどよい」
岩根は持参した徳利を悠市に押しつけた。悠市は徳利の酒を銚子に移し、囲炉裏の薬

缶に入れて燗をする。盃を二つ、枡木の上に置いた。

「甘木湊の叶屋という質屋を知っているな」

「知っている」

「叶屋に、御分家の御家人がさまざまの品を質入れしているそうだ。甘木湊の岡丁持が分不相応の脇差を手に入れて差料としている。御分家にごたごたがあるらしいとの噂は耳にしているが、実態はどうなっているのか、岩根は知らぬか」

「そういうことなら、悠市のほうが耳が敏かろうに。御分家のことは、お家の親類筋に訊ねるか、米問屋にきくのがよかろう」

「みどもはしばらく竹林から出られぬ。友達甲斐に耳の代りをつとめてくれ」

燗がついた。悠市は盃を岩根に預け、酌をした。返盃を一つだけ受けて、あとは岩根に任せる。

「都合のよいときだけ友達か。まあ、よい。困っているようだから力を貸そう。その代り、篠笛を一管、こしらえてくれよ」

岩根は質屋と米問屋に話をききに行くことを請け負った。

徳利はすぐ空になった。悠市には買い置きはない。岩根は膝を崩し、悠市の顔を見つめた。

「めんどうな仕事らしいな。顔つきがいつもとちがうぞ」

「めんどうなのか、そうでないのか、それすら見当がつかん。ただじっとしているだけだ」

悠市はつぶやいた。日向杢兵衛は毎日境内も歩かず、草花を写している。その悠揚迫らぬ態度の裡で、なにを考えているのか、悠市には不可解でならない。

悠市は加納正右衛門から与えられた任務を、事情をこちらから問わず黙って忠実に果たすのが常である。その戒めを破って背景にあるものを知りたいと思ったのは、杢兵衛という人物が謎だったからである。なにも知らぬままに杢兵衛と同様に動きを封じられていることが、不安だった。

四

沼山岩根は竹林の家に一泊して、翌日は八幡社に立ち寄るとただちに甘木湊に出向いた。

悠市は日が高くなってから、長源寺の境内を見廻りに出かけた。境内は閑散としている。葉を黄金色に輝かせた大公孫樹の木の下で、柿太郎が銀杏を拾い集め、腰に提げた小さな籠に放りこんでいた。悠市に気づいて、柿太郎は顔を上げ、

「銀杏を拾っています。御隠居様の好物だそうです」

と、問われぬさきからいった。

「どれ、みどもも手伝うか。少しは分けてもらおう」

悠市は柿太郎の横に立ち、銀杏を拾って腰の籠に入れてやった。

「御隠居に変りはないか」

「はい。花を写しておいでになります。朝方、色づけするのに染め粉が欲しいと申されて、庫裡から朱や黄の顔料をとり寄せました」

柿太郎は心得て、顔を動かさずに話した。

「悠然たるものだな」

悠市はひとりごとをつぶやいた。李兵衛はなにか成算があって時節の到来を待っているのか、それとも運命を受け入れているのか、少しも動揺の色を見せない。心底のわからない人物である。悠市のひとりごとが自分に向けられた言葉だと勘ちがいして、

「りっぱな方です」

と、柿太郎がいった。

少年の柿太郎にも、李兵衛の器量がわかる。尊敬しはじめたようである。しかし、そのことに悠市は危惧を抱いた。

李兵衛を護るだけならばよい。万が一加納正右衛門が悠市におそろしい使命を与えたならば、柿太郎の心はどう動くか。それを考えると、柿太郎が李兵衛に心服するのは、

望ましいことではない。

「柿太郎」

「はい」

悠市は語るべき言葉が探し当てられなかった。柿太郎は不審そうに悠市の横顔を見上げる。そのとき、

「鬼殿、あなたにまでそのようなことをさせては相すまぬ。手が汚れますぞ」

と、離れ家から声がかかった。李兵衛が縁側に出て、手を横に振っていた。

悠市は庫裡の裏の井戸で、銀杏の異臭が染みついた手を洗った。

水音をききつけたらしく、庫裡の窓の障子があき、役僧の秀因が顔をのぞかせた。

「鬼殿、相談がござる」

秀因が小声でいう。悠市はうなずき、勝手口から庫裡に入って行った。

「先日のようなことがあると心配になります。足軽目付は寺を遠巻きにしているばかりで、いざというときの役に立たぬことがはっきりしました。狼藉者が一人だからよかったものの、数をたのんで四方から押しこまれたら、いかに鬼殿でも手のほどこしようがござるまい。加納様にお願いして、人手を割いていただこうと思いますが」

秀因はいかにも秘事を語るといった緊張の面もちで、声をひそめて話した。

「それはお控えになったほうがよろしかろうと思います」

悠市は上がりかまちに腰かけると、秀因がさし出す湯呑を受けとり、湯気を吹いた。
「鬼殿では手に余ると申しているのではございませんよ。用心の上にも用心をなさったほうがよろしかろうと、そう申し上げたまでのことで……」
秀因は悠市の肩ごしにささやきかけるようにいう。
「御家中でも用心深いことにかけては加納様に敵うお方はおりますまい。もし危難がさし迫っているなら、必ず手をお打ちになるはず。先日のごとき狼藉者が騒いだだけでは、まだ動くほどのことはないとお思いなのでしょう」
「そうですかな。狼藉者の名は、鬼殿のお耳に入りましたか」
悠市はその名は口に出さず、湯呑を片手に持って宙に浮かしたままうなずいた。
「あの男はとるに足りないはねっ返り者ですが、背後で若侍たちを煽っている者がいるようです。大事にならねばよいのですが……」
「糸を操る傀儡師がどのお方か、わかったらみどもに耳打ちしてください」
悠市は湯呑を上がりかまちに置き、一礼すると腰を上げた。
庭に出ると、銀杏を焙る香がかすかに流れて来た。柿太郎が七輪の前にしゃがみこんでいた。立ち上がり、
「一緒に銀杏を食べませんかと、御隠居様が申されています」
と、声をかける。

「日暮れどきにお邪魔する。そう伝えろ」
悠市は境内の見廻りにもどった。

沼山岩根は一晩泊りで甘木湊から帰るはずだったが、一日よけいに費やして悠市の家を訪ねて来たのは、三日目の日暮れ前だった。甘木湊から川船に乗れば城下までは水上三里、陸路一里の道のりである。岩根はその日の昼近くまで甘木湊にいたのだった。
岩根は囲炉裏の前に葛籠を放り出すように置き、その上に肘をつき、胡座をかくと、ふうっと音を立ててため息をついた。
「手間どったようだな。心配したぞ」
と、悠市は声をかけた。岩根は葛籠の蓋をとり、縄でくくった干し魚の束をとり出して、脇に置いた。
「土産はそれか」
「そう急かせるな。甘木湊に行ってみたら、いろいろとおもしろい話が耳に入った。叶屋にも行った。丁持がみごとな拵えの脇差を持っていたそうだが、驚くに足りない。刀、槍、具足までなんでも質に入れている」
「武士が槍、具足まで質入れするとは、よほどのことだな」
「甘木湊に正善坊という修験者がいる。懇意にしている者だが、その正善坊の力を借り

て、いろいろ調べた。それで手間どったのだ。こんな物が出て来たよ」

岩根は葛籠の中から、紙縒でくくった紙束をとり出し、悠市の前に置いた。縦三寸、横一寸五分の紙の表に、

——正米二十俵代

と書かれ、下に花押が誌されている。裏には、松ヶ岡から分家の黒岩に行った御付衆の北村喜内と、甘木湊の米問屋の裏書があった。

「それを米札という。黒岩領内にかぎって通用する札だが、それが甘木湊に出ている」

「こんな紙切れが米の代りか。ここに裏書きのある米問屋に持ちこめば、正米ととりかえるわけだな」

悠市は米札の表裏を返して眺め入った。

「そうは行かぬ。裏の事情がある」

黒岩藩の窮乏はいまにはじまったことではないが、とりわけ昨年は飛地の山間部が兇作で、表高が二万石のところ実高はその半分にも満たなかった。家臣は家老から足軽の末にいたるまで寸志上米と唱えて、半知半給を返上した。それでも御蔵米が底をつき、家臣には半給を米札で支給する苦肉の策をとらざるを得なかった。

取高が半減だから、半知半給で間に合うはずが、御蔵米が払底したのは腑に落ちないと家臣は不審に思うのが自然だが、まず口に入れる米がないことには不満を唱えてもはじまらない。米札を米に替えようと米問屋に持ちこむと、信用がなく三分の一に割りびきされて、三百俵の米札が百俵の正米に減らされる。刀、槍、具足など、武士の魂まで質入れせざるを得ないのは、そうでもしなければ餓死してしまうからだ。岩根はそう説明した。

「それほどひどいのか」

悠市は足軽目付の組頭、竹熊与一郎が、黒岩藩の江戸屋敷で、若殿様御傅の侍が井戸に投身して抗議の自殺をしたと語ったことを思い出した。世子さえも、困窮しているというのである。それから黒岩藩の内輪揉めがはげしくなったと、竹熊が話していた。

悠市は手の内の米札に、視線を落とした。

「よくこういう物が岩根の手に入ったな。それも正善坊とやらの助力があってのことか」

「いや、正善坊からはそんな噂があると知らされたのみだ。これはわたしの才覚で、叶屋から手に入れた。高くついたぞ。篠笛一管では安すぎる。なま半可な礼では、勘弁せぬ」

岩根は胸をそらせて高笑いした。

「米札は誰にも見せておらんのか」

「それを手に入れたのは、今朝のことだ。それから誰にも会わずに甘木湊を発った」

「それならよい。誰にも話すな」
悠市は米札の束を仕事場の道具箱にかくした。

五

陽のあたらない暗い土間に、一瞬光がさしこんだようだった。白い頭巾の尼僧が二人、戸口に立った。
「お頼み申します。五色沼から参りました」
若々しい娘の声だった。白い頭巾からのぞく顔は、頭巾に負けぬほど色白である。
沼山岩根が去ってからまださほど時がたっていない。岩根をねぎらうために出した膳が囲炉裏の前に置いたままで、盃と銚子が載っている。干し魚を焙った臭いが土間にこもっていた。悠市はあわてて膳を仕事場に押しやってかくした。
「よろしゅうございますか」
尼僧たちは土間に踏み入るのをためらっている。悠市はどうぞと声をかけ、中に招き入れた。尼僧たちは腰をかがめて歩み入る。土間に野花の香が流れたように、悠市は感じた。
五色沼は松ヶ岡の城下町から一里ほど離れた丘の上にある。沼のほとりに屋敷と小さな尼寺があり、先代の藩主の側室だったお由良の方が、俗世から離れてひっそりと暮らしていた。町の人々は、五色沼の尼屋敷と呼んでいた。五色沼から使いが来れば、悠市は会うことを拒めない。

尼たちは並んで膝をそろえて坐り、頭巾をとった。一人は若く、一人は三十路のなかばだろうか。顔だちがととのい、瞳が濡れているように見える。若い尼は照月、もう一人は妙月と名乗った。悠市は口を開かず、尼たちが用件を述べるのを待った。
「お由良様から、しばらく無沙汰だが、お変りはないかと、おことづけを申しつかって参りました。たまには鬼様のおそろしいお顔を御覧にならないとお寂しいとのことでございます」
若い照月尼が、笑いをふくんだ目を向けた。照月尼には見覚えがある。しかし年かさの妙月尼は、悠市は五色沼で見かけた記憶がない。
「痛み入ります」
悠市はそれだけ答えた。お由良になにか難題を押しつけられるのではないかと、つい身構えてしまう。
「ここにおられる妙月様は、つい半年前、お由良様のお世話をなさるために、江戸から参られました。和歌をお作りになり、お花も活けられます」
「お見知りおきください」

妙月が青々と剃った頭を下げる。

「みどもはいたって武骨者で……」

和歌や活け花には興味がないとは、悠市は口に出さなかった。

「お由良様から、お願いがございます。お寺の離れ家に、お名前は口にいたしませんが、御隠居様がお住まいでしょう。そのお方の草花図譜を、御借覧いただけるよう、鬼様にお口添え願いたいとおっしゃっています」

と、照月尼がいった。

「それは困ります」

悠市はかぶりを振った。

「曲げてお願い申し上げます」

「みどもの一存でどうなるものではござらぬ。五色沼のほうから、御奏者番におうかがいを立てられたらいかがですか」

「御奏者番はのらりくらりして、一向にはっきりした御返事がありません。何度もおうかがいを立てております。お由良様はもうよい、鬼様におすがりしろとおっしゃいました。どうぞ、願いをおきき届けください」

照月尼は床に両手をつき、すがるような目で見上げる。悠市は当惑した。

奏者番の加納正右衛門はお由良を敬して遠ざけているから、はっきりした返事をしないだろうと、悠市にも想像がつく。お由良が癇癪をおこす気持もわかる。それでも悠市は、

「御奏者番におうかがいを立ててください」

と、遁辞を弄するしかなかった。

「お由良様はどうしても図譜を拝見したいと申されます。本日はお願いを申し上げただけで帰りますが、お由良様はお赦しくださるまい。また参ります」

と、照月尼がいった。妙月尼のほうは、口を開かず、じっと悠市をみつめる。二人そろって頭を下げ、引き下がった。竹林から二人の姿が見えなくなったとたんに、悠市の額に汗が噴き出た。

間もなく、庭に足音が立ち、竹熊与一郎が顎を突き出して縁側からのぞいた。許しも乞わずに当たり前の顔で縁側のはしに腰をかけて、

「山門の脇に御定紋入りの女乗りの駕籠があった。五色沼から使いだな。なんと申した」

と、詰問口調でいった。悠市は一瞬迷ったが、正直に二人の尼僧が来訪した理由を話した。

「日向杢兵衛殿が本草学の大家であることは本家の江戸屋敷にも知れ渡っておるだろうから、図譜を御覧になりたいと申されるのだろうが、いかにも時機が悪い。無用の混乱を招くだけだ。五色沼の尼御前のわがままにも困ったものだ」

竹熊は苦いものを口に入れたように顔をしかめた。

「お断りをいたしましたが、お由良の方はいたく御執心で、また頼みに参ると、尼僧たちが申しておりました」

と、悠市がいうと、竹熊ははじかれたように腰を上げ、二、三歩竹林のほうへ歩み出しながら、

「拙者は知らんぞ。五色沼のことはあずかり知らぬ。きかなかったことにしておく」

と、手を横に振った。竹熊も五色沼にはかかわりを持ちたくないのである。

翌朝、いつものように柿太郎が庭で朝稽古をした。規則ただしい呼吸の音、木刀が空気を裂く音を、悠市は縁側に立ち耳を澄ませてきいた。朝稽古が終ってしばらくすると、竹林に陽がさしこむ。悠市は囲炉裏の自在鉤にかけた鍋で、朝粥を煮た。米はひとつかみ、煮ても茶椀一杯に満たない。昨夕のうちに煮ておいた里芋のほうがむしろ主食である。

昨年の兇作は分家の黒岩領内ばかりではなかったから、松ヶ岡城下でも米は不足している。しかし米櫃が底をつくことはなかった。

鋭く一声、鳥が啼いた。鳥の声とききまちがうような柿太郎が吹く呼笛の音である。悠市は椀を置き、大刀を腰に帯して、外に飛び出した。

山門の前に、役僧の秀因と柿太郎が並んで立っていた。境内に入ろうとする武士を、

二人がさえぎる。武士は柿太郎を押しのけた。

「お待ちなさい。断りもなく境内にお入りになることは、何人たりとも許しませぬ。ここは御廟所でござりまするぞ」

悠市は両手を大きく広げて、武士の前に立ちふさがる。見知った顔である。御徒頭天利八兵衛だった。先日、境内に入ろうとして足軽目付に乱暴をした天利要助の実の兄である。

天利は悠市の顔を見て舌打ちをした。年齢は三十を越えたばかり、一刀流の遣い手として知られている。小柄だが肩幅が広く、稽古で鍛えた二の腕は太かった。

「先日は舎弟が無礼をした。舎弟のあばらを折ったのは貴公だそうだな」

天利は悠市に挑むように下から睨め上げた。悠市は両手を下ろさず、

「入ることはなりません」

と、もう一度いった。一瞬、天利の全身に殺気がみなぎり、秀因がおびえて後じさりした。悠市と天利は息をとめて睨み合った。

天利はふっと息を吐き、肩の力を抜いた。

「拙者は離れの隠居と話をしに来た。叔父が御分家に仕えている。知らぬ間柄ではない。ただ話をするだけだ」

「誰も通すなといいつかっております」

悠市が静かにいう。
「会わせるまで、ここに居坐る。そのうち朋輩が大勢押しかけて来るぞ」
「お待ちなされ」
秀因がいい、小走りに離れ家に行った。障子を少しあけ、杢兵衛と相談してもどって来た。
「寺の許しがあれば、会うと御隠居は申されます」
と、秀因がどちらにもきかせるように視線を迷わせながらいった。
「お許しなさるな」
悠市は声をかける。秀因は迷った。相手は御徒頭で身許にまちがいはない。秀因の迷いを見透して、
「通る」
短く声を発して天利は足を踏み出す。悠市は肩を寄せた。いつ抜きとったか、天利の大小は悠市の両手に握られている。
「なにをいたす」
天利は狼狽し、両刀を奪われた屈辱のために顔面に朱を注いだ。
「境内では両刀をお預かりいたす」
悠市は刀を柿太郎に手渡した。天利は両刀をとり返すことをあきらめ、秀因のあとについて、離れ家に歩み寄った。
「刀は庫裡に置いておけ」
悠市は柿太郎に命じた。柿太郎は両刀を抱きかかえて、緊張の面もちで庫裡に向かっていった。悠市は離れ家の裏にまわった。

「秘事でござれば、お人払いを」
と、天利の声がきこえる。秀因が外に出て、入れ替りに天利が離れ家に入った。杢兵衛は長源寺につれて来られた際に両刀をとり上げられているから、家の中には刃物はいっさいない。悠市は茶室造りの手水構えの板戸に耳を寄せた。
二人の声は低く、きき取りにくかった。神田橋の御屋敷……若殿様……御傳……という言葉が途切れ途切れに耳に入る。話すのは主に天利で、杢兵衛はきき役に徹しているらしい。やがて天利の感情が昂ったと見え、声が大きくなった。
「御分家の窮乏は、きのう今日はじまったものではござらぬ。もともと痩せた土地ばかりで実高が少ないところへ、公儀お役をつぎつぎにお引き受けなさる。宿痾は先君の御治世から癒しがたいものになっておりました。責めは御当代ばかりにあるのではなく、御先代の家政を司ったあなたがた譜代の重臣に帰すべきものではないか。下世話な言葉で申さば、御当代は借金だらけの家に婿養子に入ったようなものでござる。日向殿は責めをお感じなさらぬか」

杢兵衛は短く答えたが、その言葉は悠市にはききとれなかった。

「あなたがた譜代の臣の失政に混乱の因があるのに、その責任を負いもせず、あろうことか、主君追放などという前代未聞の願書を公儀にたてまつるとは、乱心者でなければ大不忠の逆賊といわざるを得ぬ。日向殿、あなたも恥を知る武士でござろう。腹を切って、本家、御分家御当代、領内の下々にまで詫びるのが、武士としての進退とは思いませぬか。腹を切りなさい」

「ことわる」

杢兵衛の声が、はっきりときこえた。床を踏む音が響く。咄嗟に、悠市は手水構えの板を蹴破り、くぐり木戸から小座敷に転げこんだ。炉の釜が傾き、灰神楽が舞っている。天利が杢兵衛を組み敷き、首を絞めようとしていた。

「狼藉者」

と、一声かけて、悠市は天利の脾腹を蹴り上げた。天利は杢兵衛から手を放し、両手で腹をかかえてうずくまる。悠市は足をつかみ、くぐり木戸から引きずり出した。

腰車に乗せて天利を裏庭に投げ飛ばす。

「境内ではみどもが奉行でござる。狼藉をなさると捨て置きませんぞ」

と、悠市は一喝した。天利は腹をおさえて、無念の色を浮かべて悠市を睨みながら立ち上がった。

「このままではすまさぬ」

立ち去り際に、天利は捨て科白を吐いた。

離れ家に悠市がもどると、杢兵衛が小座敷になにごともなかったように端座していた。炉の釜は元通りに直してある。

「お怪我はありませぬか」

と、悠市は声をかけた。

「お世話になりました」

木兵衛は頭を垂れて礼をいい、

「しかし鬼殿はその巨体のわりには、足音を忍ばせるのが巧みですな」

と、いった。その目は笑っていない。悠市が裏で立ちぎきしていたことに気がついていたのである。

悠市ははじめて、おそるべき人物に出会ったと感じた。杢兵衛はこれまで悠市が知る人間とは、なにかがまったくちがう。

天利八兵衛の言葉が悠市の耳に残っている。日向杢兵衛が公儀に向かい、主君の追放を願い出たというのは、ほんとうだろうか。家臣が主君の首をとる。それを堂々と公儀にたいして主張することが、あり得るのかと悠市は信じられぬ思いだった。

順逆の道を踏みたがえた家臣は腹を切れという天利のいいぶんが正しいような気がす

る。悠市は養父にそう教えられて育った。腹を切ってたまるかとはねつける杢兵衛の心底が、悠市にはわからない。しかし、杢兵衛に正義がないかといえば、そうは断言できないと思えるのである。

六

竹熊与一郎は縁側に横坐りすると指を折って日数をかぞえた。

「日向杢兵衛殿が参ってから、まだ十日か。ずいぶん時がたったような気がするが。押しこんで来たのは二人目か」

天利八兵衛が杢兵衛に切腹しろと迫り、首を絞めたことを悠市は口外していない。竹熊は弟の要助と同様、天利八兵衛もただ杢兵衛に反感を抱き怒鳴りこんだだけだと思っている。

悠市は土間で竹を割く切出(きりだし)を丹念に研ぎ上げていた。竹熊の声はよくきこえない。一心に砥石に刃を滑らせた。

「奥の座敷が空いておるな。そこに寝泊りしよう。いいな」

竹熊は土間のほうへ片手で身を支えて乗り出し、大きな声を出した。

「なんとおっしゃいました」

悠市は研ぎかけの切出を脇に置き、縁側に出て行った。前掛を外し、竹熊の横に坐る。竹熊は竹林のほうへ顔を向けて、

「足軽目付が遠巻きにしているだけでは守りきれぬ。この場所ならば境内も見通すことができる。奥の座敷を借りるぞ。使うのは拙者だけだ。他の者は近づけぬ」

「そのようなことを急におっしゃられても困ります」

「御奏者番や大目付におうかがいを立てればことがめんどうになる。黙っておればよいではないか。拙者は立ち寄っているだけということにしておけばよいだろう」

竹熊は草履(ぞうり)を脱ぎ、上がりこんだ。仕事場の竹の屑を踏み散らし、板戸をあけて仏間に隣り合う座敷に通った。

「やっ、ただいまから座敷をお使いになりますか」

悠市はうろたえた。

「当たり前ではないか。そのために朝から参ったのだ」

竹熊は袴(はかま)をとり、着流しになって横たわる。顔つきまでもすっかりくつろいでいる。

「さようでござるか。なんのもてなしもいたしませんが、存分にお使いください」

悠市はつっけんどんにいい、土間にもどった。研ぎかけの切出を手にとる。なんだかむかっ腹が立ち、切出の刃を滑らせる手に力がこもった。

気づまりな時が過ぎた。悠市と竹熊は一言も言葉を発しない。陽が高くなった。

「ごめんなさりませ」
と、戸口で声がかかる。きき覚えのある若い娘の声だった。
「お通りなさい」
「はい」
照月尼と妙月尼が腰を曲げ、すり足で土間に入って来た。上がりかまちを上がるときに、脛を気にして身体を斜めにする。かえってそのために、脛の白さが目についた。悠市は目をそらせた。
「さぞかし執念く訪れると御不興でしょうが、お許しください。お由良様がどうしても図譜を借りて参れとお責めになります。どうぞお助けになるとおぼしめして、お借りしてくださりませ」
年かさの妙月尼がいった。
「それはこの間も申し上げましたが……」
と、悠市がいいかけるのを、妙月尼は両手の指を重ねて押し出す仕草をして、
「みなまでおっしゃいますな」
といい、悠市を直視した。
「ほとほと困り果て申す」
と、悠市が天井を仰ぐ。若い照月尼が口元をかくして、

「あら、赤鬼になった」
と、つぶやいた。
「お座敷にどなたかおいでになりますね。お呼びではありませぬか」
と、妙月尼がいった。あっと虚をつかれて悠市は声を発し、奥の座敷をのぞきこむ。竹熊が顔を歪め、借りてやれ、借りてやれという形に口を動かした。早く二人の尼僧に立ち去ってもらいたいのである。
悠市は二人のほうへ向き直った。
「果たして離れの御隠居がどうおっしゃるかわかりませぬが、お願いしてみましょう」
「かたじけのう存じます」
二人が平手をついた。奥の座敷から咳払いをおし殺す声がもれた。
悠市は境内の離れ家に行った。柿太郎が境内を掃く姿が遠く見える。李兵衛が小座敷に花莚をひろげ、その上に薬研を置いて貝殻を細かい粉末にしていた。白い顔料をこしらえているのだった。悠市が用件を述べると、李兵衛は当惑の表情をつくった。
「そのような御酔狂をどなたが申されたか」
五色沼のお由良の方からの申し出だと、悠市は正直に話した。李兵衛は少し考えて、
「図譜と申されるが、野花は採れた土地ごとにわたくしなりに順序だてて綴じなければならず、そのように整理のできた図譜はあいにく手元にござらぬ。あるものは寺の周辺

から採集した草花の手すさびの絵図ばかりです。とても図譜の名に値するものではありません」

と、いった。

「尼御前は本草学を究める御所存ではありますまい。美しい草花の図を所望なさっているのです」

「さようか。不本意ではあるが、鬼殿がそう申されるなら、意地を張るわけにも参りませぬな」

杢兵衛は葛籠の蓋をあけ、図譜をとり出して中を見せた。不本意だといったが、悠市が見るところ、薬草を集めて写した図譜だった。

「これならば尼御前もお喜びでしょう。お借りできますか」

「お返しになるにはおよびませぬ。さし上げますよ」

「わがままを申し上げました。お許しください」

図譜はなにも書かれていない渋紙の表紙をつけ、紙縒で綴じてある。それを悠市は両手でおしいただいた。

家にもどり、悠市は図譜を妙月尼に手わたした。妙月尼は宝物のように袱紗で包み、胸に抱いて帰って行った。足音が消えるのを待って、奥の座敷から竹熊があらわれ、当てつけがましく障子をあけ放った。

「臭いな。息がつまる」

「衣服に香を焚きしめておいでした」

と、悠市がいった。

「なににせよ、尼さんを出入りさせるのはよろしくない。長源寺の役僧に、注意させよう」

竹熊は竹林に顔を向け、深く息を吸った。

半月が過ぎたが、加納正右衛門からはなんの指示もない。柿太郎と杢兵衛の日常にもなんの変化もなかった。

悠市は夜は警戒をして仮眠をとるだけである。日中は柿太郎の呼笛を頼りに、一刻ばかり柱に背をもたれて眠ることができたが、奥の座敷に竹熊が居坐ってからは、昼寝をすることができない。竹熊は夜は平気で高いびきをかいて眠る。悠市もさすがに疲労を覚えた。

日暮れ前に悠市は例によって境内を見廻った。山門が風の通り道になり、落葉が舞い上がる。足軽目付の手先の丁持が、山門の蔭から顔をのぞかせ、

「旦那」

と、呼びかけ、手招きをした。悠市が歩み寄ると、丁持は片手を口に当て、

「気をつけなさいよ。天利兄弟が助っ人を集めて、旦那をやっつけようとしていますぜ」

と、ささやいた。

「みどもを狙っているのか」

「そうですよ。恥をかかされたから仇を討とうというんです。寺町通りの仏光寺に集まっています。どうします」

丁持は顔色をうかがう。悠市の家を襲う曲者たちに足軽目付は手を出さない。悠市は自力で身を守らなければならないのである。

「助勢は何人だか、調べているのか」

「四人、あるいは五人。天利兄弟と同門の稽古人ですよ。腕は立ちます」

丁持はおもしろがる口調でいった。

「よく知らせてくれた」

「どうなさるんで」

「こちらから乗りこむ」

悠市は山門から歩み出た。御廟所を騒がせてはならない。騒動が大きくならぬうちに、天利兄弟をとり押さえるべきだった。丁持はしばらくついて来たが、番小屋の手前で、姿を消した。

暮れ六つの鐘が鳴り渡る。風が冷たくなり、悠市は指先に息を吹きかけて、こわばりをほぐした。仏光寺の山門に立ったときには暗くなっていた。人影はない。裏山を越えて、長源寺の竹林に通じる小径がある。寺町通りでは行き当たらなかったから、天利兄弟が悠市を襲うとすれば、裏道を行ったと考えられる。木々が茂り、昼でも暗い雑木林の中の小径である。目をこらすと、足元の闇の濃さのちがいで、踏み馴らされた道であることがわかる。

「いかん」

悠市は思わず声を放った。悠市の家には竹熊がいる。竹熊がまちがえられて天利兄弟に襲われるおそれがあることに気づいた。悠市は両手を前に出し、小径に張り出す枝で目を突かぬように用心しながら、さきを急いだ。

仏光寺の裏山を抜けると、芒の原である。雑木林の外はかすかに光が残っていた。彼方に竹林が黒々と盛り上がって見える。芒の原の中に、小さな灯が見えかくれした。武士の姿も見えた。

芒を騒がさぬように気を遣いながら、悠市は小さな火に向かった。

「お待ちなさい」

と、声をかける。細い木に蠟を塗り小さな松明にしてある。その炎が天利要助の顔を浮かび上がらせた。要助は片手を胸にくくりつけて固定していた。

「鬼悠市でござる。みどもに用がおありですか」
「なに、鬼か」
小さな松明のまわりに人影が集まる。
「足軽風情に足蹴にされて黙っておられるか。尋常に勝負をいたせ」
人影の中から、兄の八兵衛らしい声が上がる。
「夜中に屯集して騒ぐのは、御法に触れます。みどもに用がおありなら、明るいときになされ」
悠市はそういいながら、小さな松明に照らされた人数をかぞえ、刀以外の武器を持たぬことをたしかめた。
「小癪なことをぬかすな」
きき馴れぬ声がした。天利兄弟の同門の一刀流稽古人だろう。どれほどの腕か、悠市は知らない。
松明の火が踏み消された。闇の中に刃が光る。人影が芒の原に散った。
「私闘は御法度でござるぞ」
悠市は声を張り上げた。その声は竹林の家に届いたかどうかわからない。
「私闘とは片腹痛いわ。無礼討ちだ」
天利八兵衛の声だった。人影の輪が広がり、悠市をとり囲んだ。悠市は刀の鯉口を切り、抜き打ちの構えをとった。

「待て、待て」
と、遠くから声がした。定紋の入らぬ足軽目付の細長い提灯が、芒の原に見えかくれしながら近づいて来た。
提灯の主は竹熊だった。竹熊は武士たちを避けて遠まわりして悠市に駈け寄った。
「頭、手を出さずにいてください」
悠市の呼びかけには答えず、竹熊は片手に握っていた樫の六尺棒を投げた。
「鬼、これを遣え。斬るなよ。刀は抜くなよ」
と、怒鳴り、芒の中に逃げこみ身をかくした。竹熊が刀を抜くなというのには、理由があるにちがいない。悠市は棒を構えた。
包囲の輪がせばまる。悠市は身を低くした。天利兄弟たちから、悠市の巨体が見えなくなった。
「油断するな」
要助はみずからの動揺をかくさず、うわずった声を放つ。近くの芒が音を立てた。
「そこだ」
八兵衛が叫ぶ。要助の刀が芒の穂を斬り払った。棒がうなりを生じて要助の手首を打ち、骨が砕ける鈍い音を立てた。

ほとんど間をおかずに、鈍い音がして、

「あっ」

と、八兵衛が悲鳴を上げ、倒れこんだ。棒が膝の皿を砕いたのである。芒の中から、悠市の黒い影が立ちあらわれた。大入道が天に向かって伸び上がるように見えた。頭上で棒が弧を描き、空気を裂く音を立てる。

「退け、退け」

と、絶叫したのは、竹熊である。天利兄弟の助勢は、その声に追い散らされるように、逃げて行った。竹熊の提灯が近づいた。

「刀を抜いたら、まずいことになるところだった。これは罠だ。鬼をおとしいれる罠だよ。危ないところだった」

竹熊はそういいながら、倒れこんでいる八兵衛に歩み寄り、提灯で顔を照らした。投げ出した刀を拾い上げ、手の届かぬところへ放り捨てる。八兵衛は砕かれた膝をかかえてうめいた。竹熊は八兵衛を見下ろし、

「一刀流の遣い手だそうだが、こんなものか。真剣で立ち合ったことなど一度もあるまい」

と、きこえよがしにいう。かねがね足軽風情と上士にさげすまれる鬱憤をその一言で晴らした。

七

加納正右衛門は居眠りでもするように両眼を閉じ、身体をゆっくりと揺する。悠市は無言でその顔を見つめ、口が開かれるのを待った。

「棒を遣ったのは手柄だ。足軽目付から、仏光寺の裏山に怪しい者どもが屯集しておったので棒で追い払い、大事なかったと届けが出た。天利兄弟はいまさら、われらが足軽目付に打擲（ちょうちゃく）されたと文句をつけることはできまい」

加納はようやく口を開いたが、目は閉じたままである。悠市は肺にためた息をゆっくりと吐き出した。加納の口から、おそれていた言葉が出なかったことに安堵した。

「骨を砕きました。いささかやり過ぎたかと、心配いたしております」

「よい、よい。鬼に刃むかって命をとられなかっただけでももうけものだ」

「組頭があわやのところで駈けつけ、みどもが刀を抜けば陥し穴にはまることになると申され、足軽目付の棒を投げてくださいました。組頭の機転がなければ、みどもは天利兄弟の命をとってしまったかもしれません」

「竹熊は小知恵がまわる男だ」

「ひとつだけおうかがいしてもよろしゅうございますか」

「申してみよ」
「みどもが陥し穴にはまるとは、いかなる意味でしょうか」
「言葉の通りだ。鬼が長源寺の番人をしていることが邪魔になる。そう考える連中がおった。それだけのことだ。足軽が御徒頭と斬り合いをしたとなれば、理由はどうであれ、歩が悪い。わしだとて、鬼をかばうことはできぬ。斬っても地獄、斬られても地獄。よく上手に切り抜けた」
それほどあやうい立場に立たされていたとは、悠市はそのときは気がつかなかった。
「斬っても地獄、斬られても地獄とは、おそろしいことでございました。しかし、考えてみれば、それは天利兄弟とて同じ立場ではございませんか。みどもを討ち果たして帰ったところで、後になって私闘の責めを負い切腹ということになります。そのようなことを本人が決意したとは思えません。裏で何者かが使嗾したと考えられますが、いかが」
「そんなところだ。長源寺に預けた火種は思ったよりも大きなものだったらしい。御家中のそこかしこから煙が立ちはじめた。煙は二つ三つにまとまり、例によって党派の角突き合いになる。だが、そのような家中の党派のあらそいを、鬼が気にかけることはない。血を流さず、口と腹でおさめるのが、わしの芸だ」
加納はようやく両眼を見開いた。

「こうして本家を巻きこみ騒ぎを大きくするのは、あるいは日向殿の思う壺かもしれぬ。どうだ、日向殿の様子は。変りはないか」
「静かに過ごしておいでになります。あのお方の心底はみどもごとき凡愚にはとうていはかり知れません」
「落ち着き払っているところが曲者だな。天利兄弟が揺すっても、いささかも動じなかったのだろう。御分家の江戸屋敷には、かげろう飛脚という隠密がいると小耳にはさんだことがある。わしはその正体を知らぬが、日向殿はそのかげろう飛脚の訪れを待っているのかもしれぬな」
加納はふたたび目を閉じ、悠市に手の甲を向けて帰ってよいと合図をした。
悠市が加納正右衛門の屋敷に呼ばれたことを、竹熊はとうに知っていた。奥の座敷から這い出して来ると、親指を立てて見せ、
「なんと申された」
と、訊ねた。
「天利兄弟のことはよくやったと、お褒めいただきました。棒を用いたのは組頭の機転だったと申し上げると、組頭は知恵者だと感心しておられました」
加納は小知恵がまわるといったのだが、悠市は少し言葉を変えて伝えた。竹熊は顔を

ほころばせた。ふだん意地の悪そうな顔だが、笑うと皺だらけになり、邪気が消える。
「拙者のことは脇に置け。天利兄弟を裏で操った傀儡回しが誰か、なにか申されなかったか」
家臣の誰もがそうであるように、竹熊も党派のあらそいの噂を好んだ。その話になると目が輝く。
「裏になにかがあるとは申されましたが、名前までは……」
と、悠市が答えると、竹熊は、そうかと不満そうにつぶやいた。
「みどもに武士たちが集まっているから気をつけろと告げた手先がおりましたが、頭のいいつけで動いたのでしょうか」
悠市は疑問を口にした。
「拙者は知らん」
「悪く勘繰れば、あの手先がみどもをおびき出す役をつとめたともいえます」
悠市がそういうと、竹熊はいつもの探るような目にもどった。
「鬼はそう思ったか。拙者は手先が誰かとつながっていると疑っておる。八幡社にこっそり使いに行ったところをみると、鬼が主人かと疑っていたが、そうでもないらしいな。しばらくは気づかぬふりをして泳がせておくさ。そのうち飼い主が手を叩くだろう」
竹熊は音を立てずに、池の鯉を呼び寄せる真似をしてみせた。

日暮れ前のいつもの見廻りの刻限よりも少し早く、悠市は境内の離れ家に顔を出した。李兵衛は紙をひろげ、墨で南画風の風景を描いていた。柿太郎が脇で墨をすっていた。
「秀因殿に頼まれましてな。腕ならしのつもりです」
と、李兵衛がいう。紙面に見入る目が真剣なので、絵筆の切りがつくまで、悠市は縁側で待った。
李兵衛が筆を置き、硯に蓋をする。悠市は柿太郎に庫裡に行く用をいいつけ、二人きりになった。悠市は図譜を借りた礼をあらためて述べた。
「いや、いや。かえって恥をさらしたようなものです」
と、李兵衛は謙遜する。
「尼僧がみどもの家を訪れるなど、外聞をはばかる話です。このことは御隠居殿も内密に願います」
「誰にも申しませぬよ。当方にとっても自慢できる手業ではありません。かえって当方から、御内聞にとお願いいたしたいほどです」
李兵衛は白髪のまじる頭に片手を置いて見せた。
悠市は懐から米札の束を出し、李兵衛の前に置いた。視線を落とし、
「これは……」
李兵衛がうめきに似た声をもらした。顔が朱に染まる。顔を染めたのは、怒りのしる

しか、恥辱のためか。李兵衛がはじめて見せた動揺の色だった。
「こんな物がどこからお手に入りましたか」
と、動揺をかくして静かな声で問いかけた。
「甘木湊の質屋に質草として置いてあります。このような物が御領外に出ては、御家名にかかわりましょう」
と、悠市がいう。李兵衛は米札の束を手にとり、表裏を確かめた。
「いまさら家名などとりつくろってもいたしかたありませんが……」
と、つぶやき、苦い笑いを浮かべながら米札を悠市に返した。
「この米札ははじめて見ました。わたくしはこの春は江戸屋敷におりまして、国表のことにあずかっておりません。家名のことよりも、紙の米を手渡される御家人たちが憐れに思われます」
「米札は額面の三分の一で買われておるそうです」
悠市は米札を懐におさめながら語った。
「三分の一。この秋にその米をさきに腹におさめてしまったわけですな」
李兵衛は声を詰まらせる。米札をおさめた悠市の懐あたりに視線を据え、
「それが甘木湊の質屋に出たと申せば、何十倍、何百倍もの米札が、表に出ることなくどこかへ流れたと考えられますな」

と、絞り出すようにいった。
悠市は離れ家を辞去した。柿太郎を呼びもどすために庫裡に足を向ける。振り返ると李兵衛が見送りのために縁側に出て坐っていた。
李兵衛の顔は境内の大公孫樹に向いて、放心したかに見える。黄金に色づいた葉が降りしきった。かげろう飛脚という謎めいた言葉が、悠市の脳裏に浮かんだ。李兵衛は、降りしきる落葉の下からかげろうが立ちのぼるのを、待ちつづけている。悠市にはそう見えた。

首斬り勘兵衛

一

厚い雲が垂れこめた空を、鏑矢形の編隊を組んだ白鳥の群れが渡って行く。北の涯から渡って来る白鳥は、冬の訪れを告げる使者である。竹林を吹き抜ける風もめっきり冷たくなった。

白鳥の飛来する季節は、竹林の伐採の季節でもある。鬼悠市は夜明けとともに竹林を見てまわった。一年子のころから、良材に育つ竹は目に留めてある。籠を編むために用いる三年子は良材のみを伐り、四年子は多く伐り倒して竹林の風通しをよくする。

悠市は奥の傾斜地までまっすぐすすみ、長源寺の境内に隣り合う東側の林に足を向けた。腰を曲げ、目の高さを下げて、節と節の間の長さ、色をたしかめる。良材には腰に提げた縄を切り、目印に巻きつけておく。竹林を一巡して家にもどりかけたとき、境内のほうから日向杢兵衛が柿太郎に案内されて竹林に歩み入ろうとする姿が目に入った。

「これ、柿太郎、どこへ参る」

と、悠市は声をかけてから、二人に歩み寄った。柿太郎は言葉に詰まり、顔を赧くした。杢兵衛は境内の隅の数寄屋造りの離れ家から一歩も出てはならない約束である。

「竹林と鬼殿のお宅にかぎり出歩いてもよろしいと、役僧の秀因殿からお許しをいただきました。たまには外の風に当たりたいと、わたくしがわがままを申しましたのでな」

と、杢兵衛がいい、白髪まじりの頭に手を乗せて笑った。悠市は養子の柿太郎に視線を移した。

「はい、秀因様がたしかにお許しになりました」

柿太郎が消え入りそうな声で答える。悠市は納得していないことを杢兵衛に示すために顔をしかめてうなずいてみせた。柿太郎の肩に手を置き、杢兵衛に声が届かぬ距離まで歩いてから、

「御隠居にもしものことがあれが、父は腹を切らねばならぬ。心してお守りをせよ。しかしすぐに家に来られては困る。竹林の中の三年子の良材を御覧に入れるがよい」

と、ささやいた。

「承知しました」

柿太郎の表情がひきしまった。唇を白く変るほど強く噛んだ。

悠市は二人に別れて家にもどった。足軽目付の組頭、竹熊与一郎が奥の座敷にいる。杢兵衛にそのことを知られたくなかった。

竹熊は居間の囲炉裏の前に胡座をかき、湯呑で茶をすすっていた。

「頭、すぐにここを出てくだされ」

土間に入った悠市が声をかけた。

「なんだ」

竹熊は驚いて腰を浮かす。

「離れの隠居殿が竹林を歩いております。やがてここにもあらわれます。頭は顔を合せてはまずいのではありませんか」

「なぜ離れを出た。そんなことは許されぬはずだ」

「役僧が許したそうです。御主様も御承知でしょう。御廟所のお考えに、口を出すことはできませぬ」

「それはそうだが、なぜそのような勝手なことを……」

竹熊は口を尖らせてつぶやき、奥の座敷に行き、袴をつけた。腰に刀を差し、

「勝手口から出る。昼にはもどるぞ」

と、胸をそらせていい、裏から出て行った。

悠市は居間を拭き清めてから、庭に出た。竹林の奥を歩く柿太郎と杢兵衛が見える。柿太郎は腰をかがめる。杢兵衛が真似をした。柿太郎なりに良材の見分けかたを杢兵衛に教えているらしい。悠市は竹林に歩み入った。

「いかが。良材がおわかりでしょうか」

と、話しかける。杢兵衛が振り向き、小首をかしげた。

「さて、むずかしいものですな。素人には見分けられませぬ。柿太郎がこれは一年子、これは三年子と指さすのが、わたくしにはそれがわかりませぬ」

「それはたやすいことです」

悠市は杢兵衛の前の竹の枝をつかみ、引き寄せた。枝の節を指さし、

「枝は一年ごとに分かれます。分かれてできた節が、これは三つありましょう。三年子です。籠細工の材としてはちょうどよい竹です」

と、説明した。

「なるほど、そこまで見たことはありませんでした。御承知でしょうが、われらの土地は山ばかりで、御本家からたいして遠いわけではありませんが、ここに生えるような真竹はありません。根笹とか根曲り竹、ものの役に立つ竹としてはせいぜい雪に強い陸中竹で、筍は苦くてよほど食に困らぬかぎり口にいたしません。おのずからあまり竹を珍重いたさぬようになります」

と、杢兵衛が枝に手を触れて語った。その口調にいささか羨ましげな響きがあった。

昼にはもどるといっていた竹熊が、日暮れ近くまでもどらなかった。日々の定めの境

内の見廻りから悠市が家にもどると、竹熊が戸口に立っていた。
「すぐに来てくれ」
と、いう。緊張の面もちだった。
「まもなく日が落ちます。みどもはここを離れるわけには参りません」
と、悠市は拒んだ。
「わかっている。それはわかっている。だが、鬼に見せたいものがある。御廟所の見張りは人手を増やしておいた。もしものことがあれば、鬼はこれだが、拙者も一蓮托生だ。ともかく来てくれ」
竹熊は拳を腹に当てて見せた。よほど切迫した事情があるらしい。ためらう悠市の背中を押すようにして、竹熊は寺町通りに出た。寺町通りの番小屋にはいつもより多くの手先が詰め、ものものしい空気が漂っていた。竹熊は番小屋の横から裏道に入り、坂道を登った突き当たりの地蔵院という萱(かや)ぶきの小さな寺に歩み入った。
境内に足軽目付の手先が二人、六尺棒を地面に立てて警戒していた。竹熊の姿を見て一礼し、道をあける。
「こっちだ」
と、竹熊が悠市に向かって顎をしゃくった。地蔵院の裏は墓地である。万霊供養と彫った石塔が立ち、小さな塚が点在する。それらは無縁仏の墓だった。隅に手先が一人立ち、足元に莚が置いてある。莚の下に死骸があることはひと目でわかった。
竹熊はしゃがみこんで莚の端を上げた。屍臭が漂う。二日三日はたっている臭いだと、悠市は感じた。
死体は目と口をなかば開き、鼻腔に血がこびりついている。痩せた中年の武士で不精髭が伸びている。
「この斬り口を見ろ」
竹熊は死体の顎を指先で動かした。死体は硬直しているが、喉から首の骨まで両断され、ほとんどうしろの皮一枚でつながっていて、容易に動かすことができる。竹熊は中腰になり、莚を持ち上げた。右の胸乳の下から斜めに斬り上げた傷痕があらわになった。肉が裂け、断ち切られたあばら骨が見える。
「鬼、これをどう見る」
莚をかぶせ、死体を覆って、竹熊は悠市の顔をうかがった。悠市は即答せず、手刀で宙を切った。
「仏の刀はどういたしました」
と、竹熊に訊ねる。
「鞘からなかば抜いたところでとまっていたようだ。柄を握ったままときれていた。指が硬くなっていたから、折って柄から放したと、手先が申していた」

「一太刀で胸を斬り、首を断ったものと見えます。抜き合せる暇を与えなかったのでしょう。居合と見ましたが、このような太刀筋ははじめて見ました。おそるべき技です」

技だけではない。人並外れた膂力の持主にちがいない。

「これだけの腕の主は御領内には一人しかおらんと思ったが……」

竹熊は悠市から目をそらせた。

「なんと、頭はみどもを疑っておられるのか。刀をお見せいたそうか」

悠市は色をなし、刀を帯から外そうとする。竹熊は、

「よい、よい。それには及ばぬ」

と、手を横に振った。

「葬っておけ」

手先に命じてから、竹熊は悠市を地蔵院の堂の中につれて行った。廊下の隅に、花莚がひろげられ、両刀、印籠、胴巻など仏の持ち物が並べられている。悠市は竹熊にうながされ、花莚の前に並んで坐った。

「金は二朱と七十文ばかり。ずいぶん痩せた武士だった。なにも盗られてはおらんようだ」

「頭、みどもを疑っておいて、隠しごとはいけませぬぞ。仏は絶命してから二日はたっている。見つかったのは今朝か昨夕か知りませんが、無縁仏として葬るところを見ると、およそ身許の見当はついておるのでございましょう」

「鬼には敵わんな」

竹熊は印籠をとり上げ、掌の上で弄んだ。鳳凰文の蒔絵をほどこした四段重ねの印籠で、象牙の緒締と寿老人の根付がついている。

「この印籠にしても古いが安物ではない。なりはみすぼらしいが、持ち物はみなそこそこの品だ。どうやら、御分家の御家人で、この春あたりに脱藩した者ではないかと、見当がついている」

「それでは御分家に問い合せれば、身許は知れましょう」

と、悠市がいうと、竹熊は小さく首を横に振った。

「そうはいかぬ。内々に無縁仏として葬っておけとの、上のほうの御命令だ。御分家に問い合せなどできぬ。斬った武士はどうやら御領内にとどまっているはずだから、正体をつかむまでは内密にしておこうというわけだ」

竹熊は悠市の膝の上に印籠を放り投げた。

「それを一両日貸しておく」

悠市は印籠をとり上げ、造作を仔細に眺めた。

「見覚えがあるかどうか、例の御隠居に当たれと申されますか」

「拙者はなにも申しておらん。ただ貸してやると申しただけだ」

竹熊は薄笑いを浮かべる。その顔がいかにも狡猾そうに見えた。

二

境内はまだ薄暗く、星の光がにじんで見える。柿太郎の朝稽古の声をきき、悠市は家を出て長源寺の境内をのぞいた。柿太郎は袴の股立(ももだち)をとり、襷(たすき)がけ、素足である。摺り足で地に線を残しながら、頭上に振りかぶった木刀を真っ向から振り下ろす。同じ動作を愚直にくり返しながら、前にすすむ。息をつぐと直角に向きを変え、大きな四角の足跡の線を残して行く。

「えい、えい」

と、離れ家の縁側から、柿太郎の木刀の動きに合せるように、掛け声がかかった。諸(もろ)肌(はだ)を脱ぎ上半身をあらわにした杢兵衛が、両足を踏んばり、握った拳を左右かわるがわる天に突き上げる。頭と両肩から湯気が上がるように見えた。

悠市の姿に気づき、杢兵衛は天を突く動作をやめた。腕を袖に通し、悠市に向かって一礼する。

「これは邪魔をいたしました。どうぞおつづけください」

と、悠市は詫びた。

「いや、そろそろ息が切れて、やめようと思っていたところです」

杢兵衛は帯にはさんだ手拭いをつかみ、額の汗を拭った。

「おかけなさい」

と、杢兵衛は声をかけ、縁側に坐った。

「ごめん」

悠市は腰を下ろした。稽古をする柿太郎を二人はしばらく眺める。わずかの間に、空が明るくなり星が淡くなった。

「柿太郎の元気な稽古の声をきいていると、じっとしておられなくなりましてな。身体がなまらぬように動かしております。おかげで少し若返ったようです」

「若返ったなどとおっしゃるお歳ではありません」

「腕が伸びません。自分のことはよくわかっているつもりです」

柿太郎は木刀をおさめ、悠市たちのほうへ一礼すると庫裡のほうへ歩いて行った。井戸水で身体を拭くつもりだろう。勘のよい柿太郎は、悠市が早朝やって来たことで、杢兵衛に話があることを悟って、場を外したのである。

「昨晩、お話しに参ったのですが、すでにお寝(やす)みの御様子でしたので遠慮いたしました」

「日暮れとともに寝てしまいました。なにか急な御用事ですか」

「実は二、三日前に、身許の知れぬ武士の死骸が見つかりました。抜き合わせる暇もなく、一刀の下に討ち果たされておりました。足軽目付の調べでは、どうやら仏は御分家の御家人ではなかろうかということです」

悠市は杢兵衛の横顔を見やった。杢兵衛の表情は動かない。悠市は印籠を懐からとり出した。

「仏の遺品でござる。見覚えはありませんか。象牙の緒締に、鷹の羽の家紋が小さく彫られています」

「拝見」

杢兵衛は両手を重ねてうやうやしく印籠を受けとった。上下左右をひっくり返して見る。杢兵衛の表情が動き、目に悲哀の色が浮かぶのを、悠市は見のがさなかった。

「いかがでしょう」

「いい加減な返答をいたすわけには参りませんから、しばらく考えさせていただきましょう」

杢兵衛は印籠に見覚えがないとはいわない。

「仏の刀傷はおそるべきものでした。首は前から横に両断されて皮一枚でつながり、胸を下から斜め上に深く斬られております。見た目から受けた感じを申せば、たとえば試し斬りの痕です。それも相当の手練（てだれ）の太刀筋と見えます。試し斬りは動かぬ死体の胴を斬る。生身の人間をあのように斬るのは、容易なことではありません。みどもなりに傷から太刀筋を思い浮かべるならば、こうです」

悠市は縁側から下り、庭の土に指で線を描いた。下から斜めに上げ、首の高さで楕円を描いて真横にはねた。杢兵衛は悠市の指先が描いた線を凝視する。

「国表に首斬り勘兵衛と異名をとる御家人がいた。その者は居合をよくしたが、しかしもう還暦を過ぎ、退隠している。その者ならば、鬼殿が申されるような太刀筋であった」

と、杢兵衛はいった。

庫裡から柿太郎の姿があらわれた。朝粥を盛った茶碗を載せた膳を持っている。悠市は地に描いた線を、掌で消した。

「斬った者はいまだ御領内に身を潜めているようです。足軽目付が八方手を尽して探索しておりますが、まだ見つけられません。みどもが心配するのは、その曲者が御隠居に害をなすのではないかということです。お心当たりがあれば、きかせてください。そうでなければ、お守りできません」

「お心遣いはいたみ入る」

杢兵衛は軽く頭を下げ、印籠を悠市に返した。なにかをかくしていると、悠市は確信した。

悠市は朝粥の膳を運んで来た柿太郎と入れ替りに離れ家から竹林の家にもどった。竹熊は居間の囲炉裏の前で、煙管をくわえていた。同じ屋根の下で数日暮らし、竹熊が毎朝目ざまし草をたしなむと称して、煙草を一服することを知った。

「どうであった」

竹熊は待ちかねたように、煙管を宙に浮かせたまま身を乗り出す。悠市は囲炉裏をはさんで竹熊に向き合った。

「はっきりしたことは申せぬそうです」

「印籠に心当たりがあるのか、ないのか」

竹熊はいらだちをかくさない。

「心当たりはおありかもしれませぬな。それよりも、御分家の脱藩者のことを、御領内でお調べになったらいかがでしょう。親戚があるのではないでしょうか」

「鬼の指図は受けたくないものだ」

竹熊は憎まれ口を叩いたが、いささか思い当たりがありそうに、口をつぐみ考えこんだ。

「ごめん」

と、ことわり、悠市は土間に下りた。水桶と砥石を置き、鉈を研ぎはじめる。

「なにをする」

と、竹熊が声をかけた。

「そろそろ竹を伐らなければなりません。今日は半日研ぎに費やします」

竹熊には顔を向けずに、悠市は答えた。

竹林の中の傾斜地に良材が多く育つ。悠市は頭を布で包み、かもしかの革でこしらえた手甲をつけて竹林に入った。

良材はすでに選び、縄で目印をつけてある。腰につけた竹筒に清めの酒が入っている。この秋、最初に伐る竹の根元に、酒をかけた。例年であれば養子の柿太郎を立ち合せるのだが、やむを得ぬ事情がある。

悠市は竹の根元に片膝をついた。傾斜の低くなったほうから、鉈で切りこむ。右側、左側、右側と順に切りこみ、最後に残った傾斜の高いほうの部分を切る。竹はゆっくりと傾き、葉を鳴らして倒れる。竹林がひとしきり騒いだ。竹の切り口は、梅花の形になり、縦割れはない。

倒した竹は皮を傷つけぬように気を配りながら枝を払い、一本ずつ裏の納屋に運ぶ。風通しがよく、日が当たらない場所に、しばらく寝かすのである。雪の降る前に、乾燥させなければならない。

悠市は切り口を前にして竹をかつぎ、梢の葉を引き摺って竹林を出る。縁側の障子が

あき、竹熊があわてた顔つきで、手招きをしていた。見ると、家の前に二挺の駕籠が置かれている。五色沼の尼屋敷の駕籠だった。悠市は急いで竹を納屋に立てかけ、家にもどった。

頭の布をとり、手甲を外して土間に入る。居間に二人の尼が坐り、竹熊が困惑の表情を浮かべて対座していた。竹熊はほうっと音に出してため息をつき、

「鬼が参りました。拙者はなにも存じませんから、これにて引き退がります」

といい、両手をついたまま尻から退がって行った。尼僧たちは床に指のさきをつき、一礼した。

「野花の図譜をお返しに上がりました。お由良の方様はそれはお喜びで、花ざかりの野山の絵巻を居ながらにして眺めるようじゃとお話しなされておりました」

と、若い照月尼がいい、年長の妙月尼に顔を向けて相槌をうながす。妙月尼は悠市を見つめてうなずいた。

「いくら手にとっても見飽きることがない、活きて紙の上に立ち上がるように描かれているとおっしゃいました。けれども、本草学の御学問に要ある図譜をいつまでもひとり占めにしては申しわけがありませんから、お返しなさいとのことでございます」

照月尼がいい、ふたたび妙月尼に同意を求める。妙月尼は脇に置いた桐の箱を悠市に向けて押し出した。図譜をおさめるために新たにあつらえた箱である。妙月尼が両手で

蓋をとると、焚きしめられた香が匂った。

「御隠居殿はそれは差し上げてもよいと申されております。五色沼のお方様がそれほどお喜びならば、わざわざお返しに参られることはなかったのです」

悠市がいうと、妙月尼は首を横に振った。

「このような貴重な図譜をひとり占めするのはわがままと申すものじゃと仰せられておりますから」

蓋を閉じ、さらに悠市の膝元に箱を押し出す。悠市はそれを受けとった。

「それならば、みどものほうからお返しいたします」

図譜をおさめた桐箱よりひとまわり小さな包みを、照月尼が前に置いた。包みの結び目をとくと牡丹文の蒔絵をほどこした重箱があらわれた。

「羊羹でございます。御礼と申しては失礼かと存じましたが、御隠居様のお口汚しに……」

と、照月尼がいいかけるのを、悠市は手を上げてさえぎった。

「召し上がり物は、いっさいお取次いたさぬことになっております」

その口調の強さに二人は驚き、顔を見合せた。

「それはとんだ不調法をいたしました」

と、妙月尼が詫びた。悠市は黙っている。二人の尼僧は言葉の接穂を失い、悲しげに

目を伏せていたが、やがて挨拶をして腰を上げた。重箱はその場に置いて行った。中間がかけ声をかけ駕籠が離れて行く。竹熊が奥の座敷からあらわれ、

「思いきってぴしゃりといったものだ」

と、声をかけた。

「ちと強くいいすぎましたか」

「鬼のそのおそろしげな顔で、強いことをいわれたら、尼殿は縮み上がっただろう。まあよい。気軽に来られたら困る。少し脅したほうがよいのだ」

竹熊はそういいながら、図譜をおさめた桐箱の蓋をとり入念に中をあらためた。羊羹入りの重箱は確かめもせず、小脇にかかえ、

「これは番小屋に持って行く。よいな」

と、いった。

「御随意に」

悠市は図譜の桐箱をとり、竹熊にはかまわずに境内の離れ家を訪ねた。柿太郎がすまなそうな顔をして、

「お手伝いができなくてすみません」

と、詫びた。悠市が竹を伐って竹林の葉が騒ぐのが境内から見えたのである。

「いたしかたない。今年は格別だ」

悠市は柿太郎を慰める。声をききつけて、杢兵衛が障子をあけ、顔をのぞかせた。

「これは鬼殿。柿太郎から話をききましたが、今年の竹を伐る今日という日は、大切な日であったそうですな。わたくしのために、台無しにしてしまったようです。お詫びの言葉もござらぬ」

「お気になさらずに、それより、みどもの竹伐りのあと二、三日うちに、長源寺の寺男が大勢竹林に入り四年子の伐採をいたします。騒がしくなりますが、御辛抱ください」

悠市はそういってから、桐箱を縁側に置いた。

「五色沼から返して参りました」

「それは差し上げたつもりでしたが……」

と、いいながら、杢兵衛は桐箱を両手で捧げ持った。

三

高くそびえる長源寺の瓦屋根の蔭に日がかくれた。甘木川の河口のねぐらを目指して、白鳥の群れがもどって行く。墓地に面した建仁寺垣のあたりを悠市は見廻った。数人がいい争う声がした。

「なにしやがるんだ」

大きな声がきこえた。悠市は声のほうへ歩み寄り、垣の破れ目から通りを眺めた。長源寺の警護にあたっている足軽目付の内輪揉めらしい。襟をつかまれているのは、甘木湊の岡丁持上がりの男だった。黒の着流しに黒羽織を着た足軽目付が一人、少し離れて様子を見届けようとしている。

「いいから来い」

「見当ちがいだ。なぜおれがしょっ引かれなきゃならねえ」

岡丁持が襟をつかまれた手を振りほどこうとする。

「手向かいするな」

手先が顔を殴った。岡丁持は鼻をおさえて下を向く。腕力ならば、岡丁持のほうが優っているが、足軽目付の背後の威光が、抵抗できなくさせている。岡丁持はあきらめて、おとなしくなった。手先が岡丁持の帯をつかみ、一団となって寺町通りの番小屋のほうへ歩いて行った。

悠市は境内の見廻りをすませてから、庫裡に入った。役僧の秀因と竹林の伐採の日どりを相談するためである。来年の籠細工に用いる良材はこの一両日で伐り、納屋に立てかけてあった。

相談をすませて境内に出ると、日が暮れていた。離れ家は暗く、火の気はなかった。家にもどると、囲炉裏の前に主人然として竹熊が胡座をかいていた。薪が音を立てては

ぜる。竹熊は握り飯を食べている。味噌を塗った大きな丸い握り飯が、竹の皮に二つ載っていた。

「食わんか。長屋から届いたところだ」

竹熊は片手で握り飯を手にとったまま、片手で残った握り飯を指さした。足軽目付の長屋から握り飯を届けさせたのである。

「それならば、干し鰈がありましたものを」

「よいのか。干し鰈とは贅沢な」

竹熊は相好を崩し、食べかけの握り飯を竹の皮の上にもどした。干し鰈を焙ってから食べるつもりになったらしい。土間の天井から縄で干し鰈を下げてある。旧友の八幡社の宮司、沼山岩根が甘木湊の土産に置いて行ったものだった。最後に残った二枚を、悠市は縄から外し、長い竹串を刺した。

竹熊の前に一枚、自分の前に一枚、薪の炎から離して竹串を灰に刺す。やがて香ばしい匂いが立った。表裏を軽く焦げ目がつくほどに焼き上げて、囲炉裏から出す。背びれごと頬ばると、白い肉から湯気が立った。

「うまいなあ。干し鰈はひさしぶりだ」

竹熊は感に堪えぬ声を放った。悠市は握り飯を口に運んだ。二人は無言で、干し鰈の骨一本、飯粒一つも残さずに腹におさめた。

悠市が土間の水桶で竹の皮を洗う間に、竹熊は煙草盆を持ち出し一服つけた。ふうっと満足そうに煙を吐く声が、悠市の耳に届いた。悠市は囲炉裏の前にもどり、

「頭、夕方手先の岡丁持を番小屋につれこんだようですが、なんの御吟味ですか」

と、話しかける。竹熊は煙管を筒にしまいながら、

「いや、なんでもない」

と、とぼけようとした。

「水くさいことをおっしゃる。みどもは岡丁持が叩かれて鼻血を流すところを見ておりましたよ。頭にはこうして宿を貸し、今朝は離れの隠居が仏の印籠に見覚えがあるかないか訊ねに参り、お手伝いをしているではありませぬか」

「その上、干し鰈の馳走か」

竹熊はそれが癖の皮肉な口調でいい、煙草盆を背後に押しやった。

「あの岡丁持、とんだくわせ者らしい。足軽目付の手先になった上に、御分家の誰かの耳目の役もつとめておるようだ。身分不相応の金を持っておった」

「頭が手先として雇い上げたからには、身許がしっかりした男だったのでしょうに」

悠市は不審の目を向けた。

「甘木湊の丁持宿が請人だった。ちかごろは川船の動きが鈍く、丁持を遊ばせておるらしい。あの男は吉次というのだ。遊んでおるくらいなら、御用の役に立ちたいと自分から頼みに来たのだ。役に立つ手先はなかなかおらんから、これ幸いと雇い上げたが、いささか軽率だった」

「御分家の誰かの耳目の役をつとめているとおっしゃるが、それは確証があってのことでしょうか」

と、悠市が問うと、竹熊はめんどうそうに顔をしかめ、

「勘だ。臭うのだ」

と、投げやりな口調で答える。

「それだけのことで手先に縄をかけるのですか。万が一勘ちがいだったら、頭もただではすみません。そんなことをする頭ではござらん。なにか握っているのでしょう。みどもを蚊帳の外に置かれる御所存か」

なかなか本当のことを話そうとしない竹熊に悠市は腹を立てた。もともと岡丁持に疑念を抱いたのは悠市だった。そのことを竹熊に話したのもそうである。

「実は斬り殺された侍と奴が話しているところを見た者がある」

ようやく竹熊は岡丁持を捕えた理由を話した。悠市は竹熊の目をのぞきこむ。眼光に気圧されて、竹熊は横を向いた。

「みどもは境内、足軽目付は御廟所の外廻りと、持ち場はちがいますが、離れの隠居を見張り、守る使命に変りはありませぬ。手先の岡丁持、疑念はありますが、頭のお話を

うかがうところ確たる証拠もなさそうです。いましばらく泳がせておくのが得策と存じます。みどもにお任せ願えませぬか」

「そのようなことをしたら、組下の者どもが面目を潰されたと騒ぎだすにちがいない。鬼に身柄を預けるなど、できない相談だ」

竹熊は横を向いたままいった。

「岡丁持が身分不相応の金を持っていたと頭は申されたが、その金は実はみどもが与えたのですよ」

「なに、まことか」

竹熊は目をむいた。

「いかにも」

竹熊のこめかみに青筋が浮いた。どうにか感情のたかぶりを抑えて、

「勝手にしろ」

と、吐き捨てるようにいった。

人通りの絶えた寺町通りを番小屋の高張提灯（たかはりちょうちん）の明かりが照らす。六尺棒を持った番人が悠市のほうへ二、三歩近寄り、腰をかがめて顔を確かめ、

「なんだ、鬼さんか」

と、声を放った。

「ごめん」

と、声をかけて、悠市は番小屋に入る。足軽目付が二人、上がりかまちに並んで腰かけ、湯気の立つ茶碗を口に当てていた。

「なにか用か」

足軽目付の一人が咎めた。悠市は軽く頭を下げ、

「頭からお許しをいただきました」

二人の足軽の前を通り、奥の土間に入った。壁にかけた燭台の乏しい明かりが土間を照らしている。後ろ手に縛られた岡丁持の吉次が灯の下に横たわっていた。顔が腫れ上がり、鼻腔や口元に血がこびりついている。

「これ、しっかりしろ」

悠市が肩を揺する。吉次は目をあけようとする。目蓋が腫れてふさがっていた。吉次はうめきながら上半身を起こした。

「ひどく責められたな」

と、悠市は話しかけた。

「おれはなにも悪いことをしていねえ」

唇の傷口が開き、血が流れ出た。

「おまえはそういうが、御目付は疑っているのだよ。身の証が立つまい。明日になったら、牢屋敷に移される。これから日一日と寒くなる。牢屋敷にそんな薄い物を着て放りこまれたら、身体が保つまい」

悠市はかがみこみ、吉次の耳に口を近づけてささやいた。吉次はふるえだした。

「旦那、助けてください」

吉次は身体を折り、後ろ手に縛られたまま額を土間にこすりつけた。

「みどもならば助けてやることができぬでもない。だが、それもおまえしだいだ。正直に申せ」

吉次は頭を上げた。首を横に振る。

「おれのことはどうでもいいんで。牢屋敷に送られたら命がないと覚悟はしています。よしんば御放免になっても、外へ出たら殺される。おれじゃない。日向杢兵衛様をお助けくださいと申し上げているんです」

吉次は隣の足軽目付にきこえぬように声をひそめる。

「先日殺害された武士は、おまえの知り合いか」

吉次はうなずいた。

「その武士を斬った男が、隠居殿の命をとろうとしているのだな」

ふたたびうなずく。

「正直に申せ、おまえがかげろう飛脚か」

分家の黒岩藩の江戸屋敷に、ひそかにかげろう飛脚と呼ばれる隠密がいると奏者番の加納正右衛門からきかされていた。

「なんのことで」

吉次はふさがった目を開こうとする。かげろう飛脚という言葉自体を知らないという口調である。芝居には見えなかった。

「隠居殿の命を守りたかったら、知っていることをつつみかくさずに申すのだぞ」

悠市は念を押した。

「わかっています。なんでも申し上げます」

「殺害された武士の名は」

「矢掛四郎兵衛様と申します」

「御分家の脱藩人か」

「はい」

「殺した男の名は、異名を首斬り勘兵衛と申すのではないか」

と、悠市がその名を口にすると、吉次は驚いて生唾を飲みこんだ。

「よく御存じで」

「どんな男だ」

「矢掛様に首斬り勘兵衛が御城下に潜入したときかされたのです。おれはその侍を見たことがありません」

「おまえはなぜ隠居殿に義理立てするのだ」

「おれは黒岩藩の飛地の鷹匠村の生まれです。二十年も前に、村が飢饉で根絶やしになるところを日向様に救っていただいた。村では日向様は世なおし大明神ですよ。義理立ては当たり前です」

「そうか。みどもに考えがある。これから組頭を呼ぶから、殺害された矢掛四郎兵衛のことを神妙に白状しろ。ただし隠居殿にかかわることはいっさい伏せておけ。それはみどもの領分だからな」

「必ずお守りください」

「二言はない」

悠市は吉次から離れた。二人の足軽目付の前を通りかかると、待てと声がかかった。

「なんの話をしたのだ」

「頭にだけ話せといわれております」

悠市は顔も向けずにそう答えて、番小屋から出た。

家では竹熊が不機嫌な顔で待ち受けていた。悠市は竹熊の前に坐り、

「岡丁持を牢屋敷に移すのは待ってください。四、五日番小屋に置いてやっていただけ

ればありがたい」

「番小屋に置いておけるか。人手が足りぬのだ」

竹熊は悠市に白目をむいた。

「そうしていただければ、頭にはつつみかくさず白状すると、岡丁持は申しておりますよ」

「まことか」

竹熊は勢いこんで腰を浮かせた。

「よくいいきかせておきました」

「よくやった。手柄だ」

竹熊は勇み立って外に出て行った。

四

竹林が騒ぐ。伐り倒された竹に寄りかかられた竹がたわみ、反発する。そのたびに竹の葉が乱舞した。

竹林には寺男が数人入り、四年子の竹を伐っていた。伐った竹は垣根や普請の用材として売られ、寺の収入となる。

「なにやらにぎやかなものですな。心が浮き立つようです」
李兵衛が縁側に立ち、小手をかざして竹林を眺めてつぶやいた。悠市が庭から李兵衛を見上げた。
「みどもの家にとってはこれが祭礼でございます。後ほど餅をふるまいます」
「竹伐りの差配は鬼殿ですか」
「今年はみどもには大切な用がありますから、差配は柿太郎が名代をつとめます」
伐るべき竹を寺男たちに指示するのが差配の役目である。柿太郎は裃をつけ、鉢巻をしめて、高い声を張り上げて号令をかけている。その声が悠市と李兵衛の耳にも届いた。
「ほう、やっておりますな」
李兵衛が微笑した。悠市は気を許さず境内に目を配った。人の出入りがふだんより多い日である。
悠市は縁側に腰を下ろす。李兵衛が横に坐った。
「先日、隠居殿は殺害された武士の名がわからぬと仰せられたが、そのお方は矢掛四郎兵衛殿と申されるのではありませんか」
悠市が話しかける。李兵衛の顔から笑みが消えた。
「印籠はたしかに矢掛の持ち物ですが、殺されたのが本人だとなぜわかりますか」
と、李兵衛が反問した。

「足軽目付の手先に雇い上げた吉次と申す岡丁持がたしかに矢掛四郎兵衛殿だと申しておりました。吉次は矢掛殿となにかつながりがあったようです」
「わたくしは岡丁持に知り合いはおりません」
「飛地の鷹匠村の出だと申しておりました。隠居殿には恩義のある村だそうです」
「鷹匠村か」
李兵衛はなにかを思い出そうとして、目を空に向けた。
「二十年ほど前に飢饉で村が根絶やしになるところを、隠居殿のお力で救われたと申しております」
「そんなこともあった。昔の話です」
李兵衛は多くを語ろうとしない。思い出したくもなさそうだった。
「その吉次が申すには、矢掛殿が殺害される前に、御城下に首斬り勘兵衛が潜入したと語ったそうです。なにをしに参ったか、申さずとも隠居殿にはおわかりでしょう」
「わたくしの首が所望でしょう。しかし先日も申しましたが、その者は還暦を過ぎて退隠しております。矢掛を一刀の下に斬り捨てるほどの力が残っておるとは、とうてい信じがたい。矢掛もひとかどの遣い手でした」
「その者が誰にしろ、討手が身近に迫っているのは確かなことです。今晩から、みどもは不寝番をいたします。柿太郎は家にもどしましょう」

「このような役立たずの隠居は、打っ棄っておかれるがよい」
冗談の響きはない、真剣な口調だった。それが本心のようにも、悠市には思われた。
庫裡の前に臼が引き出された。法螺貝が吹き鳴らされる。その音を合図に、山門から人々が行列をつくって入って来る。袴をつけた柿太郎が、
「餅つけ」
と、号令した。湯気の立つ蒸籠をかかえた寺男が、庫裡の台所から走り出た。どっと歓声が上がる。臼を遠巻きにする見物人の中に、足軽目付の手先がまぎれこんでいるのを、悠市は目ざとくみつけた。ふと気がかりを感じ、
「隠居殿、お入りなされ」
悠市は家の中に入るようにうながした。威勢のよい掛け声と、杵の音が高く響いた。搗き上がった餅を寺男たちが片栗粉にまぶして小さく丸め、高く放り投げる。見物人たちが、声を上げて奪い合った。役僧の秀因が庫裡の前に出て見物している。餅投げは差配役の柿太郎と寺男に任せ、僧たちは手を出さない。
やがて餅投げが終り、見物人たちは餅とともに下げ渡された竹をかついで、境内から立ち去った。柿太郎が悠市の元に歩み寄った。顔が上気していた。
「つつがなく竹伐りがすみました」
と、柿太郎が大きな声で報告する。

「よくやった。これで柿太郎はいつ鬼の当主となっても不足はない」
と、悠市が褒める。柿太郎は緊張が解け、泣き笑いの顔になった。
「今夜から父が隠居殿のお守りをする。柿太郎は家にもどって休め」
「はい」
その声をきき、李兵衛が障子をあけた。
「柿太郎は家にもどるのですか。それは寂しい。昼のうちは、ここに遊びに来るのを許してくだされ。のう、鬼殿」
と、李兵衛がいった。柿太郎は李兵衛に竹の皮の包みをさし出した。
「餅でございます。御隠居殿に食べていただこうと思い、とっておきました」
「おお、これはかたじけない」
李兵衛は柿太郎に一礼して、竹の皮の包みを受けとった。指で皮の上から押して、
「柔らかい。搗きたての餅をいただくのはひさしぶりだ」
と、つぶやいた。
「どうぞお召し上がりくだされ。祝いの餅でござる」
悠市がすすめた。李兵衛はかぶりを振り、
「すぐに食べてはもったいない。少しずついただくようにいたしましょう」
といい、竹の皮の包みを障子の蔭に置いた。

「それでは家にもどります」
柿太郎は袴の裾を揺らせて小走りに竹林に向かった。
柿太郎が家にもどるのと入れ替りに、竹熊が境内の隅にあらわれて、悠市を手招きした。悠市が歩み寄ると、
「今晩から、鬼が隠居殿のお守りをするそうだな」
と、離れ家を見やりながらいった。
「そういたします」
「なぜだ。なにか変ったことでもあったのか」
探るような目で、悠市を見上げる。
「あのようなことがありますと、やはり用心をしなければなりません」
「殺されたのは矢掛四郎兵衛だと吉次が白状したことに嘘はなかった。印籠の家紋は矢掛の物だ。御家中に遠縁の家があった」
竹熊は吉次のいうところが正しいかどうか裏付けをとったのである。
「さすがにお調べが行き届いておりますな。吉次はどうしておりますか。ひどく責められて、昨晩は弱っていたようですが」
「解き放った。持っていた金は鬼が与えたもので、殺された矢掛四郎兵衛とはただ顔見知りだと申すのでは、当人に罪があるわけではないからな」

「解き放ったとは。なぜそのような……」
悠市の声が大きくなり、竹熊に詰め寄る。竹熊は驚き、後じさりした。
「当たり前ではないか。疑いの晴れた者を泊めて飯を食わしてやるほど役所は豊かではないぞ」
「殺されてしまいますぞ。まだき出さなくてはならぬことがありましたのに」
悠市は唇を噛んだ。
「吉次が殺されると。誰に」
「わかりません。吉次はそう申しておそれておりました。すぐに手先を走らせて探させてください」
その声は離れ家の杢兵衛にきこえたかもしれない。

夜半に霙が降った。まもなく雪の季節である。まだ夜が明けぬ前に、竹林から柿太郎の朝稽古の声がきこえる。その声とともに杢兵衛が目覚め、蒲団を上げた。悠市は手水構えの土間から杢兵衛に朝の挨拶をすると、板戸をあけて外に出た。霙はやんだが、土は濡れている。竹林には霜柱が立っているだろう。
山門から出て、垣根に沿って一廻りをする。晩のうちに様子をうかがうために近づいた者がいないか、足跡を調べるためだった。一巡して山門にもどったとき、餅投げの人

の群れを見たときの気がかりな気分を悠市は思い出した。

恒例の行事だから、つい用心を忘れた。人垣の中に何人も老人がいた。首斬り勘兵衛は還暦をとうに過ぎているという。餅を奪い合う人々の中にまぎれこんでいたとしたら、李兵衛の姿を見たかもしれなかった。

李兵衛が縁側に立ち、拳を天に突き上げる動作をくり返していた。悠市は歩み寄り、

「歩いているうちに気になって参りました。きのう餅投げの群衆のうちに、怪しい老人はおりませんでしたか」

と、問いかけた。李兵衛は手を休め、さてとつぶやき小首をかしげる。

「勘兵衛のことですか。わたくしは顔を覚えておらんのです」

心もとない顔つきになった。悠市には依然として気がかりが残った。

時がたつと雲が切れ、日が思いがけぬ高さにのぞいた。寺町通りの番小屋から手先が駈けて行く。悠市はいやな予感がした。竹熊が陰鬱な面もちで山門から入って来た。

悠市は竹熊の姿を見て、迎えに出た。

「殺られた」

と、竹熊がいった。吉次のことである。竹熊は境内には入りこまず、山門の近くで足をとめた。悠市は言葉もなく立ちつくす。

「昨夜斬られたようだ。内間川に沈んでいた。死骸は地蔵院に運んだが、どうする。改

めるか」

竹熊は吉次を放免したことに責任を感じていると見え、気まずい表情になった。

内間川は寺町の脇を通って城下町を半分に割る形で流れ、一部は城の外濠に利用されている。寺町のどこかで吉次は斬られたにちがいない。

「みどもは境内から出ることができません」

と、悠市が答えた。

「そうか。では話しておくが、吉次を斬ったのはどうやら矢掛四郎兵衛を殺した下手人と同じ男だ。同じ傷が背中と首にあった。吉次は逃げようとして、背中と首筋を一太刀でやられた」

竹熊は首のうしろを手刀で軽く叩いて見せた。悠市はこみ上げる怒りをおさえられない。

「だから申し上げたではありませんか。吉次を番小屋に置いてくださいと……」

竹熊にぶつけるべき怒りではなかった。

「うむ」

竹熊はうなり、表情を固くする。謝罪はせずに、悠市に背を向けた。

竹熊が山門から出るのを見送り、悠市は離れ家にもどった。手水構えの戸をあけると、座敷から李兵衛が声をかけた。

「なにかありましたか。鬼殿が声を荒げなさるのは珍しい」
「お耳に届きましたか」
悠市は草履を脱ぎ、くぐり戸から小座敷に上がった。
「吉次と申す岡丁持が切害にあいました」
「鷹匠村の男か……」
と、杢兵衛はいったが、あとの言葉がつづかない。
「矢掛四郎兵衛殿と同じ下手人であろうと足軽目付の組頭が申しております。首斬り勘兵衛の仕業でしょう」
杢兵衛は答えず、しばらく沈黙した。
「お願いがござる」
やがて杢兵衛が口を開いた。
「昨日いただいた餅、もったいなくてまだ口にしておりません。せっかくのいただき物を、右から左に放り出すようなことを申して、お気を悪くされたら本意ではありませんが、矢掛四郎兵衛と吉次の霊前に、餅を供えていただけませぬか。甘木湊で稼いでおった吉次はいざ知らず、矢掛はおそらく餅などは何年も口にしたことがなかったでしょう」
「承知いたしました。仏は地蔵院に葬られております。柿太郎に代りの餅を届けさせます。さし上げた餅は縁起の物ですから、お召し上がりください」
「いいや、とても喉を通らぬ。わたくし一人が贅沢をしては神罰が下ります」
杢兵衛の声は湿っていた。
杢兵衛が待ち望んでいるらしいかげろう飛脚という隠密は、殺害された矢掛四郎兵衛だったのか。吉次だったのか。それとも加納正右衛門の話は真実ではなく、そんなものは文字通りかげろうにすぎないのか。悠市は杢兵衛に問うことができなかった。

五

ひさしぶりに月の明るい夜になった。八幡社の宮司の沼山岩根は、竹林の隅にしゃがみこんでいた。離れ家を役僧の秀因が訪れ、杢兵衛と話しこんでいる。その間に、悠市は岩根と会う暇を得た。
「柿太郎が届けた書状には、六十過ぎの武士と書いてあったが、それだけのことで当人を探し当てるのは、無理難題だ。手の空いた氏子に頼んで、城下を歩かせたが、無駄足だった」
と、岩根がいった。そこからは悠市の家が見える。居間の障子が明るいのは、竹熊がそこに居坐っているからだった。柿太郎一人であればもう寝ている。

「やはりこういうことは、足軽目付に任せるべきではないのか。素人の手には余る」
「組頭に語れぬことがあるから、内密に岩根に頼んでいるのだ。無理でも、手を貸してくれ。この寒さでは、野宿もかなわぬだろう。明日は七日町の旅籠を探してくれぬか。武士の姿にこだわることはない。商人かなにかに姿を変えているかもしれぬ」
「まあ、やってみるが、あまり頼りにせんでくれ」
岩根は自信のなさそうな声を出す。悠市は柿太郎に指示して、地蔵院に餅を供えに行くついでに、岩根へ書状を届けさせたのだった。
「もう一つの用件はどうであった」
悠市は吉次がどこで斬られたか、その場所を尋ね当てることも岩根に依頼していた。竹熊とは気まずくなり、話をきくことができない。
「死骸が沈んでいたのは、鉄砲町の堤あたりだそうだ。内間川の水かさは増していたが、一晩でそう流されるものでもない。寺町の近くで殺されたのではないのか」
「どうも解せぬ話だ」
悠市は考えこんだ。吉次は番小屋から解き放されてまもなく殺されたらしい。あとをつけられたとしか考えられない。斬ったのが勘兵衛に間違いないとすれば、番小屋の近くで様子をうかがっていたとしか考えられない。あるいは足軽目付の誰かが、内通しているのだろうか。

離れ家で声がした。秀因が帰るところだった。
「みどもはもどらねばならぬ。明日も頼むぞ」
と、悠市は拝む真似をした。岩根はうなずき、竹林の奥に消えた。
悠市が離れ家にもどると、李兵衛が紙の束を葛籠にしまおうとするところだった。李兵衛は紙の束と新しい筆を悠市に見せ、
「秀因殿からちょうだいしました。かたじけないことです」
と、額のあたりに捧げ持った。
「吉次が殺された場所のおおよその見当がつきました。寺町からそう遠くないところのようです。刺客は近くにいて、こちらの動向をうかがっていると思ったほうがよさそうです」
悠市ははじめて刺客という言葉を遣った。李兵衛はかすかに眉をひそめた。
「勘兵衛という男、いったいどのような姿か、大柄か小柄か、なにか手がかりになることを思い出してくだされ。みどもは境内から出られぬ、敵は思うがままに歩きまわっておる、これでは勝負になりませぬ」
悠市はようやく焦りを覚えた。李兵衛は当惑の色を浮かべて、
「嘘を申しているわけではない。その姿が思い出せぬのだ。江戸屋敷の庭である武士の切腹の介錯をするところを、こちらは座敷から検分していただけですからな。ああいう

景色はあまり思い出したくない。それに介錯人と申す者は、人前には出ないものですよ」

と、いった。その言葉は悠市自身のことをいい当てられたようで、胸にこたえた。

まもなく李兵衛は燭台の灯心を切った。悠市は勝手口に退がり、上がりかまちに坐りこんだ。膝の前に突いた刀を支えにして、身を休める。座敷で李兵衛が、低くため息をついた。身を起こす気配があった。

「鬼殿、相談がござる」

と、声がかかる。悠市は小座敷の敷居に膝をすすめた。李兵衛の顔は闇の中である。声だけがきこえる。

「勘兵衛がわたくしの首をとりに来ると、信じたわけではありません。誰でもよし。誰かが来るとして、外は足軽目付が囲み、内には鬼殿が守るといった備えでは、容易に押しこむことはできません。鬼殿は手足を縛られて敵に刃向かうようだと、そうは申されぬが、そんな気持でござろう。敵もまたしかり。攻めもならず、去りもならず、そのうちに追い詰められて、御本家の役人を害めるようなことがあれば、わたくしは身の置きどころがありません。むしろ一ヵ所、結界を破り、そこから敵を誘い入れるのが得策ではありませぬか」

李兵衛がなにをいいたいのか悠市には呑みこめず、黙った。

「わたくしをここから他所へ、たとえば鬼殿の家に移したらどうでしょう。柿太郎はしばらく庫裡に預け、危険が及ばぬようにします。鬼殿が他出なされば、そこに隙ができ、曲者があらわれます」

「それでは、隠居殿をお守りすることができません」

「わたくしの身などは案じなさるな。御廟所を血で汚すようなことがあれば、御本家にまで内訌が及びますぞ」

「隠居殿に万一のことがあれば、みどもは腹を切らねばならないのです」

悠市は李兵衛の考えをきき入れるつもりはなかった。

庫裡から朝粥を届けて来た柿太郎に呼笛を持たせて、悠市は家にもどった。竹熊は羽織を着て、外に出る用意をしていた。悠市から顔をそむけて出て行こうとするのを、しばらくと引きとめ、

「先日はつい大きな声を出し、無礼をいたしました。お赦しください」

と、詫びる。竹熊はすぐに機嫌を直した。当人にもしくじったと反省する負い目がある。

「少し話をうかがってもよろしゅうござるか」

「いまから役所に行くところだ。手短にしてくれ」

竹熊は羽織の尻をはね、上がりかまちに腰かける。悠市は横に並んでかけた。

「吉次が殺害されたときのことを考えているのです。放免になったその晩に、内間川の堤で斬られたということは、下手人が番小屋から吉次が追い払われるところを見ていてあとをつけたか、急に放免となったことを誰かが教えたのではありませんか。そうでもなければ、その晩に殺されるはずがないと思えるのですが」

竹熊は気味悪そうに、悠市の顔を見た。

「それではわれら足軽目付の中に内通する者があると申すのか」

「本家、分家、親戚同士がからみ合いもつれた糸になっております。少しお調べになったらいかがでしょう」

「まさか朋輩の中にそのような者がおるとは考えられん」

「そう申されるなら、天利兄弟も同じ家中ではありませんか。隠居殿を不忠と見るお方にとっては、それを守らんとする者は、みな敵でしょう。いまや誰が敵で誰が味方か、わかったものではござらぬ」

「うん」

竹熊は低くうなる。少し顔が蒼ざめたようだった。

「番小屋を見張っていた者がいたかもしれぬ。近くに見知らぬ者が出入りする屋敷はないか、屋台店など出ておらぬか、調べてみよう」

といい、竹熊は出て行った。

その日の夕方、境内の見廻りをしていた悠市に、山門の蔭から竹熊が声をかけた。寺町通りに人影がないことを確かめるように、竹熊はあたりを見廻し、

「鬼のいう通りだ。足軽目付も油断がならぬ。誰を信じたらよいかわからなくなった」

と、ささやいた。

「内通する者をつきとめなさいましたか」

「いや、それはいまだしだが、吉次を放免したあと、番小屋を出て行った者がいる。それが臭い。しかし、そやつを縛り上げて吟味するわけにもいかぬ」

番小屋の上がりかまちに腰かけて茶を喫んでいた二人の足軽目付を、悠市は思い出した。しかしその名を、竹熊に訊ねなかった。

「これでは、御廟所の周囲は足軽目付が守っていると安心しているわけには参りませんな。こちらの動向が筒抜けになっているかもしれません」

「それを申すな。拙者も気が重い。同士打ちはしたくないものだ」

「みどもは隠居殿をお守りさえすれば役目がつとまるのです。吉次殺しのことは、頭の領分のことです」

「承知だ。いわれるまでもない」

そういってから、竹熊はもう一度寺町通りを見渡した。

「暫時、つきあわぬか」
「離れ家には柿太郎しかおりません」
「遠くへは行かぬ。仏光寺だ」
それならば呼笛の音が届かない距離ではなかった。悠市は竹熊にうながされて、山門を出た。仏光寺といえば、先日天利兄弟たちが屯集した寺だった。
仏光寺の玄関で、竹熊は、
「竹熊与一郎でござる。まかり通る」
と、声を張り上げた。小僧が手燭を持って取次に出て来たが、案内も乞わずに上がった。勝手を知ると見え、台所へ通る。三十坪ほどもある板の間のはしに、大きな囲炉裏が切ってあり、薪が炎を上げていた。住職の姿はなく、役僧が坐っていた。悠市は合掌して会釈をする。竹熊は板壁を指さし、
「これだ」
と、悠市に声をかけた。高く吊られた棚に彫り上がったばかりの大黒像が置かれている。高さ一尺五寸はありそうな大きな像だった。
「大黒様がどうかしましたか」
「半月ほど前、歳とった彫師が訪ねて参り、大黒像を彫って寄進したいと申して、泊まりこみました。二、三日前に彫り上がったものです。しかるべきお方の口添えがありましたから、信用してお世話いたしました」
役僧が不安そうな顔つきで話した。
「その彫師が、一昨日の晩、急に立ち去ったのだ」
竹熊は意味ありげに悠市を見る。老彫師が立ち去ったのは、吉次が殺された晩だった。
「番小屋の目と鼻のさきに、そういう者が泊まりこんでいたとは、拙者も知らなかった」
「その者がなにかいたしましたか」
と、役僧が口をはさむ。
「いや、なんでもない。お騒がせいたした」
竹熊は手を横に振り、悠市をうながして台所を出ようとする。竹熊様と役僧が呼びかけ、追いすがった。紙包みをすばやく竹熊に握らせる。竹熊はそれを押し返した。
「拙者一人で参ったのならばいざ知らず、傍で鬼が大きな目を見開いて見ております。袖の下は受けとれませんよ」
広い台所に反響する大きな声を出す。役僧は恥じ入って面を伏せた。
竹熊は玄関を出てから、
「住職にくわしく話をきいてある。大黒像を鬼に見せるためにつれて行ったのだ。坊主め、よけいなことをする」

と、苦々しくいった。

竹熊は住職からききとったという老彫師の人相と身体つきを話した。しかし口添えをしたしかるべき人物と役僧が語っていたその名は、悠市に明かそうとはしない。その名を口外することをおそれてもいるようだった。

仏光寺に泊まり大黒像を彫っていた老彫師が、足軽目付の内通に援けられて、吉次を殺害したと、竹熊は確信しているにちがいないが、そのことには口をつぐんだ。

六

思いがけず長源寺にもどるのが遅くなった。境内の離れ家の障子に、灯火が映っている。悠市は縁側から声をかけた。

「隠居殿、変りはござらぬか」

障子があき、顔をのぞかせたのは柿太郎である。

「隠居殿はおられません」

と、柿太郎がいう。悠市は驚いた。

「おらぬとはどうしたことだ」

柿太郎は縁側に出て来て、

「父上がそう申したと隠居殿が仰せられました。お一人で、家に行っておられます。わたくしがこの家の留守居をすることになっているのではありませんか」

と、不思議そうな顔をする。

「しまった」

悠市は竹林のほうへ顔を向けた。柿太郎は杢兵衛に欺されたのである。

「隠居殿は、なにか持って行かれたか」

「提灯だけです」

提灯の明かりでわざわざ顔を照らして、境内を横切って行った。結界の一ヵ所を破り、敵を誘いこむと杢兵衛が語っていたが、それを実行に移したのである。

「なにか不調法をいたしましたか」

と、柿太郎が小声で訊ねる。

「いや、心配には及ばぬ。柿太郎は今晩は庫裡に泊めてもらえ」

と、指示してから、それが杢兵衛の策略の一部だったと、悠市は思い当たった。

「はい」

と、柿太郎は返事をして、家にもどり灯心を切って出て来た。柿太郎が境内を歩いて庫裡に入るまで、悠市は見守った。

悠市は竹林のほうへ二、三歩歩んで足をとめた。すでに合戦の法螺貝が吹かれたと、

気がついたのである。悠市は離れ家の裏から築地塀を乗り越え、竹林の家を見下ろす斜面に身を潜めた。そこから、囲炉裏の火をほのかに映す居間の障子が見える。竹林の様子も見てとることができた。

身動きはしない。指さきだけを動かし、寒さで身体が硬くならぬように備える。やがて、寺町通りから提灯が近づいて来た。竹熊である。悠市は足元を手さぐりして小石を拾い上げて、投げた。

「頭」

と、低く声をかける。竹熊が足をとめた。石を投げたのが悠市であることに気がついたと見える。

「このまま番小屋におもどりください。事情があります。手先は近づけぬようにしてください」

と、ささやく。すべてききとれたのかどうか、竹熊は向きを変え、寺町通りにもどって行った。

風が出た。雲が流れ、月の出入りが忙しくなった。李兵衛は囲炉裏の火に灰をかぶせたと見え、障子が暗くなった。竹林は月の出入りにしたがい、浮かび上がり、闇に沈む。月が天心にある。雲が切れ、竹林の葉がくっきりと見えた。悠市の目は竹林に潜む人影をとらえた。足音を忍ばせ、家の蔭にかくれて竹林にまわりこんだ。

「曲者」

と、大声を放ったのは、家の中の李兵衛にきかせるためである。悠市は家の蔭から歩み出た。竹林から人影が立ちあらわれる。髪は白く、痩せて、両眼が飛び出したように見える。雲が月を覆うと、闇の中に眼光だけが浮かぶように見えた。竹熊が語っていた老彫師の人相風体そのままである。

「首斬り勘兵衛とやら申す、おぞましい名前で呼ばれるのは、その方か」

ふたたび李兵衛にきかせるために大きな声でいった。

老彫師は無言である。腰を低くし、左手を鯉口に当てて、悠市を待つ。悠市は大刀を鞘走らせた。摺り足で三間ばかりに距離を詰め、動かなくなった。呼吸が静かになった。老彫師の全身から凄まじい殺気が発せられる。悠市には老彫師の手元から発するだろう光芒の軌跡が見てとれた。矢掛四郎兵衛の死体に残ったものが、その光芒の軌跡である。その男が首斬り勘兵衛だと、悠市は確信した。

月が竹林を照らし、また闇になる。たがいの呼吸を探るだけで、どちらも微動だにしない。強敵だった。悠市は相討ちを覚悟した。

悠市の大刀の切先が動いた。同時に老彫師の腰が沈む。その瞬間、闇よりも黒い線が、老彫師の胸元に走り、息が乱れた。悠市が踏みこみ、真っ向から斬り下げる。老彫師の腰から光芒が走る。刃は打ち合うことなく、老彫師の刀は空しく虚空を斜めに裂いた。

真っ向から頭を割られ、老彫師はその場に叩きつけられるように倒れた。

「助かった」

と、声を発したのは、李兵衛である。李兵衛の左手に、いつこしらえたものか半弓が握られ、右手には烏の黒い羽を使った手製の矢が握られている。勝負を決する瞬間に老彫師の胸元に走った黒い線が、その矢だった。

悠市は刀を懐紙で拭い、鞘におさめた。竹熊の提灯の明かりが近づいて来る。竹熊は駈け寄り、老彫師の死体を照らした。

「凄まじい」

と、一言つぶやき、顔をそむけた。

「その者、たしかに介錯人の勘兵衛でござる」

李兵衛が竹熊の提灯のほうへ顔を向けていい切った。李兵衛の髪が逆立っていることに、悠市はようやく気づいた。悠市は縁側に歩み寄った。

「隠居殿、早く離れ家におもどりなされ。人に見られてはいけない」

と、声をかけ、弓矢を受けとった。弓も矢も家の中にあったありあわせの竹と糸で急にこしらえたものである。矢羽根は庭先で拾ったらしい烏の羽、鏃（やじり）の代りに釘を結びつけてある。とうてい人を殺傷する威力のない玩具に等しかった。しかし、それが悠市の命を救ったのである。

悠市の言葉にしたがって李兵衛が歩きだそうとしたとき、竹熊が悠市に提灯を預けた。

「失礼ながら、これも役目ですから」

と、ことわって李兵衛の全身を探り、なにか武器になる物を持ち出していないか、念入りに改めた。

ちらほらと細かい雪が舞ったかと思えば日が照り、すぐにまた空が曇って雪が散る。人を弄ぶような空模様だった。

沼山岩根がつれて来た三人の農夫は、雪が降るから家に上がれと悠市が許してもきかず、庭に坐ってしきりに頭を下げた。

「お手数をかけました」

「御迷惑をかけました」

ききとりにくい山里の言葉をくぐもった声でこもごもに口にする。黒岩藩の飛地の鷹匠村から、吉次の骨を分けてもらいに来たのだった。地蔵院の墓地に埋葬したばかりの遺体から、指を切りとったという。

吉蔵（きちぞう）という腰の曲がった老人が、吉次の指を包んだ麻の布を大事そうに膝の上に置いて両手でおさえていた。吉蔵は吉次の伯父にあたるという。三人の中では吉蔵の言葉だけが、悠市にききとれた。

「吉次は孝行息子ださけ、稼いだ分ば爺さよぐ送ってめんどう見たべす、なしてこげな無惨な最期ばとげねばなんねべか」

と、嘆いた。三人は甘木湊の丁持宿と足軽目付の役所にも御礼参りをしてから村にもどるという。吉次が黒岩藩の内紛にかかわりを持ったことは知らなかった。

三人の農夫を見送ってから、岩根は一人でもどって来た。首斬り勘兵衛の血が流れたあたりを知らずに踏んで縁側に腰かけ、

「鬼の竹林でなにか騒ぎがあったと噂になっているが、どうなんだ」

と、問う。

「亡霊でも出たのだろう。この竹林には悪霊が棲むらしいからな」

悠市はとり合わなかった。

「年寄りを探し出すのはやはり難しい。氏子も音を上げているし、わたしもそう無理な頼みはできぬ。もう辞退させてくれ」

と、岩根がいう。

「すまぬ。それはもう片がついた。迷惑をかけたな」

悠市が頭を下げる。岩根は蚊帳の外に置かれた不満を顔にあらわし、

「亡霊はもう出たあとか。われらは昼間の亡霊を鉦太鼓で探し歩いていたことになるな」

「そう臍を曲げるな。この埋め合せはする」

「きっとだな」

と、念を押して、岩根は去った。それをどこかに身をかくして見ていたらしく、すぐに竹熊があらわれ、

「宮司の沼山岩根が参ったな。鬼がなにか用を頼んだのか」

と、疑わしげな目を向けた。吉次の遺骨を受けとる鷹匠村の農夫をつれて来たのだと説明すると、竹熊はいやな顔をした。悠市の依頼をきかず、吉次を放免して殺させてしまったことを負い目に思っているのである。

「仏光寺では大黒像を焼いたそうだ。あんな物に年中見下ろされていたら、気持が悪かろう」

竹熊は奥の座敷に上がりこみ、泊まりこみのために持ちこんだ身のまわりの品を風呂敷に包んだ。

「お引き揚げですか」

と、悠市が声をかける。

「そうだ。しばらくは鬼の家に討入するような乱暴者はあらわれまい。それよりも家中の争いのほうが目が放せぬ。御奏者番が派閥に手を突っこみはじめたらしいぞ」

竹熊は興味津々たる口調でいい、目を輝かせた。

「みどもにはそういうことはわかりません」

悠市は政治の話は苦手だった。できることならば、そうしたあらそいからは離れていたい。

「御奏者番のお手なみ拝見だ。これは見ものだぞ」

竹熊は風呂敷包みをかつぎ上げた。なにか家中の内情をつかんだらしい。悠市はそれをきくつもりはなかった。

目早の北溟（めはやのほくめい）

一

冬のはじめの重く湿り気を帯びた雪が、足駄の歯の間にはさまる。人並外れた悠市の長身が、足駄を履くとさらに高くなった。目を細かく編んで漆を塗った丸笠で顔をかくし、定紋入りの錦でつつんだ献上の鳥籠を両腕でかかえてゆっくりとすすむ姿は、雪の上を巨大な地蔵が滑って行くようだった。

「鬼だ」

と、家の中でこどもたちが騒ぐ。悠市はきこえぬふりをする。こわい物見たさの顔が、格子の間からのぞく。鉄砲町を通り過ぎると家並がしばらく絶え、こどもが騒ぐ声もきこえなくなった。

足軽たちの長屋がある鉄砲町の外れに内間川にかかる木橋があり、橋の向こうは武家の町である。橋を渡りきったとき、三人の武士が雪をかぶった築地塀の蔭からあらわれて、悠市の前後をふさいだ。

正面に立った武士は、悠市より少し背が低いが、体格はすぐれていた。年齢は三十前らしい。眼光が鋭かった。一礼して、

「卒爾ながら鬼悠市殿とお見受けする。わたくしは天利八兵衛様の組下の徒で、阿部六三郎と申す者です。八兵衛、要助御兄弟様とは、一刀流亀崎道場の同門に当たります。過日、御兄弟様と貴公の間にいきさつがあり、貴公は御二方を足蹴にして恥辱を与えた。これは、わたくし事の恨みではござらぬ。亀崎道場の同門として、見のがしがたいことでござる。武門の意地にかけて、尋常の勝負を所望いたします」

と、一息にいった。ていねいな言葉づかいだが、口調に怒りを含んでいる。背後の二人の敵意に満ちた視線を、悠市は首筋のあたりに感じた。

「道をおあけなさい」

悠市はしずかにいった。

「尋常の勝負を所望いたします」

阿部六三郎が雪の上に半歩踏み出し、圧しかぶせるようにいう。

「逃げるな」

と、背後で若い声がした。背後の二人も亀崎道場の門弟だろう。悠市は鳥籠の包みを目の高さにさし上げ、

「献上のお品の道中でござる。控えよ」

と、声を放つ。阿部はあわてて頭を下げ、腰を折って道をあけた。悠市はその前をなにごともなかったように通り過ぎた。

大手門前の奏者番加納正右衛門の屋敷の前は、献上の鳥籠の到来にそなえて雪が掃かれて黒く地面があらわれていた。門番が腰を深く折って鳥籠に礼をした。

加納は式台に正座して鳥籠を出迎える。悠市から鳥籠を受けとり、捧げ持って奥に消えた。悠市は加納の次男の安右衛門に導かれて、座敷に上がった。

座敷の真中に銅の火鉢が置かれ、炭火がおこっていた。襖を閉め切った座敷に紙の焦げた臭いがこもっている。加納が座敷に入り、火鉢の前に坐って、

「鬼も火に当たれ」

と、手招きした。悠市は巨体を縮めるように膝行して、火鉢の前に坐った。火鉢の中には紙の灰が積み重なり、暖められた空気に揺られている。加納は手元の手文庫の蓋をとり、紙の束をつかみ出した。

「これを燃している」

加納は一枚の紙片を火にかざした。黒岩藩の米札だった。米札は加納の指の間で小さな炎を上げ、灰となって火鉢の中に落ちた。

「御分家が御家人に給付した米札だ。すでに冬になる前に、かなりの数が甘木湊に出ている。額面の三分の一が相場だそうだ。これを手離した御家人がどのように食いつないで冬を越すのか、胸が痛む」

米札の灰を火箸で火鉢の隅に寄せながら加納がつぶやく。悠市は黒岩藩が困窮の余りに実米の代りに米札を給し、御家人がそれを実米に代えるのを待つことができずに、甘木湊の質屋に入れている事実をすでに耳にしている。甘木湊に行って来た八幡社の宮司、沼山岩根を通して、米札の実物も手に入れている。しかし、そのことは黙っていた。加納には内緒で、長源寺の離れ家の日向杢兵衛にそれを見せている。そのことが露見したら、どのような叱責を受けるかはかりがたい。

加納は手文庫に残った米札をつかみ、悠市の膝の横に置いた。

「十日の猶予をやる。甘木湊に行って参れ」

「みどもが長源寺を離れれば、隠居殿の警護が手薄になります」

養子の柿太郎に、少年の肩には荷いきれぬ重荷をしょいこませることを、悠市は危惧した。

「足軽目付によくいいつけておく。あのようなことがあったあとだ。しばらくは静かだろう」

日向杢兵衛を暗殺するために領内に潜伏した刺客を悠市が討ち果たしてから、数日しかたっていない。

「承知いたしました」

悠市は火鉢から離れ、畳に両手をついた。
「甘木湊では本島才兵衛に会え。いま書状を書く」
加納は悠市に背中を向けた。あらかじめ用意してあった硯に墨をすり、巻紙に文字をしたためる。宛名を書かぬ封書にして手渡し、
「天利兄弟の朋輩たちが、いきり立っておるようだ」
と、いった。
「ただいまも橋のたもとで三人の若侍に詰め寄られました。亀崎道場の門弟たちです。足軽風情に足蹴にされたことが、よほど腹に据えかねると見えます」
「狼藉の酬いだ。おのれらの未熟を棚に上げて、鬼を逆恨みするとはもっての外だ。あいう連中にかまうな。相手にするな」
加納はくどいほど相手にするなとくり返した。

本島才兵衛は甘木湊では知らぬ者のない相場師である。茶の湯と俳諧をよくする趣味人で、北溟の俳号を持ち、相場の読みの早さから、目早の北溟という異名があった。
悠市は竹林の家にもどり、柿太郎に留守をいいつけて、その足で甘木湊に向かった。松ヶ岡城下から甘木湊までは四里の道のりがあるが、甘木川の川船を使えば半日とかからない。悠市が甘木湊についたのは、海に夕陽が沈もうとするころだった。

悠市は気が重かった。かつて目早の北溟には加納に引き合せられたことがある。しかし相場師というものは天道の下を大手を振って歩く人間とは思えない。北溟と力を合せて働くことは、加納の指示とはいえ、気がすすまなかった。
河口の船着場に面した町が船場町で、問屋と蔵が建ち並んでいる。船場町の外れに横町があり、遊女屋が軒をつらねている。北溟の家は、船場町に隣接した今町にあった。まわりは風にそなえた石を積んだ板ぶきの家で、道に向かって庇が長く突き出しているが、北溟の家は、上方の商家にならい平入の瓦ぶきの大きな構えだった。そう悠市は覚えていた。ところが、家の前で案内を乞うと、出て来たのは前掛をつけた年配の手代で、見たことのない顔である。
黒漆を塗った竹の丸笠をかぶった悠市を見て手代は気味悪く思ったか、格子戸の奥にかくれようとする。
「こちらは、本島才兵衛さんの家ではないのか」
と、声をかけた。手代は逃げ腰になって手を横に振った。
「ちがう。北溟さんは片町河岸に引越した。そっちを訪ねてくれ」
「いつ引越したのだ」
家を移ったとは加納も知らなかったらしい。
「知らん」

手代は格子戸を音を立ててしめた。悠市は片町河岸の道を尋ねながら裏町を探し歩いた。河口に向かって滑り落ちそうな砂地の坂にみすぼらしい長屋が密集している。ようやく探し当てたのは、腰高障子の紙が破れて風に揺れる長屋の一画だった。土地の者にそこに北溟が住んでいると教えられたが、半信半疑で、

「ごめん。こちらに本島才兵衛さんがお住まいときいたが……」

と、悠市は声をかけた。

「はい、ただいま」

と、声がして腰高障子があき、出て来たのは、夜目にもくっきりと顔だちのととのった若い女である。

「ここが本島さんのお宅か」

と、あらためて訊ねた。女はおびえた様子で、身を固くした。悠市は笠をとった。家の中からさす明かりで悠市の顔を見た女が、あとじさりして家の中にかくれた。

「どなただい」

と、北溟が顔をのぞかせた。厚い丹前を着ている。

「や、鬼様、これはお珍しい。どうぞお入りください」

少しも落魄の翳りを感じさせない声だった。悠市は土間に入り、家の中を見た。赤い漆を塗った箪笥と衣桁と茶箱くらいが家具と呼べる物で、六畳ほどの広さの板の間に敷

いた花茣蓙はすりきれている。

「驚かれたでしょう。目早の北溟でも相場を読みちがえることがあります。きれいさっぱり身上を失い、このざまです」

北溟はそれが愉快なことのように笑った。

「田鶴や。一升ばかり酒を借りておいで」

と、やさしげな声でいう。田鶴と呼ばれた女は、通い徳利を被衣の袖でかくすように持ち、下駄を履いて外に出て行った。このあたりは松ヶ岡にくらべると、雪が少ない。田鶴を目で追ってから、

「あれは花見小路の遊女だったのを身請けして妾にしたんですよ。きれいさっぱり裸になったわたしに、あれだけがついて来てくれました。いまではわたしのほうが養われているような按配で……」

と、北溟は目を細くした。田鶴が出て行ったのは好都合だった。悠市は上がりかまちに腰かけ、懐から加納の書状を出した。

「拝見」

と、つぶやいて、北溟は書状を額の高さまで上げて一礼する。行灯に近寄り、書状に目を通した。もとのように封に入れてから、

「よくわかりました」

と、悠市を見ていった。

田鶴が通い徳利をかかえてもどって来た。髪に白く雪が載っていた。

「雪が降って来たようです。今夜はここを宿にしてください。わたしもひさしぶりに酒が呑める」

と、北溟がすすめる。しかし……と、悠市が口ごもる。

「田鶴の親が近所に住んでいます。今夜はそちらで寝かせます」

北溟が田鶴に目くばせした。田鶴はようやく悠市への警戒を解き、

「ごゆっくり」

と、愛想笑いを浮かべて、外へ出て行った。

「冷えますな。まず一献」

北溟が茶碗を突き出す。貧しげな世帯に似合わぬ京焼の黒茶碗だった。以前の北溟は頬が豊かで赤ら顔だった。少し痩せて、脂気の抜けた顔色である。しばらく酒を抜いたせいかもしれない。北溟はみずからも茶碗を出し、手酌で呑みはじめた。

「きれいさっぱり裸になったと申しましたが、借金はまだあるのです。だが、借金も身上のうちと申しまして、わたしに金を貸した旦那衆は、目早が再起して一山当てなければ、損がとりもどせないと考えるのでしょう。つぎの大勝負をするときには、わたしは元手の心配がいらない。なにで勝負をするか、まだ人には申せませんが、ここの中に秘策がありますよ」

北溟は腹を叩いて笑った。

二

目覚めると家が揺れていた。巨大な手が屋根をつかみ揺するかのように、絶えず音がする。悠市は掻巻（かいまき）にくるまったまま身を起こした。紙が破れた障子の桟の間から雪が吹きこみ、土間に積もっていた。北溟が掻巻から顔だけ出して腹這いになり、ほの白い雪明かりのほうを見て、

「地吹雪だ。もう冬ですな」

と、つぶやいた。吹雪は急に強まり、家が揺れる。細い柱がいまにも折れそうにきしんだ。戸も外れそうに暴れる。雪は掻巻の上まで吹きこんだ。

「しばらく我慢をしましょう。そのうちにおさまる」

北溟は掻巻を頭にかぶせた。すぐに眠りにつき、軽いいびきを立てる。

地吹雪は海辺の町である甘木湊の冬には珍しくない。海から吹く強風が雪を舞い上げ、白い闇となる。町中が息をひそめて地吹雪がおさまるのを待つ。同じ領内でも、山懐の松ヶ岡城下で育った悠市には、地吹雪は馴染みのない現象だった。

外が明るくなるにつれて、地吹雪がおさまった。北溟は土間に下りて雪を外に掃き出し、かまどの火をおこした。ついこの間まで多くの使用人を雇い大店の主のような暮らしをしていたわりには、手馴れた動作だった。

「なにか手伝いましょうか。みどもはやもめ暮らしで、煮炊きには馴れております」

と、悠市が声をかける。

「お気遣いなく。いまに田鶴が参ります」

北溟は笑って答えた。

かまどにかけた鍋が湯気を立てはじめたころ、障子に赤い色が映った。被衣を頭からかぶって顔をかくした田鶴が入って来た。被衣の下にかくしていた曲げわっぱを北溟に見せ、

「こんな物しかありません。ここのところ海が荒れて漁ができないそうです」

と、すまなそうな小声を出す。

「仕方がない。見栄を張るまでもない貧乏世帯だ。我慢をしていただきましょう」

と、北溟がいった。曲げわっぱの中に詰まっていたのは、米の飯の代用のキラズ、芋の茎の煮つけと大根漬だった。貧乏な足軽の悠市にとって、我慢しなければ口にできないようなものではない。

田鶴は膳を出して二人分の茶碗にキラズを分けると、北溟にうながされて、ふたたび

赤い被衣をかぶって外に出て行った。

「加納様のおいいつけは、黒岩藩の米札のことを調べろとのことですね。実はそのことが噂になってはいるのですが、もうお耳に入っているとは、さすがです。及ばずながら、精一杯働かせていただきましょう」

と、箸を手にとる前に、あらたまった口調で、北溟がいった。

「米相場のことは、当方はまったく素人で見当もつきません」

「いや、米札は相場にはかかわりがありませんよ。べつの場所で動いているのでしょう」

「そういうことも、みどもにはわかりません」

「ふうん」

と、声をもらして、北溟は悠市の顔を見る。なにかを説明しようとしかけて思い直し、まず箸をおとりくださいとすすめた。朝餉を終えると、

「まず、実見をするに如くはありませんな。出かけましょうか。なに、たいしたお手間はとらせませんよ」

といい、腰を上げた。

北溟は雪よけの蓑をつけて菅笠をかぶり、藁の雪沓を履いた。雪沓を悠市にもすすめたが、こちらのほうが馴れていて歩きやすいと悠市はことわり、足駄を履いた。

長屋のある片町河岸から船場町へ行くには今町を通らなければならない。北溟はわざわざもとの自分の家の前で足をとめ、

「これが以前のわたしの家です」

と、指さした。

「知っておりますよ。この家だと覚えておったから、きのうはまずここを訪ねました」

悠市には、失った家を見せる北溟の気が知れない。

「普請をするときには大金を遣いましたが、手離すときは二足三文です。だが、そのうちすぐにとり返しますよ」

北溟はこともなげにいった。道行く人が北溟に気づき、気の毒そうに目をそらす。それを気にする風でもなかった。

悠市は北溟を見直さなければならない気がした。身上をふくらますことだけが生き甲斐の相場師ではない。金銭にかけては恬淡としていた。悪い印象を持ったのは、どうやら眼鏡違いらしい。

船場町に入ると道に張り出した商家の長い庇が雪よけになり、通行に難渋をしない。地吹雪は屋根の上を通り過ぎるようだった。油屋と看板の出た間口の狭い店の前で、北溟は足をとめ、

「この店は本業は油屋だが、脇で銭両替をしておりまして、店構えは質素でも、地下蔵には大金を積み上げています。ここの主に、わたしはいくら借金があるのやら、考えるとおそろしいほどですわい」

と、いった。借金があるというわりには、悪びれた様子もなく、

「ごめんよ」

と、声をかけて、戸をあけた。奥まで見通せる長い土間の通路があり、両側がいくつもの部屋に仕切られている。入口の広い土間には油樽が並んでいた。高い上がりかまちのある座敷に、帳場格子と大きな台秤があり、頑丈な錠前がついた銭箱が置かれ、前垂をつけた若い手代が坐っていた。

「旦那いるかい」

北溟は親指を立てて見せた。

「へい。呼びましょうか」

「そうしておくれ。松ヶ岡から来た珍しい客人だ」

北溟は自分のほうが金を貸しているような態度だった。

甘木湊では両替商を銭屋と呼んでいる。株を買って仲間にならなければ、店は出せない。一分、二分の金貨をその日の銭相場で銭に両替するのは利が薄い商売だが、その利益を高利の貸金にまわす余得があった。

油屋の主、与次郎は三十なかば、悠市とは同年輩の、小柄な愛想のよい男だった。北溟の借金のことはおくびにも出さない。北溟から悠市が鳥籠づくりの名人だときき、

「武芸の稽古人か相撲の親方だと思いましたが、鳥籠をつくりなさるとは、人は見かけによらないものですね」

と、妙な感心の仕方をした。

三人が座敷で話している間にも、荷を背負った商人が挨拶をして土間の通路を通り過ぎる。雪の日は店の中の土間が、表通りから裏通りに抜ける公道になっている。

「鬼様は米札のことを知りたいとおっしゃる。それならわたしより油屋さんのほうがくわしいから、話をききにきた」

と、北溟がいう。

「目早の北溟さんよりわたしのほうがくわしいとは御冗談でしょう」

と、与次郎は苦笑する。悠市は米札のことはなにも知らないから、一から教えてくれと頼みこんだ。

「甘木湊では米札とか米券とかいって、元和・慶長の昔から通用していたものですよ。よその土地では珍しいかもしれませんが。そのときの相場で売って金に代え、正米(しょうまい)はあとから受け渡しするというもので、ありていにいえば、大名相手の信用貸しの証文のようなものです」

甘木湊には北国の諸藩から年貢米が川船で運ばれて来る。その米はいったん藩や米問屋の米蔵に貯えられ、二百石、三百石積みの弁才船(べざいせん)で上方に輸送され堂島の米会所で取引される。年貢米ばかりでなく、農村の売り米も甘木湊に集まり、諸国から米商人が買付けにやって来る。

「米商人には問屋と仲買の二通りがありまして、問屋は大名の御蔵米を買います。仲買は正米ばかりでなく、空米(からまい)と申して、相場が頼りのいわば証文だけの米の売り買いもいたします。相場を歩座(ぼざ)といいますが、これは北溟さんの専門で……」

「当てこすりをいうものではない。わたしはそれで身上を潰した」

北溟は与次郎の膝を叩いて、悠市に顔を向けた。

「仲買は歩座の後見人だが、それを蔭で支配するのが問屋です。相場が立つのは歩座方といい、これは茶屋を貸し切ります。大坂堂島の月じめの相場の値に合せてこちらの相場も決まりますが、近ごろは空売り空買いが当たり前で、わたしなども手元に金がなくとも、千両、二千両と値を立てて、それが通用したのですから。油屋さんは米札は大名の信用貸しの証文だとうまいことをいいましたが、それが問屋かぎりで通用する分にはよいのです。仲買を通して表に出て、空米の帳尻合せに使われると、話がめんどうになります」

「歩座は御存じですか」

と、与次郎が悠市に問いかける。悠市はうなずいた。

「松ヶ岡の御城下にも、歩座方と称して茶屋に集まる武士、商人がいると話にはきいた。もっとも甘木湊とは異なり、なにごとにも質素倹約の武家の町だから、歩座に賭ける金もせいぜい五両か十両くらいのものらしい。北溟さんのような豪胆な真似はできぬ」

「わたしを引き合いに出すのはよしてもらいましょう」

と、北溟が笑い飛ばした。悠市は懐から、黒岩藩の米札を出して、二人に見せた。

「どうしてそれを……」

知っていると見えて、与次郎が目を瞠った。

「叶屋という質屋から出たものだ。相場の三分の一で質入れしたと耳にしたが」

悠市は米札を裏返して見せた。与次郎は顔をしかめた。

「それはいけません。三分の一は一月前の話で、いまでは五分の一、春になったら紙屑になると、仲買連中は話しています。そんなものが歩座方の空注文の帳尻合せに使われたら、大騒動になります」

「それではまだ歩座方には廻っていないのだな」

「そういう話はきいていません。そうなる前に、問屋がまとめて引きとってくれればよいのですが、なにしろ黒岩領ではこの春には餓死者が大勢出るともっぱらの噂です。食うに困った御家人が質入れするので、手がつけられません」

与次郎が厄介者を追い払う手真似をした。

「そんないわくつきの米札を、なぜ質草にとるのだろう。それに、わたしも噂を耳にしたが、実物を拝見したのははじめてですよ。一月で半値近くも値打が下がる質草をありがたがって蔵っておく質屋もないものだ。どうなっているのだろう」

「そういえば、あんまり世間には出ませんね、誰かが買い占めているのでしょうか」

「買い占めて得があるかい。紙屑になる代物だろうに」

と、北溟がいう。与次郎は考えこんだ。

「それはそうです」

と、つぶやいて首をかしげる。悠市は北溟の正面へ膝の向きを変えた。

「みどもが耳にしたところでは、御分家は草高二万石のうち今年は実収はその半分だそうです。御家人に給る禄は草高の半高として一万石。半知半給の申し合せで返上したのが五千石。その半高を米札にしたそうですから、配られた米札はおよそ二千五百石分に上る勘定になります。もし仮に、その半分でも堂島に持ちこまれたら、どうなります。御分家が立ち行かなくなるのみならず、本家の当家にとっても恥辱。看過できることではありません」

「千石の米札ですか。それはおおごとだ」

北溟はなかば与次郎にきかせるようにつぶやいた。

三

狭い長屋に何日も世話になるわけにはいかない。悠市は北溟の世話で、今町の商人宿に宿をとった。冬は海が荒れて、上方からの入船は少ない。今町あたりの商人宿は、どこも閑散としていた。

「船頭や廻船問屋の手代が暇を持て余して、小博奕の宿に使うかもしれません。少々やかましいのは我慢してください」

と、二階までついて来た北溟がいう。悠市は懐紙に三両包んで、北溟の膝の下に滑りこませた。

「失礼だが、軍資金です。お遣いください」

「助かります」

北溟は素直に礼をいい、膝の下から金包みをとり出し、袂に入れた。

「堂島の年内終いの商いの知らせが、年末に甘木湊に届きます。その相場を当てこんで、いまから歩座方で帳合(ちょうあい)をいたします。これは米の空売買で、年末の米相場が上がれば売り方の損、下がれば買い方の損という仕組です。わたしは信用がありませんから、歩座方には出入停止ですが、この軍資金で人を雇うことができます」

たとえば口立てで百両分の米の売り方になるとする。あらかじめ差金(さしがね)と呼ぶ保証金を一割歩座方へ預けておかなければならない。小口の帳合ならば、一両の差金があれば参加できる。北溟はその差金を持たせて、身代りを歩座方に行かせると語った。

翌日、悠市は叶屋という質屋を訪れた。質流れの出物で、脇差を求めたいという口実で話をきいたが、知り得たのは、死んだ足軽目付の手先の吉次と、沼山岩根の話と似たようなことで、得るところは少なかった。

その晩、北溟が訪ねて来た。北溟は憤慨して、

「さきほど油屋を訪ねましたが、掌を返したように、しばらく顔を出してくれるなというのですよ。鬼様をおつれしたのが、気に入らないのです」

と、いった。

「みどもの顔が嫌われましたか」

「米札のことで、なにかおそれている様子です。あまり触れたくないようです」

「それは儲けた」

悠市は手を叩いた。北溟は驚いて、

「なにが儲かったのです」

と、きき返した。

「釣りで申せば、竿を下ろしたとたんに当たりがあったようなものではありませんか。

油屋は誰かに米札のことを話して、よけいなことに首を突っこむと身のためにならぬなどと、忠告されたのでしょう。あるいは脅されたかもしれません」

「それはおおいにありそうなことで……」

北溟は納得してうなずいた。自分たちが訪ねたあとに、油屋が誰に会ったのかをまわりの者からきき出すのは難しいことではないと北溟はいった。

「昼間、みどもは叶屋に行ってみた」

「それは鬼様らしくもありません」

北溟は渋い顔になり、首を横に振った。

「まずいことをしましたか」

「鬼様は目立ちすぎます。まさか米札のことは口に出しますまいね。宿にどっしりと坐っていてくだされればよいのです。耳目の代りはおりますから」

北溟は両手でおさえつける仕草をした。

二日も北溟の顔を見ないと、悠市は不安を覚えた。ほんとうに叶屋や歩座方を調べているのだろうか。悠市はまだ北溟を信頼し切ったわけではない。

おだやかな天気だった。陽光が雪の町を輝かしていた。悠市は笠をかぶり、片町河岸の長屋に出かけた。長屋の井戸のまわりの雪を掃いて、女たちが盥を出して洗濯をしている。腰高障子を叩くと、田鶴が顔を出す。片手を形のよい眉の上に当てて、まぶしげに悠市を見上げた。

「北溟さんは……」

「朝早く出かけました。おかげ様で、張り切っています」

「そうですか。それでは宿に寄るかもしれんな。行き違いになってはまずい。帰るとしよう」

悠市は会釈をして、田鶴に背中を向ける。田鶴は見送るために、戸口から出て来た。洗濯をしている長屋の女が、

「日和山から白帆が見えた」

と、歌い出す。べつの女が、

「お田鶴さん、日和山から白帆が見えたとよ、化粧をしなくていいのかえ」

と、声をかけた。田鶴は顔を赧くした。それは恥じらいというよりも、怒りのためだった。田鶴は口を結び、家にもどった。女たちが、声をそろえて笑った。

日和山は船乗りが風と天候を見る小山である。甘木湊に船が近づくと、日和山から帆の船印が見える。贔屓の客が寄港することを知って今町の遊女たちが化粧をはじめると語られていた。女たちはそれを当てこすったのである。

後味の悪い思いで、片町河岸から離れて、悠市が今町の掘割にさしかかると、大勢の

人がたかり、掘割をのぞきこんでいた。悠市は人垣をかきわけて、掘割をのぞいた。男が沈んでいた。下帯ひとつの裸である。うつ伏せになり、元結が切れて髪が海草のように揺れている。町役人が立っていたが、死体を引き揚げようとしない。

「鬼様」

小声で呼びかけ、袖を引いたのは、北溟だった。悠市は人垣から離れた。

「宿に行ったらお出かけだときました。いったいどこへお出かけで……」

北溟はいくらか不満そうな口ぶりだった。

「北溟さんを探しに、片町河岸に行ったのですよ」

「ここは人目があります。さきに宿に帰っていてください」

北溟は悠市から離れ、町役人のほうへ歩んだ。

悠市は一人で宿にもどった。北溟は小半刻もたってから、宿にやって来た。

「堀に沈んだ男は、土左衛門ではありません。あの姿で、頭から地べたに倒れこんで舌をかんだらしい。町役人がそういっていました。自害ですよ」

と、北溟が話した。

「みどもは、似たような自害を思い出しました。御分家の江戸屋敷で、素裸で井戸に身投げして死んだ武士がいます」

若君御傳の武士がそうして自害したと、悠市は組頭の竹熊与一郎からきいている。

「それですよ。仏は黒岩の武士だそうです。叶屋で質草のことで口論になり、下帯ひとつになって表に飛び出したそうです」

その武士が狂を発したと、悠市には思えなかった。江戸屋敷の自害と同じように、なにかの抗議の意思を示していると思えた。

「叶屋は町役所に呼ばれています。なにを揉めたのか、そのうちわかるでしょう」

「自害した武士の名がわかりますか」

「それもきいておきます」

といって、北溟はひとまず宿を出た。

その日は北溟は二度と顔を出さず、翌日おそくなってから、宿の階段を足音を忍ばせるように二階に上がって来た。

「おそくなりました」

と、詫びて、

「叶屋は一晩で町役所から帰されましたよ」

と、いった。

「調べはすんだのですか」

「武士の自害だからというので、御徒目付が出張って来て、乱心者だと片づけられました。死んだのは黒岩の御徒で、村山源八という人です」

悠市は傍らの小箱から矢立と紙をとり出し、姓名を控えた。
「御徒目付はなにもなかったことになさるつもりのようですが、質草のことで揉めていたというのは、村山という人が米札を請け出そうとして、叶屋が質草はもう流れたと答えたのが口論のはじまりだそうです。一部始終をそばで見ていた者がいます」
「米札を請け出そうとしたのですか」
「よくそんな金があったものだと、不思議に思いますな。質草が流れたから、下帯ひとつになって舌をかみ切るというのも、凄まじい話で」
「よほど口惜しかったのでしょうか」
悠市は考えこんだ。

四

おだやかな天気は長くはつづかず、八日目にはふたたび地吹雪が吹き荒れた。宿の戸はしめきってあるが、どこからか吹きこんで、天井から細かい雪が落ちて来る。
北溟は叶屋と歩座方の調べをつづけているが、こんなに荒れる日はさすがに出足が鈍るだろうと、悠市は考えていた。
北溟は昼過ぎに息を切らせて宿に駈けつけた。身体中に雪がこびりつき、洟汁が凍っている。松ヶ岡で変事があったらしく、使いが家に来ていると、悠市を急かせた。
悠市は丸笠が吹き飛ばぬように手でおさえ、吹雪に向かい肩で突き当たるように前にかたむいて歩いた。雪はつぶてとなって容赦なく顔を打つ。足駄の先だけを見つめ、一歩ずつ踏みしめた。
片町河岸の長屋にたどり着いたとき、北溟の家から若い男が飛び出した。風にあおられてよろめきながら、男が駈け寄る。その顔に悠市は見覚えがあった。足軽目付の組頭、竹熊与一郎が使っている手先である。悠市は胸騒ぎを覚えた。
「鬼の旦那、すぐに長源寺にもどってください」
手先は悠市にしがみついた。
「どうした。なにがあった」
悠市は手先の肩を両手でつかみ、揺すった。
「御隠居がさらわれた。坊は頭をやられた」
坊というのは、柿太郎のことである。やられたというのは、殺されたということか。
少年とはいえ柿太郎が、手向かいもせずに曲者が李兵衛をつれて行くのを座視していたとは考えられない。
「隠居殿は手疵を負わされたのか」
訊ねたのは、李兵衛のことだった。

「さっぱりわからねえんで。頭がともかくすぐに鬼の旦那をつれもどせとおっしゃったんですよ」

「柿太郎は……」

と、ようやく訊ねた。

「坊は庫裡に運ばれました。わたしはなにしろ、見ていねえんで」

手先はすまなそうな顔をした。悠市は背後を振り返った。北溟が心配そうにたたずんでいる。

「北溟さん、おききの通りだ。急な用ができて、松ヶ岡にもどらなければならなくなった。加納様にいいつけられた御用は、まだ先が見えぬが……」

「なに、心配することはありませんよ。あらかた見当はついているんです。あとは動かぬ証拠を手に入れりゃいいのです」

北溟が答えた。悠市は片手を上げて拝む仕草をして、

「すまない。すっかり北溟さんにおぶさってしまって」

と、いった。手先をうながして、駈け出そうとする悠市の前に立ちふさがり、

「待ちなされ」

北溟が片手を上げた。

「この風では船は出せません。歩いて行っては途中で行き暮れてしまいます。雪橇を借りましょう」

北溟は踵を返した。船場町に荷駄の継立場がある。藁沓を履かされた馬が四、五頭棒につながれて吹雪に耐えていた。

「ごめんよ。本島北溟だ。急いで松ヶ岡まで行きたい客がいる。橇を出してくれ」

と、怒鳴る。丹前を着た博労の親方が、戸口から出て来た。

「この地吹雪だ。馬が参ってしまうよ」

と、顔をしかめる。

「酒代ははずむ」

北溟がいうと、鼻で嗤った。

「おまえ様の空約束はききあきたよ」

「無礼なことを申すな。御家の御用だ。つべこべ申すと、馬をとり上げるぞ」

と、悠市が怒鳴る。博労の親方は御用ときいて顔色を変えた。頭を下げて、

「旦那が橇をお使いになるとは知らなかったもので。ちょいと待ってくださいな。いま博労が出払っているんです」

と、弁解する。悠市は親方の丹前の袖に、小粒銀を二つ三つ落とし入れた。

「博労がおらんなら、おまえが来い」

「いいえ、おります。たしかにいるはずです」

親方は丹前の裾をひるがえして、中に入る。まもなく蓑笠をつけた若い博労が出て来て、

「へい、おれが行きます」

と、いった。

博労は納屋から雪橇を曳き出して来た。長さ六尺ほどの箱が乗っている。

「乗るのは一人にしてください」

と、博労がいった。手先はあとに残し、悠市が箱に入る。北溟は箱の縁に手をかけ、

「お約束の日数はあと二日です。その日までには必ず加納様に、よい知らせをお届けします」

と、悠市に約束した。

博労がほうれと声をかけ、手綱を引く。雪橇が馬に曳かれて滑り出す。問屋と蔵がつらなる船場町を抜け、甘木川に沿った街道に出ると、さえぎる物がなく地吹雪の勢いが増した。綿の塊に似た雪が、下から吹き上がる。ときおり頭上に陽がさして前途を見通すことができるが、それも一瞬の光明で、すぐになにも見えなくなる。

馬の首につけられた鈴が鳴る。博労は雪の上に残された橇の跡を頼りに、馬を追う。箱の中にうずくまった悠市の笠や肩に、雪の塊が当たった。

「急げ、急げ」

悠市は博労を急かせた。馬はさほど速く駈けることはできない。膝のあたりまで雪に埋もれる。表面の新しい雪は風に飛ばされ、固い根雪がのぞく。下り坂にさしかかると、博労は馬の首にしがみつき、手綱を引いておさえた。馬は疲れを見せず、着実にすすんだ。

甘木湊から松ヶ岡に通じる甘木街道の城下町への入口は、御町出口（おまちでぐち）と呼ばれる。番小屋があり、小商いの店が街道筋に並んでいる。博労は番小屋のはるか手前で馬をとめた。そこには地吹雪は吹かない。

「旦那、橇はここまでです。あとは歩いてくださいな」

と、博労はいった。馬は鼻息を荒くしていた。首筋から腹にかけて、汗が流れる。

「世話になった」

悠市は若い博労に小粒銀を握らせた。あとを振り向かず、足駄で雪を蹴散らして駈け出した。

寺町の番小屋に駈けこんだのは、夕闇が迫る時分だった。番小屋は萱の雪がこいがしてある。その外に立ち、大きく肩を上下させて息を荒くしながら、

「頭、鬼悠市がもどりました」

と、怒鳴る。雪がこいには仮の戸がついている。その戸をあけて竹熊が顔を出した。

「遅いではないか」

と、叱る。悠市がもどるのをじりじりしながら待っていたのである。

「隠居殿の行方は」

「わからぬ。まず庫裡へ行け」

竹熊は両手で悠市の胸を突いた。

「はっ」

会釈をして、長源寺に急いだ。庫裡の玄関は暗く、燭台の明かりがついている。悠市の声をきき、役僧の秀因が出て来て、

「上がりなされ」

と、手招きした。悠市は急く気持をおさえて、柿太郎が寝かされている座敷に行った。燭台の明かりに照らされて、頭を白い布で包んだ柿太郎の顔が蒼白く見えた。

「いまは眠っているようです。幸い命にさしさわる怪我ではなかった」

と、秀因が座敷をのぞきこみ、小声でいう。

「そうですか」

悠市は思わず膝の力が抜け、座敷の入側(いりがわ)に坐りこんだ。秀因は悠市の目を見て安心させるようにうなずき、去って行った。

悠市は柿太郎の枕元に坐った。柿太郎が目を開き、悠市に気づいて身を起こそうとする。あっと小さく叫んで、顔をしかめた。

「動かんでよい」

悠市は蒲団をおさえた。

「頭に峰打ちを受けました。どこでどうなったか、どうしても思い出せません」

と、柿太郎がいった。

「頭の骨を砕かれずによかった。安心した」

悠市がいった。曲者は少年の柿太郎にいくらか手加減をしたのかもしれない。

「不覚をとりました。お許しください」

と、柿太郎が消え入りそうな声でいう。目尻から涙が流れた。

「おまえが悪いのではない。誰もおまえを責めはしない」

と、悠市はいいきかせた。足軽目付はなにをしていたのか、責められるべきは彼らである。

「わたくしがもう少ししっかりしていれば、御隠居様はつれ去られずにすんだものを……」

柿太郎がつぶやき、嗚咽(おえつ)をこらえた。

「なにも申すな。委細は朝になったら訊ねる」

といい、悠市は柿太郎の枕元から離れた。庫裡を出て、寺町の番小屋にとって返す。竹熊を呼ぶと、手先が出て来て、

「お目付の旦那様は、組屋敷にお引き揚げになりました」
と、いった。
「一人もおらんのか、なぜ帰ったのだ」
「御本尊がいなくなったのですから、もうよかろうとのことで……」
「なにをいうか」
悠市は怒りをおさえることができず、大きな声を出す。顔が朱に染まり、赤鬼の面になった。手先はおびえて、雪がこいの中にかくれた。

鉄砲町の組屋敷は夜明かりの中でひっそりと眠りについているようだった。悠市は竹熊の家の雪がこいの外から、頭と呼びかけた。竹熊は丹前をまとって表に出て来た。
「どうした。夜ふけになにか用か」
咎める口調でいい、胸をそらせる。
「蟻ももらさぬ手配りをなさっていたはずなのに、なぜあのようなことになりましたか」
悠市は怒りを内に秘めたしずかな口調でいう。竹熊は隣近所を気にして見廻し、
「入れ」
と、うながした。家に向かって、

「客だ」
と、声をかける。竹熊の妻がこどもを起こし、蒲団を上げる気配がある。行灯に火が入った。竹熊の家族は妻とこども三人、老母を加えて六人である。三和土と二間の狭い家で暮らしている。
急いで片づけられた居間に、悠市は竹熊のあとについて上がった。しめ立てられた襖の蔭で、幼子がむずかる。泣かせるなと、襖に顔を向けていってから、
「鬼が怒るのももっともだ。だが、足軽目付の不手際だと思われては困る。これは仕組まれたのだ」
と、竹熊がいった。悠市は黙ったまま、目でつぎの言葉をうながす。竹熊は悠市に顔を寄せ、いっそう声を低くした。
「昨日、急に徒目付から呼び出しの差し紙が廻って来たのだ。急なことで非番の同僚に声をかける暇もなく、寺町の備えはやむなく手先に任せて、目付殿の役宅へ参った。さんざん待たされた挙句に、昨秋以来御分家に不穏の動きがあり、警戒を要する云々という、ことあらためてきかされるまでもない話だ。それから引き留められて茶菓がふるまわれ、役宅を出たのが日暮れ前だった。そのときはすでに、日向殿はつれ去られていたのだ」
「手先はなにをしていたのですか」

「人手が足りぬよ」
竹熊は口癖になった言葉を口にした。
「人手が足りぬではすみますまい」
「うん、うん」
と、声を出し、竹熊は何度もうなずいた。
「仕組まれたと申されましたが、徒目付が仕組んだということですか」
「いや」
竹熊は掌を上にして手を持ち上げ、もっと上位の意思だという意を示した。
「どなたが仕組んだことか、おおかた見当がついている。ただちに乱暴な御処置には及ぶまいとは思うが、なにが起こるかははかりがたい。ともかくいまは、どこに日向殿が押しこめられているかをつきとめるのが大事だ」
「みどもがおそれるのは、毒でも盛られぬかということです」
「日向殿を亡き者にするのが目的ではあるまい。そんなことをしたら、お家の屋台骨が揺らぐわい。御分家と心中するわけにもいかぬだろう。まずは日向殿の居場所をつきとめることだ。足軽目付にも意地がある。虚仮にされたままでは引き下がらぬ」
竹熊は見得を切った。
悠市は夜ふけに前ぶれもなく訪れた非礼を詫びて組屋敷を辞去した。甘木湊から松ヶ

岡へ急いでもどった疲労が足駄の重さに感じられる。雲間から月があらわれ、町は昼のように明るかった。
寺町通りにさしかかったところで、悠市は何者かにあとをつけられている気がして、足をとめた。振り返るが、人影はない。雪明かりで見通しはよく、かくれる物蔭もなかった。
悠市は思い直して歩き出す。そう見せかけて踵を返した。鉤の手になった通りを半町ばかりもどったところで立ちどまる。道の中央の雪の上に自分が残した二の字の足駄の跡が残っている。道のはしに雪沓の跡があり、急に向きを変えて引き返していた。
あとをつけられたと悠市が感じとったのは、気のせいではなかった。

五

加納正右衛門は苦い顔をして火鉢に手をかざし、表裏を焙る。十日と期限を切ったが、その前に悠市がもどったのが気に入らないのである。
「柿太郎に大事がなかったのはよかった。わしがあとのことは心配するなと請けあったのだから、柿太郎にもしものことがあれば、鬼に首を引きちぎられても文句がいえないところだった。充分に養生できるようめんどうを見る」

と、抑揚のない口調でいう。

「あわててもどりまして、申しわけありません」

加納の不興を察して、悠市はまず謝罪した。甘木湊で知り得たことを報告し、米札が何者かに買い漁られているようだといった。

「質屋と口論して自害した武士の詮議に徒目付が出張り、乱心者として不問に付しております。城下にもどると、組頭が申されるには、徒目付に呼び出され、寺町通りの固めが手薄となった隙に、隠居殿がつれ去られたそうです。甘木湊と松ヶ岡では徒目付はべつの組ではありますが、なにか裏があるのではないかと気になります」

加納は焙った手の先を見ながら、悠市の話をきいた。

「甘木湊の徒目付は、御城代奥谷三郎右衛門殿の指示なくして勝手なことはできぬ。隠居殿をつれ出すように命じたのは誰か、見当はついておるのだ。米札の一件もその糸につながっているのだろうが、いかんせん証拠がない。鬼を頼りにしておったのだ」

言葉のはしに恨みがましさがにじみ出る。

「期限まであと二日あります。本島北溟さんが、必ず吉報を届けると約束しました」

「北溟一人に任せてよいのか」

「約束は守る人です」

と、悠市は答えたが、確信が持てるとはいえない。

「加納様は誰が隠居殿をつれ出すように命じたか見当がついていると申されましたが、そのお方が隠居殿のお命を縮めるおそれはありませぬか」

「命をとるつもりなら、つれ去りはしない。屈服させて意のままに操ろうというのだ。それよりも、気がかりな話を耳にした。隠居殿がどこに幽閉されたかまだつきとめることができぬが、どうやら隠居殿は食をとらぬらしい」

「絶食なさいましたか」

悠市は悲痛な声を発した。杢兵衛は毒殺を警戒しているのか、絶食によって抗議の意思をあらわしたのか、真意ははかりがたい。杢兵衛を救い出すまで身体が保つかどうか気がかりだった。

「鬼を甘木湊へつかわす折に期限を切ったのには理由がある。わしが傀儡師と疑う人物と、明後日会うことになっているのだ」

加納の顔に苦渋の翳がさした。

翌日の昼過ぎ、悠市は表から名を呼ばれた。北溟が大きな声を放って、竹林の家に入って来た。

「どうです。十日の期限に間に合いましたよ。約束は違えません」

と、得意満面の笑みを浮かべた。居間の囲炉裏の前に坐り、胸前の結び目を解いて、背中に斜めに負っていた文箱を、悠市の前に置いた。文箱は紙を十文字に貼り、封印が

してあって悠市は中を確かめることはできない。

「この中に家中のどなたかが米札を買い漁った証拠の品があるのですね」

悠市は文箱を指さした。北溟はうなずき、

「困窮する人々がいれば、そこにつけこんで利得を得る人がいる。世の中はそうしたものです。どなた様かは甘木湊で飛脚を雇って、米札を江戸に運ばせました。どうやら、御分家の江戸屋敷に持ちこんで、買いもどさせているらしい。御家人は踏みつけにされたようなものです。忠義の証に、半知半高を返上した上に、米札を相場の三分の一で手放さなければならない。それを江戸に持って行って、相場の半値で下屋敷に買いもどさせれば、御分家は給米を四分の一に減らし、誰かが手間賃代りにかすりをとるという仕掛けです。ひどいことを考えたものです」

と、ため息をついた。

「米札を江戸に運んだ飛脚はつきとめたのでしょうな」

「それはわかっております。生き証人がいます。いざとなればわたしが訴人になって、松ヶ岡のお白洲に出てもよい。小悪党を見ると、わたしは胸が悪くなるのですよ」

悠市は文箱に手を延ばし、

「さっそく加納様にお届けしよう」

と、勇み立った。その手を、北溟がおさえた。

「その前に、鬼様に一言お礼を申し上げなければなりません」

「礼を申すのは、こちらのほうです」

「実のところ、鬼様の持って来てくださった仕事のおかげで、生き返ったのですよ。強がりをいってはおりましたが、この年で身上を潰して、さすがに参りました。親子ほども年の離れた妾に養われていたのですからね。なにをしたらよいのか、なにをすればうまくいくのか、闇夜に道に迷ったようなものでしたよ。鬼様のおかげで、迷いが消えました」

「それはよかった」

悠市は片町河岸の長屋の女が、お田鶴さん、日和山から白帆が見えたとよ、化粧をしなくていいのかえ、と冷やかしていたのを思い出した。田鶴は北溟を養うために、他人にいえないこともしなければならなかったのだろう。

「腹の中に秘策があると大見得を切りましたが、お教えしましょう。船玉口銭（ふなだまこうせん）ということを考えました。船玉は海の守りです。大船を普請するとき株仲間から出資金の何分かを積み立ててもらいます。その船が時化（しけ）で難破したときには、船の出資金をもどしてやる、そういう仕組です」

「それで利益が出ますか」

「無尽講に似た仕組だと考えてください。講中が大きくなれば、利得も大きくなりま

す」

北溟はその秘策なるものに自信がありそうだった。

「鬼様からお借りした軍資金、船玉口銭に使わせてください。大きくふくらませてお返ししますよ」

と、いい切った。

杢兵衛の消息が知れず、不安な数日が過ぎた。

柿太郎は快方に向かい床を上げて畳に坐っていた。

「もう起きられるのか」

と、悠市が声をかけると、はいと大きな声で返事をした。布で頭を包んだ顔は、寝床に横たわっていたときよりも腫れ上がって痛々しく見える。

「御隠居様はまだ見つかりませんか」

柿太郎は表情を曇らせて問う。責任を感じているのである。

「手がかりはつかんだ。まもなくお救いできる。心配せず養生いたせ」

と、気休めをいい、悠市は庫裡を出た。竹林を透かして、家をのぞく竹熊の姿が見えた。悠市が声をかけると、竹熊は足駄で雪を踏みながら足早に歩み寄った。

「探したぞ。一緒に参れ」

竹熊は悠市の返事を待たず、歩き出す。寺町通りに出たところで、悠市が追いつくのを待った。

「日向殿の居場所を突きとめたぞ」

と、胸を張る。

「見つかりましたか」

悠市の声が弾んだ。

「日のあるうちに日向殿を駕籠に押しこめてつれ去ったのだ。足軽目付の目玉は節穴ではないわい。それにしても、手先をみな駈り出して城下中を駈けずりまわった。足駄の歯もずいぶん摺り減らしたぞ」

竹熊が唇のはしを曲げて、自嘲めいた笑いを浮かべた。

内間川を西に遡り、弓町に入る。二十石、三十石どりの武士の萱ぶき屋根の家が並んでいる。内間川から水を引き飲み水としているので、おのおのの家は、小川に板を渡して入口にしている。

「ここだ」

竹熊は柱が朽ちかけた古い門構えのある屋敷の前で、足をとめずにささやいた。間口は狭いが奥行はある。萱ぶきの屋根が長く伸び、裏庭は木が茂って雑木林に見える。

「一刀流亀崎道場だ。例の天利兄弟がここで稽古をしている」

通り過ぎてから、竹熊はいった。
「まちがいはありませぬか」
「疑うのか」
「そうではありません。慎重を期しているのです」
「つきとめるのに苦労をしたと申したではないか。どうする。大目付に届けて踏みこもうか」
悠市は笠のはしを上げて道場の門を見やり、
「待ちましょう。ちょうどいまごろ、加納様が城中である方と話をなさっているところです。まもなく勝負がつくでしょう。どちらに転んでも、動くのはそれからです」
と、いった。悠市の行動は、加納の胸先で決まる。必ずしも李兵衛を救い出せと命じられるとは限らないのである。
どうやら李兵衛は本人の意図するか否かにかかわらず、本家の政治を左右する存在になってしまった。
弓町を通り過ぎ、内間川の対岸に迂回して鉄砲町の組屋敷にもどりかけて、竹熊が、
「鬼は甘木湊でなにかつかんだのだろう。米札のことで、城代御家老の奥谷様が怪しいと思うが、どうなんだ」
と、探りを入れた。竹熊は派閥の人脈から考えて、そう推しはかったのだろう。

「みどもは道半ばで呼びもどされました。御支城のことはわかりません。これは嘘いつわりではないのです」
と、悠市は答えた。しかしそれだけでは愛想がないと思い直して、
「甘木湊でも御分家の御家人が自害いたしました。江戸屋敷の若君の御傅と同様、下帯ひとつで水にはまりました。あたかもしめし合せたようです」
と、つけくわえた。

六

甘木街道の御町出口の町並は、雪に覆われている。夕暮れが近づくと風が強まり、商家の屋根の雪が飛ばされて煙がなびくように見えた。悠市は頭巾で顔を包んだ加納の従者となり、文箱を抱いて、街道に長く張り出した商家の庇の下を歩いて行った。商家の間に石の門柱が立ち、細い参道が長くつづいている。海安寺（かいあんじ）の瓦ぶきの高い屋根が、なだらかな坂道の先の杉林の中にそびえていた。
坂の上に仁王門があり、門前に二人の武士が立っていた。甘木湊の徒目付である。無言で加納に頭を下げるが、敵意はかくさない。
悠市と加納が仁王門をくぐると、徒目付たちはあとからついて来た。悠市たちは玄関

で寺僧に大刀を預けた。本堂の脇に控えの座敷がある。

「こちらでお待ちでございます」

と、寺僧が手で座敷を示し、閉じられた襖に、声をかけた。

「御奏者番がお出ましになりました」

「お入りください」

と、声が返る。甘木湊の城代、奥谷三郎右衛門である。寺僧が襖をあけた。加納は悠市から文箱を受けとり、

「ごめん」

と、一声かけて、座敷の敷居をまたぐ。襖がしめきられた。悠市は廊下に正座した。二人の徒目付が、悠市と向きあって坐った。なにかことあるときには、ただちに刀に手をかけそうな気迫を漂わせた。

座敷の二人は声をひそめて話しだした。奥谷の声が途切れ途切れにもれてくる。日向杢兵衛が家老在職中に、主君の非政を批判し、隠居を要求する嘆願書を幕閣にさし出したことを、奥谷は前代未聞の不忠義だと批難している。

「いかにも、御城代の仰せの通り」

と、加納の声がきこえた。加納は奥谷と争おうとはしない。二人の声がいっそう低くなり、悠市の耳には届かなくなった。

しばらくしてから、奥谷の怒声が廊下にもれた。

「貴公は拙者を脅す所存か」

徒目付の顔に緊張が走る。万一の場合には、加納と悠市を成敗してよいと、奥谷に指示されているようだと、悠市は悟った。

「お静かに。脅すなどとはとんでもないことでございます。御相談申し上げておるのです」

と、加納の落ち着いた声がきこえた。またしばらく沈黙があり、

「日向を殺害しようなどとは思っておらぬ。不忠を詫びて腹を切らなくては士道が立たぬ、家内がおさまらぬと、説得しておるのだ」

「日向殿は強情なお方です。切腹を承知なさらぬでしょう。食をお絶ちになったと、伝えききました。そのまま餓死でもされたら、とり返しのつかぬことになります。御城代が日向殿を殺害させたと、公儀にも伝わりましょう」

と、二人がいいあう声を、悠市はきいた。

「勝手にしろ」

と、奥谷がいった。足音がして、襖が乱暴に引きあけられる。廊下に正座する悠市を奥谷は睨み、

「帰る」

と、徒目付に声をかけると、二人を引きつれて廊下を歩んで行った。悠市が座敷をのぞきこむ。加納が文箱を前に置き、会心の笑みを浮かべていた。中をあらためたと見え、封印が破れていた。

「入れ」

と、加納は手招きした。悠市はそばに寄った。

「城代め、蒼くなったぞ。北溟が探し出した飛脚の送り状が役に立った。米札の買い漁りに城代がかかわったことは明白だからな。隠居殿には手を出さぬと約束させたよ」

喜びをおし隠せぬ口調で、加納がいう。

「隠居殿をつれもどしに参ります。お許しください」

「城代は隠居殿を返すと申されたよ」

「それが信用できませぬ。いつ帰って参られるか、確約がなされましたか。足軽目付の調べで、隠居殿をおしこめた駕籠が、弓町の亀崎道場に入ったことをつきとめてあります。あれは不忠者だとか武士の面汚しだと吹きこまれた若侍が、暴発してなにをするかわかりません。それに隠居殿は食を絶っておられる。一刻も早くお迎えに行かねばなりません」

「鬼に任せる。亀崎には手出しをせぬよう、大目付殿の書状を届けさせる」

「ありがとうございます」

と、悠市が手をついた。立とうとするのを、加納が待てとおしとどめ、

「亀崎道場には鬼を憎む者たちがいる。その者たちに挑まれたとして、刀を抜いてはならぬぞ」

と、きびしい顔つきになっていい渡した。

悠市はふたたび加納を守って、御町出口から大手門まで従った。内間川にかかる鉄砲町の橋にさしかかったところで、

「ここでよい」

と、加納が声をかけた。一礼して立ち去ろうとする悠市の背中へ、

「よいか。血を見てはならぬぞ」

と、もう一度いった。

足軽目付の提灯が雪上を照らす。使者の袴をつけた竹熊を先頭に、悠市と駕籠をかつぐ手先がつづいた。竹熊は懐中におさめた大目付の書きつけを上からおさえ、首を曲げて悠市を見上げた。

「徒目付の頭ごしにこういう真似をすると、出すぎた足軽だと憎まれるだろうな」

「徒目付殿に話を通すと、この前のようなことがくり返されるだけです。頭には大目付のお墨付きがある。なにも気に病むことはありません」

足軽目付の意地を見せると張り切ったにもかかわらず、いざとなると竹熊は気弱になった。

「鬼にお墨付き、か」

と、緊張をほぐすつもりで軽口を叩く。

夜ふけの弓町には人通りが絶えている。堀川に渡した板を踏み渡り、竹熊が門を叩いた。

「誰だ」

と、気負いこんだ声とともに、門扉が開いた。竹熊の背後に、提灯の明かりに照らされた悠市の顔を見て、門弟があっと声を上げる。その若い武士の顔に悠市は見覚えがあった。阿部六三郎と名乗った亀崎道場の稽古人と一緒に、悠市に挑んだ若者である。

「控えなさい」

竹熊が高飛車にいい、懐中から書きつけをとり出して頭上にかざした。

「大目付殿の御下命である。日向杢兵衛がこちにおられるであろう。お迎えに参った。ただちにお仕度なされ」

竹熊は門弟の胸に肩を突き当てて道をあけた。いざとなると度胸がすわり、堂々として見える。門前に駕籠を待たせ、悠市を指図して玄関に入る。

「お待ちください」

と、門弟がいい、足駄を放り出してあわてて中に入って行った。しばらく待たされてから、袴をつけた道場主の亀崎庄助があらわれ、衝立（ついたて）の前に平伏した。亀崎は年は五十になる。悠市のために膝頭を砕かれた天利八兵衛と同役の御徒頭だったが、早く隠居して嫡子に家を譲り、弓町に道場を開いている。

竹熊と悠市は奥の座敷に通され、床の間を背にして坐った。入側の襖の蔭に、何人かが息をひそめて伏せる気配を悠市は感じとった。竹熊が大目付の書きつけを披露する。竹熊がかざした書面を、亀崎は膝行して近づき確かめ、

「うけたまわりました」

と、応答した。

「襖の蔭の御門弟が目ざわりになります」

悠市がいった。亀崎は、これと声をかけ、

「御案内いたします」

と、腰を上げた。母屋から渡り廊下で別棟の剣道場に通じている。控えの間に新しい格子がつけられ、座敷牢となっていた。亀崎が手燭（てしょく）の明かりで座敷牢を照らす。柱に背をもたせかけて、杢兵衛が坐っていた。

「隠居殿、お迎えに参りましたぞ」

と、悠市が呼びかけた。杢兵衛は目を見開き、

「おお、鬼殿か」
と、弱々しい声をもらした。亀崎が錠を外した。悠市が格子の中に入る。杢兵衛は立ち上がろうとして両手をついた。厚い綿入の襟がひろがり、あばらがくっきりと浮いた薄い胸が見えた。腰を上げる。杢兵衛は一歩踏み出そうとしてよろめき、悠市がひろげた手の中に倒れこんだ。
「大丈夫ですか。肩をお貸しいたします」
「お恥しい姿をお見せいたした」
杢兵衛は悠市の肩に手を廻した。悠市はその腕をとり、座敷牢からつれ出す。
「鬼殿、柿太郎はどうなりましたか」
杢兵衛は片手は悠市に預け、片手で格子をつかんで身を支えながら訊ねた。
「御気遣い御無用、浅傷でござった。すでに床を上げております」
「それはよかった。わたくしのために柿太郎にもしものことがあったら、生きる空がないと、そればかりが気がかりでした」
と、杢兵衛がいう。亀崎の手燭に照らされた杢兵衛の両眼が、潤んで光った。亀崎は脇に寄って二人に道をあけ、
「日向様、重々御無礼をつかまつった。そなた様に、恨みはございませぬ。よんどころない義理のためでござる。お赦しください」

と、言葉をかけて、深く頭を下げた。
「さ、早いところ出よう」
竹熊に先導されて二人が渡り廊下にさしかかったとき、母屋から足音も高く数人の武士が走り出て立ちふさがった。先頭に立つのは阿部六三郎だった。
「鬼、逃がさぬぞ。今日こそ勝負をいたせ」
両手をひろげて怒鳴った。背後の武士たちは刀の柄に手をかけ、いまにも鯉口を切りそうな形相で悠市を睨む。
「阿部、控えろ」
亀崎がたしなめた。
「先生、この者は天利殿を足蹴にしたのですぞ。兄弟ともども骨を砕かれて、歩くこともままならなくなりました。無念を晴らさねばおさまりません」
阿部はあとに引かない。
「いたしかたありません。それほどおっしゃるのならば、お手向かいいたします」
杢兵衛を争いに巻きこんではならない。悠市は痩せ細った杢兵衛の身体を竹熊に預けた。杢兵衛が悠市に、柿太郎を打ったのはこの男ですとささやいた。
「鬼、相手にするな」
竹熊が首を横に振る。

「この場はみどもが相手をしなければおさまりませぬ。頭は早く隠居殿を駕籠に……」
悠市は竹熊の背を押した。武士たちは杢兵衛には手を出そうとせず、二人を通した。
「亀崎先生、他流試合をお許しになりますか」
と、悠市は訊ねた。
「先生、お許しを」
と、阿部がつかみかからんばかりにとりすがる。
「尋常の勝負だぞ。木刀を用いよ」
亀崎は勝負を許した。武士たちは悠市を四方から囲み、道場につれて行った。四方の柱に燭し皿をかけて道場を照らす。亀崎は正面の神棚に礼をし、手を拍った。悠市と武士たちがそれにならった。阿部は袴の股立をとり刀の下緒で襷がけした。
悠市と阿部はそれぞれ木刀を選び、中央に歩をすすめて向き合った。亀崎は神棚の下に坐り、手を上げて合図をした。
対峙すると、悠市よりも阿部が少し背丈が低いが、肩幅の広さは遜色がない。阿部は正眼に構えて木刀の先を悠市の胸に擬した。悠市は左肩を前にして半身となり、切先を下げた。
たがいに呼吸をはかり、距離を詰める。
「えい」

道場の空気を揺るがす気合とともに、阿部は悠市の面を打つと見せて、胴を払う。激しい音とともに、悠市の木刀が受けとめる。つぎの瞬間、悠市は阿部の木刀の先を左手でつかみ、引き寄せた。
阿部は身体を泳がせ、同時に脛を蹴られて宙返りをし、背中を床に打ち当てた。仰むけに倒れた阿部の右肩を、悠市の木刀が突いた。阿部は木刀をとり落とした。
亀崎をはじめ門弟の武士たちは言葉を失った。悠市は亀崎に一礼して、
「真剣であればみどもの指は一本も残りませぬ。木刀には木刀の闘い方がござる」
と、いった。壁の刀架けに木刀をもどすときに、悠市は武士たちに背を向けた。もはや悠市に挑もうとする者はいなかった。

ゆかまい坂

一

黒い漆塗りの屋根に主家の水巻家の千切の定紋を金箔でおした駕籠が、長源寺の山門前に置かれていた。笠をかぶった駕籠かきに導かれ、白頭巾の尼が雪道に下駄の足をとられ、覚つかない足どりで、竹林の家にやって来た。

「ごめんくださいませ。五色沼から参りました」

その声をきき、居間を暖めるために、悠市は急いで囲炉裏に薪をくべた。煙が土間に流れた。

「どうぞお入りなされ」

悠市は上がりかまちに膝をそろえて坐り、客を招き入れる。客は妙月尼一人だった。妙月尼は駕籠かきから袱紗の包みを受けとり、土間に入って来た。悠市は囲炉裏の客座をすすめた。

「お方様からお届け物を預かって参りました。どうぞ日向様へお渡しください」

妙月尼は袱紗の結び目を解き、桐箱をとり出した。三日前に奏者番の加納正右衛門から、五色沼のお由良の方が日向李兵衛のために滋養になる物をさし上げたいと申し出て来たと、書状で知らされていた。桐箱に向かって悠市は平伏し、

「たしかにうけたまわりました。失礼ながら、役儀でございますから、中を改めます」

と、述べた。箱の蓋をあけたとたんに、甘い匂いがした。黒い壺に油紙で蓋をし、組紐で口を結んである。組紐を解いて壺の中をのぞくと、蜂蜜が入っていた。松ヶ岡ではめったに手に入れることができない貴重なものである。

「お預かりいたします」

悠市は壺を元通りにして桐箱におさめ、袱紗で包んだ。

「お方様が心配しておられます。日向様の御様子はいかがでございますか」

妙月尼が切れ長の目で悠市を見つめた。

「四、五日臥せておられましたが、昨日あたりからだいぶお元気の様子で、ただいまは庫裡でお休みですが、座敷で愚息を相手に竹の玩具などつくっておられるようです」

「それでは、もう起きておられるのですね」

妙月尼はいかにも安心したという顔つきになり、胸に手を置き、息を吐いた。

「芯がお強いのでしょう」

悠市は袱紗で包んだ箱を、座敷の床の間に置きに行った。妙月尼と二人きりで向き合

っていると息苦しくなる。囲炉裏の端で妙月尼が頭巾をとり、畳んで脇に置いた。すぐに立ち去る気はないらしい。

「なにもありませんが、茶でもさし上げましょう」

悠市は盆に急須と茶碗を載せて、囲炉裏の前に置いた。自在鉤にかけた鉄瓶の湯はまだ沸いてはいない。

「わたくしが仕度をいたします」

と、妙月尼が腰を浮かせる。

「いや、みどもがやります。馴れておりますから」

悠市が片手を上げて妙月尼をおしとどめる。そういうことをする男が珍しいと見えて、妙月尼は口元に浮かぶ微笑を袖でかくした。

「いつもお一人でなさりますか」

「ええ、煮炊きでも、洗いものでも、ときには針仕事でも、家のことはみな一人でやります。ちかごろは愚息の柿太郎が役に立つようになり、助かっております」

「台所のお世話をする人がいなくてはお困りでしょうに」

それを妻を娶れという意味にとった悠市は、

「妻帯をせぬのが家のしきたりです」

と、ぶっきらぼうな口調でいった。

「これは不調法なことを申し上げてしまいました」

妙月尼は目を伏せ、そろえた膝の上で数珠をまさぐった。ようやく鉄瓶の湯が沸き、悠市は茶を煎じて盆をさし出す。妙月尼は合掌して茶碗を受けとった。

ゆっくりと茶を喫み終えると、妙月尼は姿勢をあらためて、

「お方様から、鬼様にお伝えしなくてはならぬ大事なことを、いいつかって参りました。中老清宮左太夫様には、お気をつけ遊ばされませ。出家のわたくしごときが口にすることではございませんが、国表の中老、江戸の御留守居、甘木湊の御城代の御三方は、このたびのことで、御奏者番をお恨みなさっておられるそうです。鬼様もお気をつけなされませ」

と、いった。

「お由良の方様がそうおっしゃったのですか」

「はい」

妙月尼はやや表情を硬くして正面から悠市を見つめた。

悠市は妙月尼を帰してから、蜂蜜を離れ家に届けに行った。杢兵衛は火鉢の炭がおこった暖かい座敷で、柿太郎に硯の墨をすらせ、ひろげた紙に書を書いていた。悠市は五色沼から使いが来たことを告げ、届け物をさし出した。杢兵衛は桐箱の中をのぞき、

「これは危ない物が来た。柿太郎、毒見をしてくれ」

と、道化た調子でいった。柿太郎は危ないという言葉を真に受け、真剣な顔になり台所に箸と皿をとりに行った。壺の蜂蜜を箸ですくって皿に受け、箸に残った蜂蜜をなめる。柿太郎の顔がたちまちほころんだ。

「甘いか。しっかりしているようだが、柿太郎はまだこどもだの」

杢兵衛は痩せた顔を皺だらけにし、手を拍って喜んだ。

悠市はその日の昼下がり、ふたたび離れ家を訪れた。加納が微行で杢兵衛の見舞に来たのである。杢兵衛の寝起きする座敷と離れた小勝手と呼ばれる広い座敷に、悠市は呼ばれた。敷居に手をついて一礼してから、

「さきほど五色沼から使いの方がおいでになりました」

と、妙月尼が訪れたことを報告すると、加納は渋い顔つきになった。

「尼御前は耳が早い。日向殿がつれ去られたことは内密にしておったのに、どこからもれたものか。数日前、五色沼から使いが来て、滋養になる物を届けたいが許してくれとのことだから、御随意に、しかし目立たぬようにと答えておいたのだ。もう来たか」

「届け物は蜂蜜でございました。そのおり、使いの尼様がお由良の方様からの御伝言と申され、御城代と中老殿に気をつけるようにと申されました」

と、悠市が声をひそめて話す。加納の顔つきがますます渋くなった。

「尼御前がそのような心配をなさらずとも、こちらは充分に気をつけておるわい。やかましい門閥の争いの中を泳ぎ渡って来たのだ」

お由良が政争に口出ししたことに、不快の念を抱いたのである。悠市は黙って耳を傾ける。上士たちの党派の争いには関心がない。加納はしばらく黙り、目を閉じた。お由良の言葉がいくらか気になったらしい。

「先日は城代を少し責めすぎたか。いきなり証拠の品を突きつけて脅すことはなかったかもしれぬ。逃げ道を用意しておくべきだった」

と、ひとりごとのようにつぶやいた。目を閉じたまま顔を悠市に向け、

「さきほど日向殿を見舞ったが、だいぶ元気になられたようだ。思いのほか顔色もよろしかった」

と、話題を転じた。はあっと答えて、悠市は相槌を打つ。

「尼御前の見舞の蜂蜜がお気に召したようでございます」

「強情な人だ。餓死でもされたら一大事になるところだった。そろそろ離れ家から移したいのだが、正月には参詣客が詰めかけるから、境内におられるのはまずい。鬼の家に移そうと思う」

「みどものあばら家にお移しするのですか」

「気に病むことはない。大工を遣わして、普請をさせ、畳も入れさせる」

加納は有無をいわさぬ口調でいった。

正月の松の内は長源寺の境内に初詣での客が参集する。加納のいうように、離れ家を警護するのは難しかった。

三日後、李兵衛を迎える仕度がととのった。悠市は李兵衛を背負って離を出た。拍子抜けするほど李兵衛は軽い。悠市の背中で、しきりにすまぬと詫びた。

長源寺の庫裡から裏の竹林を抜けて悠市の家までは、目と鼻の先といってよい近さである。朝暗いうちから悠市は何度も往復して雪を踏み、道をつけてあった。それでも李兵衛は歩くことができなかった。

雪がこいをした戸口の前に柿太郎が待っていた。屋根から落とした雪が壁になり、首から上だけがのぞいている。悠市に背負われた李兵衛の姿がおかしく、笑いをこらえた。

加納が職人の手配をして、奥の仏間の隣に三畳の畳を入れ、襖と障子を貼り替えた。李兵衛の寝起きする場所は、亀崎道場の座敷牢より狭い。

「このような狭苦しいところにおつれして申しわけありません」

と、悠市は詫びた。明かりとりの天窓が雪がこいで覆われ、昼でも光がさしこまない部屋である。

「いいや、わたくしには新しい畳は贅沢ですよ。それに評判の鬼殿の手仕事を間近に拝見できるだけでも眼福です。はじめからこちらに置いてもらえばよかった」

李兵衛がいった。世辞ではなさそうだった。

二

竹の葉が雪の重さをこらえかねて振り落とす。その音がひとつに重なり、天から雪の塊が落ちて来るようにきこえた。悠市は囲炉裏に薪をくべる。火の粉が音を立ててはじけ散った。

いつもは暗くなると床につく李兵衛が、夜が更けるまで炉辺を離れなかった。薪の明かりを頼りに読んでいた漢籍を脇に置き、ふっと息をつく。なにか話すべきことがあると見えた。

「白湯（さゆ）をさし上げましょうか」

と、悠市が声をかけた。柿太郎はすでに寝入っている。李兵衛は低い声で、お願いいたすといい、頭を下げた。

自在鉤にかけた鉄瓶から、悠市が湯呑に白湯を注ぐ。湯気を吹き吹き白湯をすすって、李兵衛はようやく口を開いた。

「ことあらためて申すのも面映ゆいことながら、鬼殿には厄介をおかけするばかり。一度ならず二度までも命を救っていただいた。この上お願いごとをいたすのは心苦しいが、

わたくし一身のことではない。黒岩藩を救うと思って、お助けいただけぬものだろうか」

黒岩藩を救うという言葉に悠市は驚いた。

「御分家をお救いするなどと大きなことは、みどものような足軽の任ではございませぬ」

「いや、どう考えても、これは鬼殿でなくてはできぬこと。きいていただけますか」

煙が目に入り、杢兵衛は目を瞬く。悠市は否とも応とも答えず、当惑の表情を浮かべた。

「数年来、黒岩領は不作の上に、台所の不始末が重なり、お恥しい話ながら、御家人から民百姓にいたるまで、上下の別なく困窮の極みに至っておることは、よく御承知でしょう。これをなんとか立て直さねばと、誰しもが必死に考えておるのですが、人さまざまに考えがあります。極端な考えでは、所領を御本家にお還しして、御家人は帰農すべしと申す者もおります。それほど追い詰められているということです。若侍の中には、御家を苦しめる獅子身中の虫は誰それと名指しして、その者をとりのぞけばことはおさまると、あさはかにも思い詰める者が少なくありません。わたくしなども、一方の見方からすれば、毒虫の一匹ということになっております」

杢兵衛はかすかに笑い、反応をうかがうような目を向ける。悠市は目を伏せ、耳を傾

けている。

「当主が御本家から黒岩にお入りになったとき、供をして参られた御付家老の奥谷帯刀殿を、毒虫と蔭で呼んで憎む若侍たちもおります」

奥谷帯刀は甘木湊の城代奥谷三郎右衛門の実弟である。奥谷家は松ヶ岡藩では主君の連枝とされる名門の一族だった。杢兵衛が失脚して家老の職を解かれたのは、奥谷帯刀の指示である。

「毎年の恒例で、御付家老が当主の代理で御廟所に初詣をいたします。代参とは申しながら、御本家に参るわけですから、ことごとしい供ぞろえはせず、ほんの数人を供につれるだけです。代参の手薄な備えに着目して、道中それを襲い、奥谷殿を暗殺せんと企てている若侍たちがいる。それを鬼殿に事前にとめていただきたいのです」

悠市はそこまできくと、顔を上げて杢兵衛を直視した。

「隠居殿は外に出られることも許されぬのに、なぜ若侍たちの企てを御存じなのでしょう。御分家には、かげろう飛脚とやらいう隠密がおると小耳にはさんだことがあります。もしやそのかげろう飛脚から、密書でも届きましたか」

「それは申し上げられぬ。御推察ください」

杢兵衛の広い額に苦渋の翳がさした。

「みどもが御隠居のお願いをおことわりしたら、いかがなさいますか」

「それは困る」
「若侍たちの暴挙を座視なさいますか」
「いや、いま血を流してならぬ。そんなことをすれば、すべてが水泡に帰してしまいます。黒岩領の領民がことごとく破滅に逐いやられます。なんとしても暗殺はやめさせなければならないのです。座視はいたしませぬ。足軽目付の組頭殿か、役僧の秀因殿に訴え出て、若侍たちを捕えてもらうしか道はありませぬな」
「それでは、若侍たちは死罪となります」
「鬼殿がとめてくださらぬのなら、死罪もやむを得ませぬ。なんとしても暴発を避けねばならぬのです」
役僧の秀因に訴え出ようが、足軽目付の竹熊与一郎に訴えようが、いずれにせよ奏者番の加納正右衛門に報告されることになる。松ヶ岡藩の奏者番は幕府の若年寄と寺社奉行を兼ねたような役職である。杢兵衛の訴えをきき届けるか握りつぶすかは、加納の胸三寸で決まる。
「いまのお話、いっさいきかなかったことにいたします」
と、悠市はにべもなくいった。杢兵衛は落胆の色をかくさない。
「組頭やお寺様に訴え出られるのは、おやめになったほうがよろしい。かえってことを紛糾させるおそれがあります」

と、悠市がいう。杢兵衛は力なくうなずき、考えこんだ。表情が沈みこみ血の気が引いて、蒼白い顔がますます蒼くなった。

翌日は日暮れまで竹林の家を訪ねる者はなかった。悠市は鳥籠を編んで過ごし、杢兵衛の食事は長源寺のとり決めで、庫裡から賄いの寺男が岡持に入れて運んで来た。
暮れ六つの鐘が鳴っているさなかに、戸口で悠市を呼ぶ声がした。竹熊の声である。悠市は雪がこいの外に出た。外は雪明かりで明るかった。
「話がある。そこまで出られぬか」
竹熊は家の中を気にしながらささやいた。杢兵衛にはきかれたくない話のようである。
「立ち話ですみますか」
「番小屋まで来てくれ」
「それならば……」
悠市はいったん家に入り、しばらく出てくると柿太郎に留守居をいいつけた。片手で胸を叩いてみせる。危急のときには呼笛を吹くのを忘れるなという念押しだった。
番小屋に入ると、竹熊は手先に表に出ていろと命じて人払いをした。火鉢の前に坐り、そこに坐れと悠市に指示する。小簞笥の引出から、結び文をとり出し、無言で悠市に手渡した。結びを解いて書面を開く。御分家の代参で御廟所詣に来る奥谷帯刀を亡き者に

しようと企て待ち伏せる者どもがいる……と細かい字で書いてある。

「これは」

悠市は思わず声を上げた。

「さきほど、番小屋の雪がこいの中に放りこんであるのを手先が見つけた。手先はぼんやりしていて、いつから落ちていたかわからんと申すのだ。これは隠居殿の筆蹟ではないのか」

「さて」

悠市は燭台の明かりに書面を近づけ、小首を傾ける。杢兵衛の筆蹟には見えないが、草花を活けるが如く写す技倆があれば、どのような文字でも自在に書けそうである。いずれにせよ、杢兵衛以外にそのような細工をする者がいようとは思われない。

暗殺を事前に阻止してくれという申し出をことわれば、そのうち杢兵衛はかげろう飛脚と連絡をとると悠市は予想していた。たった一日で足軽目付に訴え出ようとは思いもよらなかった。杢兵衛は一日中誰にも会っていない。外から家に来たのは寺男だけ、家から外に出たのは岡持を返しに行った柿太郎だけだった。柿太郎を疑うことはできない。それでは長源寺の寺男がかげろう飛脚なのか。

「どうなさいますか」

悠市は元のように結び文にして竹熊に見せた。竹熊は自信なく視線をさまよわせた。

「徒目付殿に注進しますか」

悠市は重ねて問いかける。

「上つ方に注進してから、結び文がいたずらであったと判明したら、ただではすまぬからな。そうかと申して放っておくわけにもいかぬ。困ったものだ」

「例年大晦日を避けて、二十八日に御分家の御付家老がお国入りをいたします。もしも頭が刺客として、御付家老を待ち伏せるとしたら、道中どの場所をお選びなさいますか」

「拙者がやるとしたら……か」

竹熊は少し考えて、

「ゆかまい坂だろうな」

と、いった。漢字を当てれば床舞坂と書く。分家の黒岩と本家の松ヶ岡の領地は、高山ではないが深い山でへだてられ、街道は一本しかない。両藩の関所の木戸の間がおよそ一里へだたり、松ヶ岡側から見ればその間が急な登り坂で、頭上に山毛欅が枝を張り長い洞窟のようになっている。松ヶ岡の人々はひそかに、分家に送られる者がその坂道にさしかかると、行かまい行かまいと泣き叫ぶのだと話し伝えている。

「誰しも考えることはひとつです。みどももそう思います。そこで、頭に御相談があるのですが」

「なにか」
竹熊は不安そうな目を向けた。
「この投げ文はみどもが拾ったことにいたしましょう。その代りに、頭は誰がこの投げ文の主か調べ上げてください」
「鬼が拾ったことにするか。そうか」
竹熊がわざとらしく横を向いた隙に、悠市は結び文を袂にしまいこんだ。竹熊ははじめからそうなることを期待して悠市を呼び出したふしがある。
悠市が家にもどると、杢兵衛と柿太郎が囲炉裏をはさみ向き合って坐っていた。杢兵衛がなにかおもしろい話をきかせていたと見え、柿太郎の顔に笑みが残っていた。
「柿太郎、しばらく座を外せ」
と、悠市がいい、横座に坐った。柿太郎が立つのを待って、悠市は結び文を杢兵衛の膝の脇に置いた。
「このようないたずらをなさっては困ります。かえってことを紛糾させると申し上げたではありませぬか」
杢兵衛は黙って結び文をとり上げ、囲炉裏の火中に投じた。書面を見ないことで、みずからのしたことだと告白したのである。
「きかぬことにすると昨日は申しましたが、まもなく大黒さんのお歳夜の十二月九日。

それから松が明けるまでの一月は、できることなら泰平に過ごしたいものです。みどもが勝手に、騒動のおこらぬよう国境のゆかまい坂あたりまで見廻りに行って参ります」
と、悠市がいった。杢兵衛は膝に両手をそろえ、身体を二つに折って礼をした。
「お願い申し上げる。このようなことを人手に委ねるべきではないが、残念ながらいまのわたくしはまったく無力です。命さえ、鬼殿のおかげでやっとつながれている。当家の命運もまたかくのごとしです」
「身分を越えて差し出たことをすると、みどももお咎めを受けるおそれがあります。話をきかなかったと申したのは、このことにかかわって隠居殿に累が及ぶことを避ける意味があります。おふくみおきください」
「そこまで心遣いをいただきましたか。ありがたい」
杢兵衛は目尻に涙をにじませた。
「暴発を企てている若侍の首魁は、川南総司郎と申す者です。一刀流の技倆は家中では抜きん出ております。鬼殿の敵ではありますまいが、死に働きの覚悟で手向かいいたすときには、技倆以上の力が出るものです。よけいなことを申しましたが、御用心を」
と、杢兵衛は忠告した。

三

八幡社の宮司、沼山岩根は、顎に手をあてて思案してから、
「氏子を貸せと申しても、これから年の瀬にかけて、みな家のことで忙しい。無理はいえぬ。大黒舞の囃子（はやし）ならば、わたしがお手のものだ。三日四日ですむならばわたしが一緒に行こうか」
と、いった。
両国の関所の木戸の間一里ほどの内に、二つの小さな村がある。一は炭焼き、一は木地師が住んで、両国の間を行き来している。ゆかまい坂を通る御付家老を待ち伏せるには、どちらかの村に足場をつくっておくだろうと、悠市は考えた。悠市は大黒舞の踊り手になって村に入りこもうと思いつき、囃子方を借りようと岩根に頼んだのである。
「岩根が一緒に行ってくれるなら願ってもないことだ。頼む」
悠市は岩根に向かって柏手（かしわで）を打った。
「一つの村に一晩ずつ泊まって大黒舞を披露する。その間に当たりを付け、どちらか怪しげなほうで、みどもが仮病を発して寝こむから、岩根はみどもを置いてもどればよい。三日ですむことだ」

「わたしは囃子の小太鼓の稽古は絶やさないが、鬼は大黒舞など長いこと舞ったことがあるまい。大丈夫か」
「二十年ぶりになるが、忘れぬよ」
「それは楽しみだ」
岩根は口をあけて楽しげに笑った。
八幡社からもどってから、悠市は柿太郎を竹林につれ出した。これから父が話すことを肝に銘じよと前おきすると、柿太郎の表情がひきしまった。
「これから十日ほど留守にする。竹林の守りは組頭によくお願いしておくが、留守居は柿太郎だ。この前のような不覚は二度とくり返してはならぬ」
「はい」
「そのようなことはあるまいが、もしも隠居殿が竹林から脱出をはかられたら、柿太郎は差しちがえてもおとめしなければならぬ。わかったか」
「はい」
柿太郎は色が変るほど強く唇をかんでうなずいた。ふと気になって、悠市は、
「柿太郎、隠居殿にいわれて結び文をいずこかへ届けたことはないか」
と、問い質した。
「いいえ、そのようなことはいたしません」

柿太郎はなぜそのようなことを訊ねられるのかわからぬ不安そうな顔になった。

「それならよい。つまらぬことを訊ねたな」

もう隠居殿の元へもどれと、悠市は手真似で指示した。

柿太郎は精一杯に平常の心を保とうとして、竹林を歩いて行く。青くささが匂うようなその背中を見ているうちに、悠市は涙ぐみそうになった。

松ヶ岡と甘木湊の商家には十二月九日の大黒さんのお歳夜に、庶民が聖天さんと親しみをこめて呼ぶ歓喜天の象徴である二股大根を供え、黒豆飯にハタハタの田楽を食べる風習がある。豆で働けるように、金が稼げるようにとのまじないである。在郷の農村ではその風習は盛んではないが、大黒舞を見せて歩く門付芸人がいる。

門付芸人に身をやつした悠市と岩根が松ヶ岡を発ったのは、大黒さんのお歳夜の二日前だった。悠市が、赤く染めた袴と袴、頭巾、囃子方の岩根がかぶる烏帽子などの衣裳を入れた荷俵を背負う。その上に、干したハタハタや二股大根を入れた箱を重ねて乗せ、さらにその上に大黒天の小さな木像をくくりつけた。岩根は囃子の小太鼓と細撥、舞扇などの道具を入れた箱を背負った。刀は聖天さんを描いた掛軸とともに、細長い箱に入れてかくし、岩根が持った。

ゆかまい坂のあたりは城下の倍は雪が積もっているはずだった。二人は笠をかぶり、

藁の雪沓を履き、腰にかんじきを提げた。葛籠の上から蓑をかけると、大黒天の顔ばかりが外に出て、悠市が大黒天の赤ん坊を背負って歩いているように見える。

足軽目付が用意した出切手と呼ぶ通行手形を見せると、木戸の番人は荷を改めずに二人を通した。木戸はこの数日人が通っていないと番人がいった。木戸のまわりだけは雪を掘ってあるが、そのさきは膝が埋もれるほどの雪が積もっている。二人は雪沓にかんじきをくくりつけ、坂道を登った。

空は青く澄み切って雪山が輝く。目が痛み長く前を向いてはいられず、足元に目を落としてかんじきを踏みしめる。一足ごとに雪は深くなった。

二面村という木地師の村は、松ヶ岡の木戸から半里坂を登った谷間にある。雪庇が張り出した崖の上から眺めると、谷底の雪の下から囲炉裏の煙だけが淡く幾筋も立ち昇っているのが見えた。家はその下に埋もれて、崖からは屋根が見えない。谷間に下りる道を探すのも困難だった。悠市と岩根は顔を見合せた。どうすると、岩根が目で問いかけた。

「この先の炭焼きの村まで足を伸ばそうか」

悠市は岩根をうながした。村へ行く目的を岩根には話していない。それを訊ねようとする岩根でもなかった。しばらく坂を登り、谷底をかえりみて、

「あれを見ろよ」

と、岩根が声をかけた。人影が見えた。二面村の背後の山は雪が固いらしく、そこを通って街道に出ることができるらしい。目をこらすと人が通った跡が点々とつづいている。

二人は身体を横に向け、右足を先にしてかんじきの跡をつけながら坂を登った。前後を交代して、岩根が先に立ちしばらく登ると谷が浅くなり、二面村から通じる足跡がそこで街道に合流する。そこから上は橇の跡があり、雪沓の跡が入り乱れていた。炭焼きの村と木地師の村は冬の間でも交流があるらしい。

切り通しに通りかかると雪が少なくなった。頭上の山毛欅の葉は落ちているが見通しは悪く、前後をさえぎられれば逃げ場がない。もし悠市が刺客であれば、襲撃するには絶好の場所である。切り通しが一町つづき、眺望が開けた。右手の山に滝が見える。滝の上に家が固まっていた。雪を下ろしたばかりで、屋根の形が見分けられた。若侍たちは必ずこの村に宿をとると悠市は確信した。

山奥の木を伐り出し修羅に乗せて滑り落とす。そのために雪の道が開かれていた。二人はかんじきを脱ぎ、腰につけると、雪の道を登った。

前が開けて二面村から木戸のあたりまで眼下に見通せる。はるかに松ヶ岡城の三重櫓が眺められた。岩根は腰に手をあてて反らせ深く息を吸いこんだ。

「いい眺めだ。ゆかまい坂は何度も通ったが、こんな眺めがあるとは知らなんだ。ここはどうやら、大昔の楯跡にちがいない。ここで狼煙を焚けば、御城から見える」

と、岩根がいった。

合海村が炭焼きの村の名である。家は十七戸あり、山の神を祭る祠があった。祠の周辺の雪は掘ってとりのぞかれているが、家はすべて雪に埋もれ、屋根だけが雪の上に出ている。二人が来たことをどこかで見ていた者があると見えて、雪の下から湧き出すように、三人の男が出て来た。いずれも若くはない。一人は腰が曲がっていた。警戒の色を浮かべた鋭い眼光を浴びせる。

「おめでたい大黒舞でございます。御当地にはお初のお目見得でございます」

岩根が腰を折り、門付芸人になりきった口調でいった。

「大黒舞か」

腰の曲がった老人は二人を振り返る。いくらか警戒心が薄れたらしい。

「岩根、御披露しようか」

「そうしよう」

二人は声をかけ合い、背負っていた荷俵を雪の上に下ろした。悠市は赤い袴をつけ、赤い頭巾をかぶる。岩根は衣裳は替えずに烏帽子だけを頭に乗せ、小太鼓を腰につけて細撥を手に構えた。悠市が扇を開き、大黒天らしい笑い顔をこしらえた。

「さあ、さあ、さあ、舞いこんだな」

岩根が声を張り上げ、小太鼓を叩き、唄い出す。悠市が巨体を剽軽に動かし扇をひるがえして踊る。

「こら何がさて舞いこんだな。王聖天が先に立ち、福大黒が舞いこんだな。こら、四方の棚をながむればな、それぞれ、かざりのお餅は十二重ね、神の御膳も十二膳。こら、大と小、それぞれ。代々この家は末繁盛と、打ちこむところは、さあ何よりもめでたいとな」

踊る間に、雪の下から何人もの男女の顔がのぞいた。家の庇と雪がこいの間に隙間があり、戸口から穴を這い上がるように雪の上に出られるのである。突き出したいくつもの顔が、悠市の大黒舞につられて動き、口をあけて笑った。

一節が終わり、岩根が細撥をそろえて帯にさし、一礼する。腰の曲がった老人が笑みをたたえながら歩みより、合海、二面二村の名主の清右衛門と名乗った。

「これは岩根、あれは悠市と申します。大黒さんのお歳夜のお祝いごとでございます。どうぞ舞わしてくだされ」

と、岩根が口上を述べた。

四

家に入ってからしばらくの間は、雪に馴れた目にはなにも見えない。やがて目が馴れると、屋根の煙出しからさしこむわずかな光で、顔かたちが見えて来た。思いのほか広い家である。土間は十坪以上あり、居間の囲炉裏が畳一枚分あった。清右衛門は雪の上を歩く姿は腰の曲がった老人だったが、囲炉裏の横座に胡座をかいた姿は、背が伸びて威厳があった。

「二面村に先に行くつもりでしたが、雪が深くてどこから谷に下りたらよいものやらわかりません。そこでこちらに先に来ました」

と、岩根が話すと、清右衛門は笑った。

「町の衆は意気地がないものだの。これっぽっちの雪に驚いたか。これから年明けまで、ハアまだまだ降るぞ」

雪を自慢するようにいう。

「今日から明日まで、村を一廻りしてお祝いを申し上げたいと思いますが、名主様のお口添えをいただけませんか」

と、悠市が口を出した。

「大黒舞はめったにおらがの村には来ねえの。珍しいさけ、村の衆は喜ぶべ。だが鳥目が出せねえべ」

「米一合でも麦一升でも、心付けでけっこうです」

と、悠市がいうと、清右衛門は笑った。

「米なんてあるものかい。人にくれてやれるものは炭ばかりだ。炭の十俵も持って帰るかい」

「それは御勘弁を。途中で行き倒れてしまいます」

悠市は総髪の頭に手を乗せて、閉口した顔つきをした。

「逆におめえたち、なにか村に恵んでけんねかの」

清右衛門は悠市と岩根をからかう。それが楽しみのようだった。けっきょくなにがしかの銭を鳥目として清右衛門が出し、一宿一飯を供するかわりに、ほかの家は鳥目なしで廻ることに相談がまとまった。

二人が囲炉裏の火で暖まっているうちに、奥の座敷が賑やかになった。家の中には、十数人の老若男女が住んでいた。みなが座敷に集まり、大黒舞がはじまるのを待っている。

清右衛門が、これっと声をかけた。磨き上げられて黒光りする戸の蔭から若い娘があらわれ、木盃を二人に手渡し、瓶を両手に抱くようにして濁り酒を注いだ。

「お神酒(みき)だ」

と、清右衛門がいい、盃を上げるように手を上に煽り上げた。

娘は十八か九だろう。鄙(ひな)にはまれ……という言葉を悠市は思い浮かべた。色白で顔だちがととのい、武家の屋敷づとめをしていたのではないかと思わせる立居ふるまいである。

盃を上げて底を見せてから、娘がすすめる二杯目の濁り酒を悠市はことわり、岩根をうながして仕度にかかった。

床の間に歓喜天を描いた掛軸を掛け、大黒天の木像を安置する。三方(さんぽう)を借りて、二股大根を載せる。岩根は門付芸人が見物客を喜ばせる仕草をよく心得ていて、二股大根の股に指を当て、

「こんなことしてはいけません」

といって、大人たちを笑わせた。二人は別間で仕度をととのえた。細撥で小太鼓を打ち鳴らす岩根が先に立ち、座敷に舞いながら入った。その姿を見ただけで、もう笑い声が上がる。

「さあ、さあ、さあ、舞いこんだなあ」

と、岩根が口を切り、福大黒の舞を悠市が踊る。二節目は、毘沙門天である。

「さあ、さあ、さあ、馳(は)せこんだ、馳せこんだなあ。こら、なにがさて、また馳せこんだな。それ、それ、毘沙門天が帆を巻き上げて、宝船が馳せこんだな。こら乗ったるお方は誰々それそれ。御恵比須大黒御田(おた)の神、布袋(ほてい)福禄弁財天。こら積んだる宝はなになにそれそれ。延命小袋に打出の小槌、かくれ蓑にかくれ笠。こらこれもまためでたいと

な、それそれ。宝この家はますます繁盛と馳せこむところは、さてなによりもめでたいとな。それそれ」

めでたいもの尽しの大黒舞をひとしきり舞うと、悠市は汗みずくになった。囲炉裏の前にもどると、清右衛門が娘を呼んだ。

「これ、おかね、お神酒のお代りだ」

おかねと呼ばれた娘は、さっきより表情がほぐれて少女らしさが見えた。瓶の濁り酒をすすめるのを、

「まだ日が高うございますから」

と、岩根が辞退する。

「外に出ればハアすぐに醒めんべ。景気づけだよ」

と、清右衛門は強いた。

悠市と岩根が荷物を背負って清右衛門の家を出たときには夕闇が迫っていた。どの家も庇の高さに積もった雪を掘り、階段状の出入口をつくっている。家に入るときには、穴蔵に下りるようである。

その晩のうちに村の家をすべて廻るつもりだったが、どの家でも鳥目を出さない代りに酒と田舎料理でもてなし、二人は半分も廻らないうちに夜がふけた。案内役の清右衛門の息子と岩根は酔いがまわり、数歩すすんでは雪に足をとられて転ぶ。ふだん酒は呑

まず、呑んでも酔わないはずの悠市まで、舌のもつれを自覚した。

その晩は打ち切りと決めて、清右衛門の家にもどろうとしたが、月光に照らされた雪野原と黒々とした森が見えるばかりで、どこが家か悠市たちにはわからなくなった。よろめきながら岩根が前方が開けた方角に歩き出す。名主の跡とり息子の清吉が、

「危ねえ。そっちは滝だ」

と、声をかけ、岩根をとめようとして二人もつれ合って転んだ。

「滝か」

「滝だよ。落ちたら死ぬ」

二人で顔を見合せて笑う。腰が抜けたようですぐには立ち上がれなかった。

「清吉の家には、きれいな娘さんがいるな。ありゃ姉か、妹か」

と、岩根が問う。

「姉のわけがねえべや。おらは二十五だ。あれは妹だ。おめえ、おかねに目をつけたって駄目だ」

清吉が岩根を突き転がした。岩根は雪の上に肘をついて清吉を見上げる。

「なぜ駄目だ」

「おかねはな、黒岩に女中奉公に行って侍のお手がついたんだ。腹には赤子がいる」

「それは玉の輿じゃないか」

「なにが玉の輿だよ。黒岩の侍なんか、みんな食うや食わずだべ。おかねに手をつけた侍は、宿下りのおかねを追いかけて来やがった。女中の宿の居候になろうというんださけ、ハァ世の中さかさまだ」

「清吉さん」

と、声をかけて、悠市は清吉の腕をとり、助け起こした。

「おかねさんとその侍は一緒に暮らしているのかい」

と、訊ねる。

「そんなことさせるかよ。侍は滝の上に預かってもらっているよ」

清吉はその侍が好きではないと見えて、雪の上に唾を吐き捨てる。滝の上という屋号の家には、まだ大黒舞を見せに訪れていなかった。

翌朝から岩根はひどい下痢と吐き気に苦しんだ。悠市が仮病になるはずだったが、その必要がなくなった。昨晩一緒に深酒をして意気投合した清吉が、

「雪で腹を冷やしたんだべ。町の衆は雪にゃ弱ぇさけな」

と、同情してつききりで世話をする。悠市が岩根の額に手を触れると熱かった。清吉は桶に雪を詰めて来て、手拭いで雪を包み、岩根の頭を冷やした。

悠市は清右衛門に、

「二人で舞う大黒舞が片割れになっては、祝いごとになりません。昨晩舞い残した家には、相方の足腰が立つようになったら祝いに行きますから、それまで置いてやってください」

と、頼みこんで、逗留の許しを得た。岩根には気の毒だが、悠市には好都合だった。

岩根が眠りについている間に、悠市は清吉に案内を乞い、大黒舞を見せに行かれなくなった詫びをいいに、残りの家を廻ることにした。あの家には行ったがおれの家には来ないというのでは、残りの家はおさまるまいと、清吉は納得した。

滝の上と呼ばれる家は、高台の森の端にあった。山の神の祠を守る人だという。若い者たちは甘木湊に出稼ぎ奉公に出ていて、家には八十近い老夫婦と孫がいた。

悠市が清吉と並んで囲炉裏の前に坐り、事情を説明して詫びていると、色の浅黒い精悍な顔つきの若い武士があらわれ、品定めをするように見つめた。一言も言葉を発せず、悠市の話に耳を傾けていた。

滝の上の家から出て、悠市は清吉の肩を肘でつき、親指を立てて見せた。

「あれがおかねさんのこれかい」

「そうだ」

「なんという名前だ」

「増田なんとかといったな。おらはまだ話したことがねえんだ。あんまり偉そうでよ」

増田という姓は、日向杢兵衛から若侍の首魁としてきいた姓ではなかった。

一日身体を暖めて横になっていると、岩根は快方に向かった。清吉が座敷から出て行った隙に、

「ちょうどよい具合に病を発したものだ。こうなったら、二、三日ゆっくりしてくれ」

悠市は岩根に話しかけた。

「帰りたくとも身体が動かんよ。不覚をとった。腰が抜けたみたいだ」

岩根は苦笑した。二日目にようやく、玄米と麦を数粒落として煮こんだ重湯を口にするようになった。

その日の夕暮れどきに、天井から人の話し声が降って来た。広い土間に出てみると、滝の上の老人が、上がりかまちに腰かけて、清右衛門と話していた。

「お行様が来た。山の神にお参りするんだと」

と、老人がいう。

「だか。大勢か」

「五人だ」

二人の横を通り、戸口から雪の上に這い上がる。清吉が村人と話していた。その声が天井から降るようにきこえたのだった。坂の上の家の裏にある山の神の祠の近くに、頭巾をかぶった白装束の山伏が二人立っているのが小さく見える。

「滝の上では行者様を泊めるのか」

悠市は清吉に訊ねた。

「山の神の御師だけな。たまには行者様が来る。裏山から尾根づたいに金峯山まで行けるんだ」

と、清吉が答えた。

「金峯山で日の出を拝むんだべ。こんなお行様が来たのは何年ぶりだい。五人も来たら、滝の上は稼げるな」

村人が羨ましげな口調でいった。

「うん、稼ぐべな」

清吉は相槌を打つ。

山伏たちが御付家老を狙う刺客だとすると、集まるのが早すぎるような気がした。年末の二十八日にはまだ二十日近くある。悠市は確信が持てなかった。

「金峯山まで山の中を歩いて何日かかるかな」

悠市はひとりごとのようにして、つぶやいた。清吉が指を折り、

「お行様なら二日で歩くべな。山の上のほうは固雪だけ、歩くにゃ楽だ」

と、いった。村人が首を横に振った。

「なんぼ、おめえ、固雪だって、吹雪が一吹きすりゃ生きてらんねえべや。見りゃ若け

えお行様だ。金峯山にゃ行かんねえべ」

その言葉を耳にして、悠市にはまた彼らが刺客ではないかと迷いが生じた。あるいは、御付家老が黒岩を出発する日どりが予定より早まったのだろうか。そうなればそれで、意味があるにちがいない。

夜がふけてから雪が降り出した。朝が来てもやむ気配がない。悠市が外に出ようとすると、入口の穴が吹きこんだ雪でなかばふさがっていた。

清右衛門が囲炉裏の前に胡座をかき、土間から上がった悠市に顔を向け、

「驚いたか」

と、うれしそうに笑った。悠市は清右衛門の横に坐り、小銭を紙に包んでさし出した。

「なんだ、これは」

清兵衛は口を尖らせて悠市を見やる。

「相方が急な病になって、めんどうをかけます。もうしばらく、置いてやってください」

悠市は頭を下げた。清右衛門は囲炉裏の火箸をつかみ、その先で包みをはね飛ばした。

「この雪の中で、銭をもらってなんになるよ。そんなつもりで置いているんじゃねえ。おっ放り出して死なしちゃなんねえさけ置いているだ」

と、吐き捨てるようにいう。悠市は恥じ入って、一度さし出した包みを袂におさめた。

「おめえの気持だけはとっていただいとく。気にするなハア」

清右衛門がおだやかな表情にもどった。

悠市は囲炉裏から離れ、座敷をのぞいた。岩根が丹前を肩から羽織り起き出したところだった。便所は外にあり、雪の下の洞穴でつながっている。雪が融ければその洞穴も消えてなくなるのである。

「まだ腹が痛むか」

「いや、だいぶよくなった。だが、足元がふらふらする。急に年寄になったようだ」

といい、岩根は座敷から出て行った。

やがて岩根がふるえながらもどって来て、

「松ヶ岡まで橇でも雇えれば帰れそうだ。なんとかならんか」

と、いった。

「すまぬが、もう二、三日病人でいてくれ。いまさらみどもが仮病を発するわけにも行かんでな」

悠市は片手を上げて拝む真似をした。二、三日と日をかぎったもののそれですむかどうか確信があるわけではなかった。

五

土間でひとしきりあわただしく物を片づける音がした。清吉が座敷をのぞきこみ、
「悪いが少しの間ここから出ねえでくれの」
といい、顔をひっこめた。
客が来たらしい。なにごとか話す声が、かすかに土間からきこえた。
しばらくたってから、清吉がもどって来た。座敷に入ったとたんに、
「馬鹿野郎め」
と、つぶやいた。
「どうした。なにかあったのかい」
と、岩根が問いかけた。
「黒岩から木戸番が来て、明日の朝明るくなったらすぐ村人総出で木戸から雪を踏めといいやがるんだ。まったくおらがの村をハアなんだと思っているんだ」
清吉は腹の虫がおさまらない。
「黒岩の木戸から滝の下まではおらがの村、滝の下から松ヶ岡の木戸までは二面村と決まっているんだ。侍が通るたんびに、雪踏みをさせるさけ、こっちはたまったものでね

え」
と、息まいた。
清吉が鬱憤を晴らすまでしゃべって座敷を出てから、悠市は岩根に、
「身体の具合が悪くなければ、松ヶ岡に帰るか。みどもが木戸まで送る」
と、ささやいた。
「なにをいう。ついいましがた、二、三日我慢しろといったばかりで、今度は追い払うように帰れというのか」
「怒るな。事情がある」
悠市は岩根の怒りを静めようとした。
「事情はきくまい。しかし勝手なものだ」
岩根は悠市を睨んだ。
悠市は清右衛門が根を生やしたように坐っている囲炉裏端に行き、相方がどうにか歩けるようになったから、大黒舞はやめて松ヶ岡に帰ると告げた。
「そうかい。もう少し我慢すりゃ大黒舞ができるべや。祝いをされてねえ家は怒るべな」
と、清右衛門はひきとめたが、悠市の意志が固いと見て、あきらめた。悠市は聖天さんの身代りの二股大根とハタハタの干し魚を置いた。

「縁起物ですから、貰ってください」
といって、座敷にもどる。岩根を急がせて荷作りをした。清吉が座敷に来て、
「なんだ、急に帰るかの。今少しいりゃいいが」
と、別れを惜しんだ。
二人は荷俵を背負い、来たときよりも深くなった雪野原に出た。修羅が固めた坂を滑り下りて滝の下に出る。松ヶ岡までは下り坂で、悠市は岩根に肩を貸したが、さして苦になる道のりではない。
松ヶ岡の木戸まで下りて、悠市は荷を下ろした。
「ここまで来れば、八幡社の沼山岩根だと名乗りを上げていいのだ。木戸番に頼めば、氏子に迎えに来てもらえるだろう」
と、いう。
「なんだ、わたしを置いて、やはり合海村にもどるのか」
「大黒舞の道具は置いて行く」
岩根は悠市の顔をみつめた。
「死ぬなよ」
と、いった。悠市がなにをしようとしているか、とうに気づいていたのである。
「馬鹿をいうな」

悠市は笑った。歓喜天の掛軸の箱から刀をとり出し、腰におさめると、
「さあ、さあ、さあ、舞いこんだなあ」
と、声を張り上げ、舞扇の代りに片手を上げてひらひら動かしながら、ゆかまい坂に向かってもどった。

下りのかんじきの足跡が、登り坂を楽にした。合海村の雪野原を歩く悠市を見て、
「なんだ帰って来たのか」
と、清吉が声を上げ、駈け寄ろうとしたが、腰の刀に気づき、息を呑んで立ちすくんだ。
「侍だったのか」
と、つぶやく。
「武士の中には入らぬ足軽だ。欺してすまなかった。ひとつ訊きたいことがあるが、明日の朝ゆかまい坂を通るのは、黒岩の御付家老様だな」
「へい」
清吉ははじめて悠市たちを見たときの村人のように硬い表情になってうなずいた。
悠市は滝の上の家に向かった。屋根の上から、
「頼む。こちらに黒岩の川南総司郎殿はおられぬか」

と、怒鳴った。戸口から顔を出して見上げたのは、増田だった。
「大黒舞か。おまえなに奴(やつ)だ」
増田は雪の上に出て来た。悠市はいきなり増田の鳩尾(みぞおち)に当身をくらわせる。増田は前のめりになり、顔を雪に突っこんで昏倒した。
「どうした」
と、いいながら、山伏姿の男が顔を出した。
「川南総司郎殿はおられぬか」
悠市がもう一度訊ねる。
「拙者だ」
と、男がいった。左手に刀をつかんでいる。
「外へ出て来られるか。こちらから参りましょうか」
「外へ出よう」
川南がいい、雪の上に出て来た。
「ただちにここから立ち去りなされ」
と、悠市がいう。
「なにを申すか。無礼を申すと捨て置かぬ」
川南は刀の柄に手をかけ、悠市を威嚇しようとした。悠市は戦意のないことを示すため両手を広げた。

「日向杢兵衛様からいいつかって参ったのです。暴挙は御家を破滅させるだけでござる。明日は黙って御付家老様をお通しなされ」
「たばかるな」
川南がそういったとたんに腰を低くした。刀の鯉口を切った瞬間、悠市の巨体が鳥影のように宙を飛び、川南の手首をとって投げた。悠市が川南を組み敷き、喉首をつかんで動きを封じる。
山伏姿の武士たちが、つぎつぎに雪の上に這い出して来た。
「おれごと刺せ、おれも一緒に刺せ」
川南が苦しい声を振り絞る。悠市は川南を組み敷いたまま、顔を振り向けた。総髪を振り乱し朱に染まった顔は赤鬼さながらである。武士たちがひるんだ。
「刺せるか。そなたたちのその刃は、一藩を滅ぼすと知れ」
と、悠市が怒号した。武士たちの殺気が消えた。
悠市は川南の刀を奪いとり、喉首から手を放した。村人たちが騒ぎに気づき、遠巻きに眺めていた。人垣の中からおかねが駈け出し、倒れている増田にとりすがり、
「殿様、殿様」
と、泣きながら呼びかけた。

川南が上半身を起こした。

「奥谷を御本家に行かせれば、日向様のお命も危ない」

と、悲痛な口調でいう。

「そうかもしれぬ。しかしそれが日向様の思しめしだ。自分一身よりも御家が大事と思っておられる」

と、悠市がいいきかせた。川南は片腕を両眼に押し当てると、あたりかまわず号泣しはじめる。武士たちが膝から崩れ落ち、雪の上に両手をついた。泣いている武士たちの姿は、まだ少年といってもよいほど若い。悠市は川南の肩を叩いた。

「二面村にも待ち伏せの仲間がいるだろう。いまのうちに仲間たちに声をかけて、ひとまず立ち去るほうがよい。日向様には日向様のお考えがある。あなたがたが命を捨ててかかるのは、日向様が刀折れ矢尽きてからでもよいのではないか」

川南は悄然と立ち上がる。昏倒したままの増田を残して、五人の山伏姿の武士が一列になり、山を下りて行った。

彼らを見送ってから、悠市は滝の上の家に入った。老夫婦が土間の隅に寄り添い、おびえた目を向ける。

「もうすんだ。心配することはない」

と、悠市は声をかけた。

若侍たちが持ちこんだ武器が、莚にくるまれて土間に投げだされていた。槍、弓、鉄砲まで用意されていた。

六

御付家老の奥谷帯刀の一行から半日おくれて、悠市は松ヶ岡にもどった。戸口の雪はきをしていた柿太郎が、安堵の色を浮かべて一礼した。

「昨日、宮司様がお見えになりましたが、あまりやつれていらしたので驚きました。父上もああなのかと、心配しておりました」

と、柿太郎がいう。

「岩根は雪で腹を冷やしたのだ。父は岩根ほど弱くはない」

悠市は腹を叩いて見せた。家に入ると、杢兵衛が上がりかまちに膝をそろえて坐り、膝に手をついて礼をした。

「なんとか暴発をおさえることができました。若侍たちは引き揚げたようです」

「かたじけない。助かりました」

杢兵衛はため息まじりの声を放った。悠市は囲炉裏端に杢兵衛と向き合って坐った。合海村のできごとを物語り、

「川南という若侍が、御付家老を本家に行かせれば、日向様のお命が危ないと申しておりました。その言にも理があるのでしょう。御付家老が例年通り二十八日ではなく、半月ほども早く本家にもどったのは、なにか画策するためでしょうから」

と、悠市はいった。李兵衛は表情を動かさずにうなずいた。

「奥谷殿にお考えがあるのはたしかですよ。わたくしにはなにもできません。なにがあろうと、心を平にして待つだけです」

長源寺の離れ家につれて来られた日から、李兵衛の態度は変らない。落ち着き払っているというより、どうかすると無気力に見える。

半月がこともなく過ぎた。毎年暮れの二十八日には、搗餅屋が訪れて、餅を搗く。近郊の村から、同じ顔ぶれの農夫たちがやって来る。餅米は用意しておかなければならないから、悠市は桶の水に浸けて搗餅屋の到来を待った。長源寺の庫裡の裏から、朝早くから餅を搗く景気のよい音が立つ。柿太郎は待ちくたびれて、何度も寺町通りまで、様子を見に出た。

かまどの火をおこし餅米をふかすのは、搗餅屋の顔を見てからだった。搗餅屋に囲炉裏端でお神酒をふるまい、餅米がふけるのを待つのが常である。

何度目かに寺町通りまで様子を見に行った柿太郎の帰りがおそかった。数人が雪を踏む音が立った。

「おお、搗餅屋がようやく来たか」

悠市が柿太郎に声をかけるつもりでいった。

入って来たのは陣笠をかぶった武士である。その背後に十人ばかりの足軽が控えていた。武士は陣笠をとらず、徒目付の五十嵐与七と名乗った。

「みどもはこの家の主、鬼悠市でございます。なにか御用でしょうか」

「日向李兵衛殿をお迎えに参上した。日向殿には城内で正月を迎えていただく」

五十嵐は雪をこびりつかせた草鞋を脱がず、居間に上がろうとする。足軽たちが土間に入りこんだ。家の中で使えるように長さを半分にした槍を手にしている。

「お待ちください」

悠市は土間に坐ったまま両手を広げた。

「この竹林は御廟所の地内でございます。徒目付様といえども、ことわりなく入ることは許されませぬ。寺社のことは御奏者番の御裁許が要りますぞ」

「御奏者番の御裁許は得ている。そのようなことを足軽ごときにいわれるまでもない」

五十嵐は悠市を見下ろし、懐中から封書をとり出し、加納正右衛門の署名と花押を見せた。書状は李兵衛に宛てたものである。悠市は書面を改めたいと要求できる立場ではない。

「お迎え恐縮に存じます」

と、声をかけて、板戸の裏から杢兵衛があらわれ、五十嵐に一礼した。
「ただいま仕度をいたします。しばらくお待ちを」
と、杢兵衛がいうのを、五十嵐はさえぎって、
「すべて城内に仕度をととのえてお待ちしております。どうぞ、そのまま」
言葉はていねいだが、行動は強引である。
「さようですか」
杢兵衛は逆らおうとはしない。悠市の前を通り過ぎようとして、
「なにからなにまでお世話になりました。御恩は忘れませぬ。座敷に置いてあるのは、わずかばかりの書物と手すさびの図譜ですが、お焼き捨てになるなりなんなり、鬼殿のお気のままにお任せいたします」
と、あたかも今生（こんじょう）の別れの挨拶のようなことをいった。五十嵐は悠市に、
「そのほうには足軽目付からおって沙汰がある。それまで屋敷内から一歩も出てはならぬ」
と、宣告した。五十嵐が手で合図をした。足軽が二人、両側から杢兵衛を支えて外につれ出す。罪人を乗せるような粗末な駕籠に、杢兵衛は押しこめられた。悠市は雪がこいの蔭から、駕籠を見送った。
組頭の竹熊与一郎は、徒目付が去るのを待ちかまえていたかのように、土間に入って

来た。上がりかまちに横坐りして、
「まずいことになった」
と、つぶやき、横目遣いで悠市を見た。
「どういうことになりましたか。みどもにはさっぱりわかりません」
「拙者にもわからんよ。急転直下、こういうことの運びとなった。御奏者番は急病になられて、しばらく御登城は無理だそうだ」
竹熊は身体を悠市に寄せ、声をひそめた。
「数日前、甘木湊からお出ましの御城代と、御分家の御付家老を交えて、城中で御相談があったそうだ。ありていに申さば、御連枝の奥谷一族が御中老を味方にして、人のよい御家老をおさえつけたということになる。加納様一人では立ち向かうにも力に限りがあった。御病気というのは表向きで、登城差しとめというのが実情だよ」
「徒目付はみどもにはおって沙汰があると申されましたが、どうなりましょう」
「まだわからぬ。とりあえずは謹慎のつもりでおれ。まわりは手先が見張っているから、客は一人も入れぬ。誰にも会えぬぞ。気の毒だが、われらも大きな波には逆らえぬということだ」
「謹慎のつもりですか」
悠市はつぶやいた。城中で権力争いがあり、加納が失脚したとなると、奥谷一族に悠

市は生殺与奪の権を握られたことになる。悠市に怨みを抱く亀崎道場の門弟たちも勢いを得るだろう。

「搗餅屋は手先が足どめしておいた。餅はあとで届けてやるよ。それから、柿太郎のことだが、謹慎中の親父の下で窮屈な思いをさせるのもかわいそうだ。拙者の一存でしばらく八幡社の沼山岩根にめんどうを見てもらうことにした」

悠市にもしものことがあった場合に備えて手を打っておくという意味である。

「気の毒だが、足軽目付にはどうにもできぬ」

といって、竹熊は顔をそむけて腰を上げた。気の毒という言葉を短い間に二度使ったことが、悠市には気になった。

大晦日を一人で過ごすのは、柿太郎を養子にとってからはじめてのことだった。

雪がこいの間から竹林越しに長源寺境内の篝火が見える。夜がふけるにつれて除夜の鐘を待つ参詣客が境内に集まって来た。話し声、笑い声、仲間を呼ぶ若者の声が、竹林の家に届いた。

「鬼、おるか」

戸口に呼ぶ声がする。竹熊だった。

「お入りください」

「いや、入るわけにはいかぬ。戸口に近寄れ」

竹熊は声をひそめる。悠市は土間に下りて行った。内から戸をあけると、籠が突き出された。鏡餅が入っていた。

「餅だ。約束だから持って来た。人に見られるとまずい。早くとれ」

竹熊が急かせる。悠市は籠を受けとった。

「ありがとうございます」

「搗餅屋を足どめしたのは拙者だからな。餅がなければ新年は迎えられまい」

竹熊の影の彼方に、篝火が揺れているのが見えた。竹熊が外から戸を締めた。

「年が明けたら、月なかばに御役替えがある。どうやら御奏者番が交替するらしいという噂を小耳にはさんだ。鬼は加納殿とは切っても切れない間柄だから……」

といいかけて、竹熊はあとの言葉を呑みこんだ。しばらく沈黙してから、足駄が凍った雪を踏む音が遠ざかった。

竹熊は身の処し方を考えておけとでもいいたかったのだろう。それは悠市も考えていた。

悠市は竹熊に与えられた鏡餅を三方に載せ、注連をつけて神棚に飾った。年に一度だけ、朝まで燭台の油を燃やすことができる。灯心に火をつけると、暗さに馴れた目に鏡餅の白さがまばゆいばかりである。

鬼の道行（みちゆき）

李兵衛が去った座敷は、わずかな持ち物がそのまま置いてある。草花の図譜のことを、李兵衛がつれ去られるときに語っていたのを、悠市は思い出した。

五色沼から届けられた桐箱をあけ、図譜をとり出して、李兵衛が長源寺に来てから描きためた図の上に重ねようとした。五色沼からもどされた図譜は渋紙の表紙をつけて、二カ所が紙縒（こより）で綴じてある。悠市の視線は紙縒にひきつけられた。紙縒の色がわずかに違うことに気づいた。ほかにも綴じた図譜があるが、くらべて見ると、五色沼からもどされた図譜の紙縒のうち一本だけが違っていた。

悠市は綴じた紙縒を外し、縒りをもどして広げ、二枚の紙片を見くらべた。一枚はていねいに晒して白さが増した上等な紙だった。

「やっ」

思わず声を放ち、膝頭を叩く。やっと気がついた。図譜の紙縒が連絡に使われていたのである。かげろう飛脚は五色沼の妙月尼だった。

除夜の鐘が鳴り渡る。境内の人混みは増したらしい。耳に届く境内のさざめきが大きくなった。悠市は紙縒を手にとり、見つめる。いまさらかげろう飛脚が妙月尼だと判明したからといって、それがどうなのだ。悠市の口元に自嘲の笑みが浮かんだ。

一

一月十日に松焚きという神事が八幡社でおこなわれる。

松ヶ岡の庶民にとっては、松焚きまでが松の内である。昼間、八幡社の高張提灯を先頭におし立て、松子と呼ばれる若い衆たちや氏子の主だった人々が、笛太鼓をにぎやかに鳴らしながら練り歩く。行列は氏子の家に行き、

「やあっ」

と、口々に喚びながら、草鞋のまま家に駈け上がる。神棚の前に並んで火打石を切り、穢れを払って新年の火をともす。

日が暮れると、八幡社の裏の松の山で藁でこしらえたつつが虫を焼く。つつが虫は巨大な円筒の先がすぼまった形で、藁の芯に竹を入れ、竹の先に竹を編んだ四角の田型をつけたものを里方と呼び、菱型の飾りをつけたものを浜方と呼ぶ。松ヶ岡の町民は里方、浜方の二組に分かれ、どちらが早く藁のつつが虫を焼きつくすか競うのである。里方が

勝てばその年は豊作、浜方が勝てば豊漁とされる。

両方の松子と応援の男衆は、八幡社に駈けこむまでに、町の角々でぶつかっては、押し合いをくり返す。ときにはとっくみ合って怪我人を出すほど、町中が興奮し、湧き返る。

その日、竹林の家にやって来たのは、松子たちではなかった。組頭の竹熊与一郎が足軽目付一人と手先数人を従えて来て、戸口の前の雪がこいをとり払った。

「鬼、戸口まですすめ」

と、竹熊が呼ぶ。悠市がいわれた通りにすると、竹熊は書きつけを襟元からとり出し、

「足軽、鬼悠市、そのほう儀、身分柄をわきまえず、僭上の沙汰あり。よって、慎み申しつける」

と、読み上げ、書面を悠市に見せてから襟元に元のようにさしこんだ。悠市は土間に平伏した。竹熊は口調を改め、

「いまから戸を封印するが、封印を破れば死罪だ。わかっているな」

と、いった。手先が勢いよく戸を締める。戸口に板を打ちつける音がした。

「鬼、まだそこにおるのか」

と、竹熊が声をかける。

「ここにおります」

「亀崎道場の稽古人が、長源寺の山門のあたりで様子をうかがっていた。よからぬことをたくらんでいるようだ。それを耳に入れておく。気をつけろ」

竹能が声をひそめていう。やがて立ち去る気配がした。

僭上の沙汰が悠市のどのような行動を指すのか、慎みの期限はいつまでか、明らかにされなかった。明かりとりの窓から辛うじて雪をすくいとり、口に入れることはできる。しかし米や干し魚、干し野菜の貯えにもかぎりがあり、慎みが一月以上におよべば、悠市は餓死してしまうだろう。あるいはその前に、暗殺者が襲って来るのか。

明かりとりの窓からさしこんでいたかすかな光が消え、家の中が闇となった。悠市は火を慎んで囲炉裏の火を焚こうとしない。やがて遠くでときの声が上がった。松子たちがそれぞれの町内を出陣するのである。

悠市は床下の物音を耳にした。なにかが動いている。悠市は脇差をつかみ、床下の気配をうかがう。上がりかまちの下の引戸があいた。土間の闇にさらに濃い漆黒の影が滲み出したように見えた。

ほのかに白い線が浮かぶ。黒い影は目だけのぞく頭巾をかぶっていた。悠市は片膝をつき、影を見据えて、

「何者」

と、声をかけた。

「妙月でございます」

黒い影が答えた。

「あなたがかげろう飛脚か」

「お気づきでございましたか」

妙月尼は居間に上がった。

「お逃げなさいまし。御案内いたします」

「みどもは慎みの身です。ここから動くことができません」

「あの人たちは……」

と、妙月尼がいうのは、奥谷一族のことだった。

「慎みを仰せつけて鬼様を閉じこめ、亀崎道場の門弟たちを使って亡きものにしようという目論見です。すでに亀崎道場には門弟たちが集まっております」

と、言葉をつづけた。

「上意とあらば、いたしかたありません」

悠市はかつて上意の名の下に、何人もの武士を彼岸に送り出している。いま同じ運命がみずからに科せられようとするときに、自分だけがそこから逃避することはできない。そう思った。

「なにをおっしゃいますか。御上意などであるものですか。みずからの罪を免れ、藩政

をほしいままにするために、御上意を私しようとするものです。この十五日に、御城中で御役替の御沙汰がありますが、御奏者番は病免ということになりそうだという噂が広がっております。御病気免職と申しましても、どうやら加納様は日向様と御一緒に御城中に幽閉される御様子。お二方が裏で通じて御分家の内紛の因をつくったと責めを負わせて、お命を縮めるのが、あの人たちの考えです。これはたしかな筋から伝えられた話でございます。加納様は御当家にとって大切なお方ですが、日向様も御分家にとってかけがえのないお方です。いま日向様が殺されるようなことがあれば、御分家の御家人は申すまでもなく、郷村の民百姓が悲惨な目にあいます。あなた様だけが、みなをお救いになることができるのです」

妙月尼の光る眼が闇の中でにじり寄る。悠市の手をとり、合掌するように両側から包んだ。

「みどもになにができましょうか」

悠市の声には張りが失われている。十五日の役替ですべてが終る。その前に形勢逆転することなど、とうてい不可能に思えた。

妙月尼の手に力がこもる。

「わたくしと一緒に、黒岩に行ってください。日向様の同志がおいでになります。日向様のお考えの通りにことが運ぶようなら、救われます。事が瓦解すれば、もはや救いはありません」

悠市の手の甲に暖かいものが落ちた。妙月尼は涙を流している。嘘ではなさそうだった。日向杢兵衛に考えがあるという言葉に、悠市の心が動かされた。

「黒岩に行けば、必ず隠居殿の同志に会うことができるのですか」

「はい」

「この家を出れば、みどもは逆徒となります。隠居殿と御奏者番をお救いする道は、それしかないのですね」

と、悠市は念を押す。悠市の手を握る妙月尼はその手に力をこめた。

「鬼様のお力におすがりするしかないのです」

と、いった。

「ここを出ようか」

と、悠市はみずからにいいきかせるようにつぶやいた。

「ああ、おきき届けくださいますか」

「隠居殿を信じてみましょう」

「ありがとうございます」

妙月尼は立ち上がり、手さぐりで奥の座敷にすすんだ。火打石の音がかちかちと鳴り、火縄に火がともる。妙月尼は小さな火を手でかこい、杢兵衛が残して行った図譜の中か

ら数枚をとり出し、懐におさめた。紙縒で綴じた図譜とは別のものだった。

「それが風信ですか」

悠市の問いに、妙月尼はうなずき、

「日向様の最後の御指示でございます。黒岩の人々がその通りに動いてくれれば事は成り、そうでなければ事は破れます。すべてはこの一事にかかっております」

といい、火縄の小さな火を、指にはさんで揉み消した。

悠市は封印に手をかけることなく、床下から雪がこいを破って竹林に出た。雪明かりに妙月尼の姿がはっきりと見える。松ヶ岡の農婦がつける目だけを出した黒い頭巾をかぶり、菅笠をかぶった姿は尼僧には見えない。悠市は笠の下に頬かむりをしていた。

ときの声が近くなった。松子の一団が八幡社に近づいている。竹林の彼方の空が赤くなった。藁のつつが虫に火が放たれたのである。

「こちらへ」

悠市は妙月尼を手招きして竹林に歩み入る。足軽目付の手先が、見張っているにちがいない。雪が固く緊まった竹林を通り抜け、八幡社の裏の松の山に出た。高い火柱が上がり、人波が揺れている。押し合いがはじまり、大きな松明(たいまつ)をかついだ若者が駈けて行く。

見物の客たちはみな笠をかぶっている。男が女の着物を着、女が羽織袴をつけた異装の一団がそこかしこに見える。

「それ、それ」

「押せ、押せ」

と、見物の客の群れが夢中になって声をそろえる。二人は人波に紛れこんだ。人に突き当たり、揉まれながら、八幡社から遠ざかった。

「どこへ行かれます。これでは黒岩から遠くなります」

金峯山へ向かう街道を行こうとする悠市を怪しんで、妙月尼が足をとめる。松焚きの火柱が背後に見える。旧年の護符や松飾りをその火に投げこむために、両手でかかえて八幡社へ向かう人々がすれ違った。

「金峯山から尾根伝いに行けば、木戸を通らずにすみます。山越えは難儀ですが、辛抱してください」

と、悠市はいった。お待ちくださいといいつつ、妙月尼は足を速めて、悠市に追いついた。

妙月尼ははじめて竹林の家を訪れたとき、五色沼に来るまでは江戸の藩邸で暮らしていたと話したが、そのわりには雪沓の足どりがしっかりしている。

「金峯山を廻るには及びません。出切手を用意してあります。お方様の御用で黒岩に参

ることになっております」

妙月尼は胸元を叩き、そこに出切手があることを示した。

「それではお由良の方様に御迷惑がかかりましょう」

「そのときは、わたくしと鬼様が責めを負えばよろしいこと。封印のお宅を出たからには、同じ蓮の上に命を托さねばなりません」

頭巾の間からのぞく目が強い光を放つ。八幡の松焚きの火を移した大松明を先頭に押し立て、一団が駈けて来た。男も女も大松明の火の粉を浴びて、喚声を上げる。

悠市と妙月尼はその一団にまぎれこみ、歩調を合せて駈けた。寺町を駈け抜け、内間川に沿って下り、黒岩街道にかかる角で、一団から離れた。どうやら足軽目付の目を昏ませることができたようである。

「このさきの肴町に桝家という料理屋があります。今夜はお祭りで店は早仕舞ですが、わたくしたちを朝まで匿まってくださいます。桝家の娘さんが、わたくし同様五色沼のお方様のお世話をする照月でございます」

妙月尼は道の先を指さす。日の出まで桝家にかくれ、早いうちに木戸を通る手筈だという。

内間川と外濠で仕切られた武家の町はひっそりと静まり返っているが、内間川の外の町のにぎわいはますます盛んになった。火の粉を散らしながら駈け廻る大松明の数も増した。

悠市と妙月尼は寄り添って先を急いだ。

二

朝から吹雪になった。残された日数は四日である。妙月は尼僧の姿にもどり、悠市は従者の寺男の身なりで荷を背負い、脇差を帯して大刀は茣蓙でくるみ、木戸を通った。

妙月尼が用意した出切手は、五色沼の尼寺の裏書きがあり、それを見た木戸番はおそれいって荷物を改めようとはしなかった。

妙月尼が白い頭巾の上からかぶった黒い漆塗りの笠の上に雪がつく。木戸が見えなくなると、悠市は茣蓙をひろげて大刀をとり出し腰にさした。茣蓙をたたんで片端を突き出し、

「妙月殿、これに……」

と、つかまらせる。

ゆかまい坂にさしかかると、谷底から吹き上げる雪と天から舞い落ちる雪がぶつかり合って乱舞して、顔を上げていられなくなった。積雪は悠市の腿のあたりまである。悠市が雪を押し分けながらつけて行く道を妙月尼の雪沓が踏み固めて歩いて行く。さすが

に足どりは重く、妙月尼は足をとられて転んでばかりいる。
吹雪が強まると前後左右の地形が見分けられなくなり、誤って谷底に落ちるのを避けるために、崖に寄って吹雪が弱まるのを待たなければならなかった。
合海村の手前の切り通しにさしかかるあたりで、暗くなりはじめた。
「黒岩の木戸まで行くのは無理です。合海村に宿を借りましょう」
と、悠市が声をかけると、妙月尼は顔を曇らせた。
「日数がありません。一刻も早く黒岩に参らねば……」
悠市はそれには答えず、莫蓙を引いて歩き出す。日暮れまでに黒岩の木戸に着くことが無理なのは、妙月尼はよくわかっているはずである。
切り通しを抜けると、突風が吹き、妙月尼が倒れた。悠市は妙月尼を抱き起こす。莫蓙につかまらせて、合海村に通じる修羅の跡をたどった。
名主の清右衛門の家は、およそ一月見ない間に雪に埋れて、煙出だけが雪の上にのぞいていた。戸口に下りる穴の上から、
「ごめんなさいよ。いつぞやの大黒舞です」
と、悠市が声をかけた。跡とり息子の清吉が戸口から顔をのぞかせ、悠市を見て驚いて雪の上に這い上がって来た。両刀を腰にした悠市と背後の妙月尼を見くらべ、
「おまえさま、いったい何者だよ」

不審をかくさずにいう。
「すまんな。身分を明らかにするわけにはいかん。この人は尼さんだ。黒岩まで行く途中にこの吹雪にあって、難渋している。また宿を貸してもらいたい」
清吉は舌打ちの音を立てて、悠市の袖をつかみ、妙月尼から数歩離した。
「おまえさんが黒岩の侍たちと悶着を起こしてから、おらほうはひどい目にあったんだ。あのあと、役人がやって来て、おまえさん方とどういうかかわりがあるのか調べられた。おらほうと二面村に、あれから毎日来る。ハア身重のおかねはしょっぴかれるし、親父は役人に絞り上げられて寝こんじまった。さんざんだ」
おかねまでつれて行かれたということは、御付家老を暗殺しようとした若侍たちが、黒岩領にもどってから捕縛されたにちがいない。黒岩の木戸の警戒も厳重になっていることが予想される。
「それは迷惑をかけた」
と、悠市は詫びた。
「ここへ来る前に、切り通しのあたりで、黒岩の見張りに気がつかなかったけの。役人が出張っているんだ」
「気がつかなかった。うかつだ」
雪に足をとられて難渋する妙月尼に、悠市はつい気をとられていた。

「もう見つかったべ。またおまえさまたちを泊めたことが黒岩の役人に知れたら、どだな目にあわされるか知れたものでねえ」

天から緞帳が下がったように、急に暗くなった。雪が降りしきる。妙月尼の笠から雪が塊となって滑り落ちた。清吉は妙月尼を見やった。

「困ったもんだ。ここでおっ放り出したら、行き倒れるしかねえ。こだな吹雪の日にゆかまい坂を歩こうなんて、どだい無理な話だ」

待ってろといって、清吉は家に下りて行った。やがて莚を一抱え持って上がって来た。森を指さして、

「山の神の祠を知ってるべ。あそこなら誰にも知られねえ。明日明るくなる前に、こっそり出て行ってくれ」

といい、悠市に莚を押しつける。それを蒲団代りにしろというのである。

山の神の祠は五尺の高い床がある古い小屋である。山の端にあり、前方は開けたなだらかな斜面、後方は杉林で雪はさほど深くない。屋根には二尺ほどの厚さに雪が積もり、庇から舌のように下がり、長い氷柱が下がっている。

凍りついた戸を、悠市は全身の力をこめて引きあけた。雪と風はしのぐことができるが、寒さは耐えられぬほどだった。障子紙が破れている。悠市は内側から上方の桟に茣

蓙を結びつけて垂らし、風よけとした。

山の空はときどき音もなく光った。祠の中は雪明かりでぼんやりと物が見える。悠市は莚を敷き、妙月尼を坐らせた。妙月尼は頭巾を外した。

「黒岩になにをしに行くのか、話してくださらぬか」

と、悠市が問いかける。妙月尼は悠市が背負って来た荷箱を指さした。

「その中にある日向様の図譜を、郡代山城喜平太様にお届けします。日向様はかねてからある秘策をお考えになり、時期をお待ちになっておりました。その秘策がなんであるのかわたくしは知りませんが、図譜が山城様に届けられたときが、いよいよ決行のときだということでございます」

「このような窮状を一気にくつがえす秘策があるものでしょうか」

悠市には信じられない。

「わたくしは日向様を信じております」

妙月尼はおだやかな口調でいう。

「妙月殿は、御分家のお生まれか」

「はい」

妙月尼はうなずいた。話してよいかどうか迷う様子だったが、

「鬼様と同じ足軽の娘でございました。俗世にあるときは、佳世と申しました。江戸の

お屋敷に御奉公に上がりましたが、宿下りののち、思うところあり、髪を落としました。日向様のお人柄は、江戸のお屋敷におりましたときからよく存じ上げております」

と、話した。

どのような奉公をしていたのか、思うところがあったというのはなにか、妙月尼は語らない。おそらく悠市と似て、他人に知られてはならない奉公をしていたのだろう。悠市はふと妙月尼をひどく近しい同族のように感じた。

「隠居殿は不思議なお方だ。みどもにはよくわかりませんな」

「誠のあるお方です」

妙月尼は一言でいい切った。

障子をふさいだ莫蓙が音を立ててふくらみ、雪が吹きこんだ。ひとしきり、風が強くなった。悠市は一枚残った莚を、妙月尼のほうへ押しやった。

「明日はまた雪の中を急がなければなりませぬ。少しでも眠ったほうがよい」

「鬼様は……」

「こうしても寝(やす)めます」

悠市は冷たい板壁に背をもたせかける。板壁には絵馬がかけられ、板の台の上に溶けたろうそくが三本倒れていた。山の神の神事の名残である。風は山に向かって斜面を吹き上がり、祠は煽られて揺れた。

悠市は目を閉じた。時がたつにつれて寒気が募る。尻が床に凍りつき、背骨がしびれる。歯が鳴りはじめた。ふるえがとまらなくなった。歯を鳴らすのは悠市ばかりではない。妙月尼がくるまる莚からも歯を鳴らす音がもれた。

「鬼様」

と、妙月尼が莚から顔を出して呼ぶ。悠市は応えようとしたが、歯が鳴ってうめき声にしかならなかった。

「こちらへ来てくだされ」

妙月尼が莚をはぎとり、坐り直す。重ね着した白い衣を脱ぎ捨てた。ほのかな薄明かりの中に、白い裸身が浮かぶ。妙月尼は両手で薄い肩をおさえ、ふるえながら、

「凍えてしまいます。早う、こちらへ」

と、いった。素裸で抱き合えば暖かいことは、悠市も知っているが、さすがにためらった。

「鬼と尼の二人づれ、道を踏み外せば、六道(りくどう)闇夜に迷います」

妙月尼は謎めいた言葉をもらし、かすかに笑ったように見えた。

悠市は下帯まですべて脱ぎ捨てた。たがいの着物をまとめてかけ、その上から莚をまとい、肌を合せる。妙月尼の小さな身体は悠市の腕の中にかくれる。妙月尼は悠市の胸に顔をつけ、

「あ、なんと暖かい」

と、つぶやいた。妙月尼の身体は冷えきっている。悠市はしばらくふるえがとまらなかった。

やがて莚の中が暖まった。妙月尼の乳房や太腿が吸いつくように密着し、汗ばんで来た。妙月尼の足が悠市の腿にからんだ。妙月尼が悠市の腕の中で、なにかつぶやいた。一度目は悠市にはききとれず、二度目に、

「六道に迷ってもかまいません」

と、いったように、悠市にはききとれた。悠市は妙月尼を抱いた腕に力をこめた。鬼の掟を破る。家を捨てる。そんな言葉が頭に浮かんだ。

そのとき、戸を叩く音がした。

「逃げろ、逃げろ、気づかれた」

と、押し殺した声でいうのは、清吉だった。直後に銃声がして、谺が返った。

「痛え」

清吉が悲鳴を上げた。悠市は妙月尼を突き放して起き上がる。茣蓙を上げて破れ障子から外の様子をうかがった。雪の上を清吉が這っている。

「痛え、痛え」

と、訴える。斜面の下から、火縄銃を構えた足軽二人を前に立て、数人の武士が雪の中を泳ぐように登って来る。

「妙月殿、討手だ」

悠市は声をかけ、手早く着物を着て両刀を腰に差す。妙月尼は動こうとしない。

「妙月殿、早く仕度を」

悠市が叱りつけるような声を放った。

「わたくしが討手の目を惹きます。鬼様はその隙に、図譜を持ってお逃げください。図譜は必ず郡代様へ……」

そういったとたんに、妙月尼は必死の面もちで全裸のまま立ち上がる。戸を開き、雪の降りしきる中へ両手を広げて飛び下りた。

悠市は図譜を懐に入れ、雪沓をつかむと、裏の窓を押しあけて、杉林のほうへ飛びこむ。背後で銃声がきこえたが、振り返らない。雪沓を履き、樹間を縫って走った。

三

夜が明けはじめた。松ヶ岡では鶏が鳴くが、ここでは鳴かない。雪はやんでいた。

悠市は合海村の裏山から尾根づたいに、木戸を通らずに黒岩領に抜けて来た。郡代屋形は黒岩街道の木戸から二町ほど下った平地にある。屋形をはるかに見下ろす丘の上に、

十戸ほどの貧しげな家が集まる小村があった。そこを通り抜けようとして、悠市は呼びとめられた。

合海村と同じように、家は雪の下にある。若い農民が穴から這い出て来た。

「何処(どこ)さ行ぐ」

と、問いかけ、悠市の風体を怪しんで足元から顔を見上げる。夜が明けぬうちから外を見張っていたらしい。男たちの目が殺気立っていた。

「あそこだ」

悠市は郡代屋形を指さす。男たちはとまどった。

「どこから来たんだ」

と、別の男が問いかける。悠市は黙って振り向き、山の頂を指さした。

「おかしいんだ」

と、男が頭を指さした。もう一人が笑い、

「おまえ、天狗か」

と、いう。

「鬼だ」

と、答えて、悠市は雪の坂を下った。男たちは追って来ない。並んで悠市を見送っていた。

郡代屋形は濠に囲まれている。周囲は雪野原だが、その下は田か畑らしい。門の高張提灯はまだ火を落とさず、雪野原にやわらかな明かりを落としていた。濠には小さな木橋がかかっている。その前に不寝番らしい武士が二人立っていた。

悠市に気づき、武士たちの顔に緊張の色が浮かんだ。

「何者だ」

と、誰何(すいか)して歩み寄る。

「松ヶ岡から日向杢兵衛の使いでまかり越しました。郡代様にお取次を願います」

と、悠市は正直にいった。残された日限はあと三日、郡代山城喜平太に会えなければ、これまでの労苦が水泡に帰す。

武士たちは顔を見合せた。悠市を警戒して刀が届く距離には近づかず、一人が、

「日向様の使いだと、出まかせを申すな」

と、いった。

「届け物がございます」

悠市は懐から図譜をとり出して見せた。

「寄こせ」

声をかけた武士が手を伸ばす。悠市は図譜を懐中にかくした。

「御当人様でなければお渡しできません」

「胡乱な男だ」

もう一人の武士が刀の柄に手をかけて威嚇する。声をききつけて、武士が脇の門から出て来た。

「どうした」

と、いいながら悠市を見て、

「あっ、おぬし。逃げおおせたのか」

と、声を上げる。川南総司郎だった。武士の一人が川南に歩み寄り、片手で口元をかくして耳打ちした。川南は疑わしげに悠市を見た。

「届け物があるならば、拙者が預かろう」

「いまも申しましたが、御当人様でなければお渡しできません。御家の大事にかかわる物だとうけたまわっております。一刻も早くお渡ししなければ、日向様の御身上に危害が及ぶばかりではなく、本家のほうでも騒動になります」

川南はまだ疑っているらしい。

「どうしてもお取次いただけぬとあらば、押してまかり通ります」

悠市が一歩踏み出した。川南がひるんだ。片手を上げ、

「待て。ただいまうかがって参る」

といい、門内に姿を消した。

まもなく川南がもどって来た。

「通られい。腰の物は預かる」

と、いった。悠市は黙って刀をさし出した。

門内の空気は外にも増してものものしかった。悠市を見る武士たちが、まなじりを決している。あたかも合戦におもむく前のようである。

川南は悠市を白洲につれて行った。そこに坐って待てと、指さす。罪人のあつかいである。無礼ではないかと怒鳴りつけたい思いを、悠市はこらえた。

襖がひらき、高い座敷に郡代山城喜平太があらわれた。山城は悠市を見下ろして坐ると、名乗る前に、

「日向殿から届け物があるそうだが……」

と、いった。

「松ヶ岡の足軽、鬼悠市と申します。日向様を拙宅にひそかにお預かりしておりました」

と、悠市は述べ、懐から図譜の束をとり出した。川南がとりついで、それを山城に手渡す。山城は図譜を見た。顔色が変った。

「おお」

と、声を放つと、みずから白洲に下りて、悠市の手を握った。

「御無礼をいたした。お上がりなされ」
といい、悠市を立たせた。
川南は悠市を奥の座敷につれて行った。欅胴の手焙りが置かれているが、炭は入っていない。
「炭を持て。客殿が冷えておる」
と、山城は控えの間の武士にいいつけた。着座するのももどかしげに、山城は杢兵衛の様子を訊ねる。黒岩から御付家老が本家に帰り、城中でなにごとか評議があって、奏者番加納正右衛門は病免、杢兵衛は吟味のため城内につれて行かれたと、悠市は話した。山城は顔を曇らせて耳を傾けた。
炭火をおこして運んで来た若い武士に、川南を呼べと、山城は命じた。素足で廊下を鳴らしながら、川南が急いで来て、敷居の外に片手をついた。
「日向殿からお許しが出た。いよいよやるぞ」
と、山城がいう。川南の顔が輝き、
「はっ」
一礼し、引き退がった。

炭火のおこった手焙りに手をさしのべると、生き返るようだった。手が痛くなった。

雪の沁みついた袖から、湯気が立ちのぼる。
「屋形の内もなにやらものものしい様子ですが、みどもが途中通りかかった村も、殺気立っておりました。ひとつ家に人が集まり、なにやら宵っぴて相談していたと思われます。一揆か強訴でもしかねまじき空気でした」
悠市は両手をこすり合せながら、山城に話しかけた。山城は杢兵衛より四、五歳若そうである。白洲で見たときの印象はいかめしかったが、手焙りの前に坐ると、目尻が下がった温厚そうな顔つきだった。
「うん、一揆の相談だろう」
と、山城は当たり前のことのようにいった。
「そんなことをさせてはなりません。百姓の犠牲が大きくなります」
「させぬよ。そうならずにすむだろう。いまは国中が苛立っている。郡代の拙者が城中に呼び出されて詰め腹を切らされるという噂がこの二、三日流れていてな。まあ、御付家老はそのつもりかもしれんが。日向殿が失脚し、拙者が腹を切らされたら、もう国に救いはないといい出す者がおる」
「半知半給を押しつけられた上に、米札で欺されて暮らしが立ち行かなくなった士分もたいへんですが、兇作に苦しむ百姓もたいへんでしょう。一揆がおこらなければよいがと、松ヶ岡でも心配しております」

「御本家に心配していただくのは恐縮だが、米札の一件については、御本家も責めがないとはいえぬ。拙者にいわせれば、そのような心配はおためごかしだ」

山城は怒った顔になった。米札の差額が江戸に流れるからくりを、山城はとうに見ぬいていたのである。山城は悠市を見て、

「いや、おためごかしと申したのは、御本家の重役のことで、あなたのことではない。気にせんでくれ」

と、いった。

川南が数人の武士とともに、廊下にあらわれた。みな白装束で、白い麻袴の襟元に姓名と享年が墨で書いてある。

「行って参ります」

武士たちは顔をそろえて挨拶をした。

「うむ。あとから拙者も行く」

と、山城が答える。川南が悠市の顔を見つめた。

「あのときはおぬしを恨んだが、いま思えばよくぞとめてくれた。礼を申す」

といい、立ち上がった。

白装束の武士たちが去るのを待ち、

「お城に討入りでもなさる御所存ですか」

と、悠市が問いかけた。

「討入りとは突飛なことを申す。死装束で不時登城をするのだ。あの者たちが死装束で城下を歩くのが、決起の合図。これは日向殿のお考えだ。先ごろ、江戸屋敷で若君御傅の野田九郎右衛門殿がお家の御政道の乱れを怒って自決したことをあなたは耳に入れているかどうか知らんが、野田殿の御遺志を、そういう形で示そうというのだ。城中の大広間を死装束で埋めつくして、わが君の御退隠をお願いする。それが通ればよし、通らなければ、日向殿も拙者も不忠の逆賊となる」

「大広間を死装束で埋めつくすほど同志が集まりましょうか」

「わからぬ。国表では日向殿に心服する者が多いが、江戸ではどうか。あなたが届けた図譜に桔梗の絵がある。それが江戸でも仕度がととのったという合図だった。それにまちがいがなければ、われらは勝てる」

妙月尼が五色沼からお由良のつかわせ物の蜂蜜を届けに来たことがある。その壺の渋紙に、江戸屋敷でも国表の不時登城と軌を一にしてなにかの行動をおこす準備がととのったという報告が書いてあったのだろうか。

「あとは拙者も死装束に着替えて待つだけだ」

山城は手焙りで暖めた両手を見つめて、つぶやいた。

四

日が高くなり、庭の雪が輝いた。雪野原を二十人ばかりの武士が並んで歩いて来た。陣笠をかぶり、槍を持つ武士が数人混ざっている。木橋の前で立ちどまり、

「開門」

と、大声を上げた。門番が内から門をひらく。武士たちは玄関に並び、一人がすすみ出て、

「大目付殿の御下命で参った。山城喜平太殿、出ませい」

と、大声を上げた。

山城は白装束に白い麻裃をつけて、式台に出て行った。両手をそろえて膝に置き、いまにも切腹をしそうに鬼気迫る気迫をみなぎらせて、武士たちを見据える。武士たちは気を呑まれて、立ちすくんだ。

「大目付殿がいかなる御用でございますか」

山城が大目付に語るような言葉遣いで静かに訊ねる。

「さきほど川南総司郎ほか三名が、不時登城と称して白装束の異装にて強訴まがいのふらちなふるまいに及んだ。郡代の使嗾により暴挙に及んだことは明白である。申しひらきがあらば城中にてきく。申しひらきがかなわぬと観念したならば、この場で腹を召せ」

前にすすみ出た武士が読み上げるような口調で声を張り上げた。

「川南たちはどうしておりますか」

と、山城が問いかけた。

「ただいま吟味中でございます」

武士は口調を改めて答える。川南たちは孤立したらしい。あとにつづく者はいなかったのか。山城の表情に翳がさした。

「御同道いただく。さもなければ腹をお切りなさい」

と、武士が迫った。

「拙者は郡代でござる。屋形を離れるわけにはいきません。また、腹を切れとの仰せだが、笑止千万。是非にとあらば、この素っ首落として、持ってお行きなさい」

山城は背筋を伸ばして返答した。大目付配下の武士たちは、上意討ちの指示は受けていない。当惑して顔を見合せた。

「拙者は白洲におります。成敗なさるおつもりならば、勝手にお上がりなさい」

山城はそういい捨てて、座敷にもどった。悠市は山城の前に出て、

「どうなさいますか」

と、問いかけた。手向かいするとなれば、助勢するつもりだった。命がけで働く気になっていた。山城はそれと察して、

「御本家の方に、御迷惑はかけぬ。手出し無用ですぞ」

と、釘を刺した。

大目付配下の武士たちは玄関前で相談し、一人が急いで門外に出て行った。あらためて大目付の指示を仰ぎに行ったのである。山城は白洲の座敷に座を移した。そのまま泰然として動かない。

「御注進、御注進」

と、遠くで叫ぶ声がした。屋形の武士のあとにつき、悠市は庭に出た。中間（ちゅうげん）が飛び跳ねるように足を雪から抜きながら、駈けて来た。

門の前で中間はもう一度、

「御注進」

と、叫んだ。白装束の山城が縁側に姿をあらわす。中間は庭の雪の上に坐りこみ、懐から書きつけをとり出して、読み上げた。

「御家中石川市郎兵衛様、林十郎右衛門様、石川太右衛門様、北郷十馬様、ほか二十二名様。御徒（おかち）安達喜兵衛様、山崎平太様、加藤清治様、ほか十名様。御小姓高橋忠八様、松田兵太夫様、ほか二名様。御役人渋谷九郎兵衛様、田中十助様、菅原半兵衛様、ほか

二十五名様。御足軽小頭斎藤新六様、ほか二名様。御足軽衆、御中間小頭三浦治衛門様、御中間衆、大庄屋二名、しめて百数十名御登城。みな様、白装束でございます」

「大庄屋も登城したか。これで村方の覚悟が示された。御小姓の高橋と松田まで白装束を着たのは心強い。よく決心してくれた」

山城は膝を打った。

「まだまだ、御登城の方々がございます」

中間は感激の余り声を放って泣きだす。

「ありがたい。日向殿の赤誠が通じた」

山城は白袴の膝を両手で握りしめ、天を仰いだ。

「よし」

と、みずからを鼓舞する声を放ち、縁側に立つと、屋形の武士たちに、

「遅れてはならぬ。われらも総登城だ」

と、命じた。

大目付の配下の武士たちはいつの間にか姿を消した。

その日、山城が願った通りにさして大きくない平城の黒岩城の大広間は、白装束の武士たちで埋めつくされたのである。夜がふけてから、屋形にもどって来た川南総司郎がそう語った。

「右を見ても左を向いても、決死の覚悟を秘めた顔、顔、顔。おお、叔父御がおいでだ、従兄弟もいる、剣術の稽古仲間も藩校の朋輩も来たと、知った顔を見ているうちに、不覚にも泣けて来た。わずか一刻前まで、不時登城はわれら数名だけで、城内の牢屋敷で人知れず殺されてしまう運命かとあきらめかけていただけに、その感激はひとしおでござった。拙者が持参した嘆願書は、とり上げられてしまったが、つぎつぎに死装束で大広間に集まった人々が、それぞれの嘆願書を上る。これは文面を誰かが決めて指示したのではなく、おのおのが思うところを述べたのだろうが、みなの思いは同じだ。日向杢兵衛殿が主君交代を求めたのは、不忠で過激な論のごとくに見えるが、御家を滅してはならぬという衷心から出たやむにやまれぬ嘆願だから、これを受け入れよ、というのだ。御付家老の奥谷帯刀は、われらが見るところでは家政を壟断して上下困窮の極みに逐いやった張本人だが、はじめは不忠者、慎め、などと叫んでおった。だが、あまりにも多くの死装束が押しかけたものだから、胆を潰して黙りこみ、しまいには病気と称して退席してしまったよ。胸が苦しくなったのはほんとうらしい。拙者などのおる末座からも、顔蒼ざめ脂汗を流して苦しげに見えたからな。いい気味だ」

口角に泡をためて、興奮をおさえきれずに一気にしゃべった。

「郡代様はいかがいたしました」

「城中に残り、重役たちと評定をつづけておられる。明日は、きょう出遅れた面々も登城する。飛地の代官所へも、手代や村役人が嘆願書を懐に押しかけているとの知らせも届いた。あとは江戸の御屋敷だ。大勢は決したが、江戸の動きしだいで、早くもなり、遅くもなる」

川南はしゃべりながら武者ぶるいをした。

新年役替の一月十五日まで中一日残した夜、悠市はひそかに松ヶ岡の竹林の家にもどった。

床下から入りこむと、妙月尼と一緒に脱出したときのままに、床板が上がったままになっていた。悠市は胸せまる思いがした。土間に下り、手探りで水桶を引き寄せる。底に水がたまっていた。

手が勝手に動いた。一日二度、朝と晩に竹を割く何種類もの小刀と鉈を手入れするのが、長年の習慣である。仕事場から道具を持って来て、暗がりの中で研ぎはじめる。小刀の刃が砥石を滑るかすかな音を耳にすると、自分の居場所にもどったやすらぎを覚えた。

戸を叩く音がした。悠市は濡れた小刀を手にして、戸口に歩み寄った。

「鬼、いるか。竹熊だ」

「ここにおります」

「帰ったか。この三、四日留守のようだが、どこに行っておった」
「熱を出して臥せっておりました」
と、悠市が答えると、戸の外でおし殺した笑い声がきこえた。
「たったいま床下に大きな鬼が入りこんだところを見た。足軽目付を甘く見るなよ」
「寝ておりました」
悠市はあくまでも白を切った。
「それならば寝ていたことにしておこう。今夜までは黙って見のがしておこうと思っていたのだ。しかし明日になったら、鬼が封印を破って逃亡したと、大目付殿に届けを出そうと思っていた。誰しも我が身がかわいいからな。鬼と心中する気はない」
悠市は答えない。少し間を置いて、
「今朝あたりから、城内の動きがあわただしい。重役の家来たちが出たり入ったりしている。例年であれば、新年の役替はすでに内定していて、われわれのところへも噂が伝わって来るものだが、今年はこの二、三日ぴたりと噂がとまった。なにか変ったことが起こりそうだが、鬼がそこに一枚嚙んでいるのではないか」
と、いった。
「いいえ。存じません」
「知っていても話せぬわな」

竹熊は悠市の言葉を信じていない。
「去年の暮れまで、加納様が御奏者番を免ぜられ、慎みとなるやに伝えられていたのだが、今日あたりの様子を見ると、門を閉ざしているはずの加納様の御屋敷に、人の出入りが繁くある。死んだふりをして、なにか裏で画策していたと、拙者は睨んでおる」
「存じません」
分家のほうはどうやら日向杢兵衛が巻き返す形勢だが、それが本家の松ヶ岡にどう波及するのか、悠市は不安を抱いていた。分家の反乱をおさえつけようと、本家の重役たちが逆に強硬手段に訴えるかもしれないという心配さえあった。
だが、どうやらなにか動きがありそうでいくらか希望が持てる。
「ではさて、帰るとするか。慎みとなって以来、鬼は囲炉裏に火を入れていないようだが、冬の間はそのくらいの御慈悲はある。薪を焚いてもかまわぬよ」
竹熊が戸口を離れる気配がした。

五

決着の朝が明けた。悠市は雪を囲炉裏の鍋にかけて融かし、その水で全身を拭き清めた。髪を洗い、長く伸びた総髪を元結で束ね、下帯から袷まですべて新しい物に替えた。

道具はすべて研ぎ上げ、片づけて、いざというときに見苦しくないように身辺をととのえた。囲炉裏の火に灰をかけ、両刀を前に並べて正座し、使者を待った。なすべきことはしたという満足感があった。

やがていくつもの足駄が凍った雪を踏む音が近づいて来た。足駄の音が戸口の前でやむ。しばらく間を置いてから、突然大きな音が響いた。外から戸に板を打ちつけてあったが、その釘を引き抜いたと同時に、屋根の雪が一気に滑り落ちたのである。

戸がひきあけられ、まばゆい光がさしこんだ。胸を洗い清めるような新鮮な空気が流れこんで来た。屋根から落ちた雪を浴びた竹熊が、まっさきに入り、肩と頭を払って土間に雪を散らした。

「喜べ、赦されたぞ」

竹熊は剝がした封紙を悠市に見せた。

「ありがたきしあわせに存じます」

悠市は型通りに口上を述べて、平伏した。竹熊は表に向かって、

「柿太郎、もう入ってよいぞ」

と、声をかける。八幡社の宮司沼山岩根につれられて、柿太郎が土間に入り、

「ただいま帰りました」

と、挨拶をした。柿太郎はうれしそうに家に上がり、奥に入った。岩根は竹熊に遠慮をして、悠市に軽く会釈をしただけで、立ち去ろうとする。

「柿太郎が世話になった。あとでゆっくり礼を述べに行く」

と、悠市は岩根の背中に声をかけた。

竹熊は足軽目付と手先に合図をして立ち去らせると、囲炉裏の前に坐りこみ、火箸で灰の中から熾をかき出し、封紙を投げ入れる。小さな炎が上がり、すぐに燃えつきた。

「加納様が御奏者番に返り咲かれた。返り咲かれたというより、もともとそのような役替は決まっていなかった、ということになったわけだ。あれほど騒いで、なにも変らぬ。狐につままれたようだとはこのことだ」

人事の噂を好む竹熊が、不満そうな口ぶりで話した。加納の失脚をはかった甘木湊の城代も中老も、もとのままだった。しかし加納が二人に恩を売り、発言力を強めることは疑いない。

「加納様の御屋敷に夕方来いとの仰せだ。なにか褒美が出るのではないか」

と、皮肉な口調でいい、竹熊は肩をそびやかして帰って行った。

悠市は竹熊からいわれた通りに、日暮れ前に大手門前の加納の屋敷を訪れた。玄関は遠慮をして勝手口から入ると、小勝手と呼ぶ座敷に祝い物が山積みされているのが目に入った。つい数日前まで、加納の追い落としに加担していた武士たちが、風向きを見て掌を返したように、つけ届けをする。

広座敷では酒宴の仕度がととのい、台所では手伝いの男女があわただしく動きまわっている。悠市が通されたのは、周囲を襖で仕切られた小座敷だった。膳が二つ置かれ、銚子と盃、旬の鱈の煮つけが載った大皿がある。まもなく加納が襖をあけて小座敷に入り、悠市と向き合って膳についた。

「まあ、おたがいに、首がつながって、よかった」

加納はつまらなそうにいい、銚子をつまんで片手を煽り上げて、悠市に盃をとらせた。手ずから酌をするのが、褒美のつもりらしい。悠市が返盃をした。

「このたびのことでは、鬼には世話になったらしいな」

「いいえ、なにもできませんで」

「心にもない謙遜をするな。御分家のほうから、話は伝わっておる。くわしいことはきかずにおくが、鬼の働きがなければ、いまごろわしは毒を盛られて土の下にいるところだ。さきほど江戸から急飛脚が着いた。御分家の江戸屋敷でも、若君の御家来衆を先頭に立てて、大勢が広間に坐りこんで嘆願いたしたそうだ。さすがにあちらでは、死装束で集まるわけにはいかなかったようだが、これで流れが決した」

「それで脱藩人も一揆もなくなるでしょう」

悠市はようやく安堵した。加納に日向杢兵衛の暗殺を命じられる心配はなくなった。

「これで当面はおさまるが、御分家に金と米がないことに変りはない。この春に餓死者

を出さないことが先決だ。江戸に集まった米札を買いもどして、額面通りの米を御分家にやることにしたよ。本家も苦しいが、そのくらいはできる。その分は御分家の借金ということになる。火の車の車輪が大きくなっただけかもしれぬが……」

「日向杢兵衛様というお方は、たいした御仁でございますな。なにもせずに草花の絵ばかり描いているようで、いつの間にかあれほどの計画を立てておられる」

「殺さなくてよかった。まことにそう思う。そのことだが、隠居殿は明日御分家にお返しすることになった。御隠居のたっての望みで、鬼を付き添わせる。鳥籠をひとつ持って、夜明けに大手門まで来い」

加納はそれだけいうと、存分に呑んで行けといい置き、広座敷の宴席に移った。

悠市は長居をせずに加納の屋敷を辞した。竹林の家まで来て、二挺の駕籠が置かれているのが目に入った。駕籠の棒から下がった提灯が雪を照らす。五色沼の駕籠だった。

「いま帰った」

と、声をかけると、柿太郎がほっとした顔つきで出て来た。

「父上、お客様がお待ちです」

客の応対に困っていたらしい。悠市が戸口からのぞくと、白頭巾の尼が二人、囲炉裏の前に坐っていた。尼たちは向きを変えて坐り直し、床に両手をついた。

「や、妙月殿」

生きていたのである。悠市は思わず声を上げた。もう一人は若い照月尼だった。

照月尼はひとかかえもありそうな包みを前に押し出した。

「日向様が明日御分家にお帰りになるとうかがいました。五色沼のお方様からのお届け物でございます。日向様がいずれ江戸にお上りになるときお召しいただきとうございます」

結び目から、反物を包む畳紙がのぞいた。

「うけたまわりました」

と、悠市が答えた。二人の尼僧は顔を見合せ、目で合図をする。照月尼が先に立ち、妙月尼が残った。柿太郎は照月尼を送り、外に出た。

「よく生きておられた。背後で鉄砲の音をきいたときには、胸の裡で念仏を唱えました」

妙月尼はうつむいて笑いをかくした。

「尼があのような姿で飛び出したものですから、御分家の役人たちは、狂女と思ったのでしょう。すぐに放免になりました。清吉さんも、脚に弾が当たりましたが、命は助かりました」

「それはよかった」

「それにしても、鬼様のおかげで、わたくしは大恥をかきました。けれども、うれしゅうございました」

妙月尼が潤んだ目で悠市を見上げる。悠市は柄にもなく顔を赧らめた。

文春文庫

©Yoshio Takahashi 2006

かげろう飛脚（ひきゃく）

定価はカバーに表示してあります

鬼悠市（おにゆういち）風信帖（ふうしんちょう）

2006年12月10日　第1刷

著　者　高橋義夫（たかはしよしお）

発行者　庄野音比古

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23　〒102-8008

TEL　03・3265・1211

文藝春秋ホームページ　http://www.bunshun.co.jp

文春ウェブ文庫　http://www.bunshunplaza.com

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社製作部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・大日本印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN4-16-757209-5